

平成20年度

# 第14回日教弘教育賞

## 教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える





## 未来を切り拓く教育の振興のために

財団法人 日本教育公務員弘済会  
会長 山田 篤

財団法人 日本教育公務員弘済会は本年創立57年目を迎えます。

この間、教育の振興と教職員の生活防衛、福祉向上への熱き思いを体し本・支部一体となって寄付行為に定める1. 奨学、2. 研究助成、3. 福祉、4. その他前条の目的を達成するために必要な事業を推進してまいりました。

平成7年度より制定した「日教弘教育賞」も本年度で14回目を迎えます。

制定主旨は、「教育愛に燃え、子どもたちの未来のためひたすら努力している教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励を意図したものであり、また優れた研究論文を収録して、全国の学校に紹介することは、21世紀に生きる子どもたちの教育に大きく貢献するものである。」です。

本年度も都道府県支部のご協力を得て全国から多数の論文の応募をいただきました。ご応募いただいた論文は、いずれも、質・量ともに充実したものが多く、教育へのひたむきで旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。

その中から各支部推薦（2編以内）の教育論文 学校部門52編、個人部門29編の計81編を審査、別掲の結果となりました。

審査にあられた皆様とそれまでお力添えをいただいた各支部の皆様に心からの謝意を表し、そのご協力に御礼を申し上げます。

さて、約60年ぶりに改正された教育基本法に基づき、昨年7月に「教育振興基本計画」が閣議決定され、今後10年間を通じて目指すべき教育の姿を明らかにするとともに、今後5年間（平成20～24年度）に総合的かつ計画的に取り組むべき施策として次の4つの基本的方向が示されました。

1. 社会全体で教育の向上に取り組む。
2. 個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として、社会の一員として生きる基盤を育てる。
3. 教養と専門性を備えた知性豊かな人間を養成し、社会の発展を支える。
4. 子どもたちの安全・安心を確保するとともに、質の高い教育環境を整備する。

本集録には、この基本的方向に沿った、研究報告、実践記録が多数掲載されております。

例えば、地域の強い絆の下で、家庭・地域が一体となった学校の活性化への取組、専門高校の地域資源を活用した地産地消を目指す産学連携の取組、子どもたちの豊かな情操や規範意識、公共の精神を育む道德教育の取組、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちへのメディア・リテラシー教育の取組、共同教育を進め相互理解を深める特別支援教育の取組、体験活動を取り入れた地球温暖化へのエネルギー環境教育の取組、子どもの体力低下が問題となっていることへの学校での体力向上の取組、等々です。

本教育研究集録が、未来を切り拓く日々の教育実践のお役に立てば幸いです。



## 新教育課程への糧として

審査委員長

文部科学省初等中等教育局主任視学官

田 中 孝 一

第14回日教弘教育賞の受賞者の皆さん、このたびのご受賞、まことにおめでとうございます。また、受賞者の皆さんの教育研究論文の収載された『日教弘教育賞教育研究集録第20集』が刊行されましたこと、併せてお祝い申し上げます。

本教育賞は、「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場からの実践を顕彰するものです。本年度も、数多くのすばらしい論文に接することができました。

さて、学校教育は、児童生徒、家庭、地域社会なども含めた学校の実態を踏まえて、組織的、計画的に行われます。もとより、学校教育には、将来、社会の中心となる児童生徒を育てる役割があります。すなわち、学校教育は、常に、将来すなわち「明日」を見据えて行われています。その意味で、本教育賞の上述の立場は学校教育の本質に沿っているということが出来ます。

折しも、各学校では、まもなく、平成21年度から、新教育課程への移行が始まります。

教育課程の基準の根幹である新学習指導要領（小学校及び中学校）は、平成20年3月28日に告示されました。文部科学省は、本年度、平成20年度を、その趣旨や内容等についての理解の徹底する期間と位置付け、中央説明会及び地方説明会を全国で開催しました。併せて、学習指導要領の冊子を全先生方に初めて配布しました。

高等学校及び特別支援学校の学習指導要領は、平成20年12月にその案が公表され、広く国民への意見募集も行われました。今後、所要の手続きを経て、本年度内に告示される予定です。

本教育賞でいう「明日の教育」は、小学校から高等学校に至る、これらの新学習指導要領の実施によって、今後、更に内容豊かに実現されていくものです。

新学習指導要領は、現行教育課程を継承して、生きる力の育成をねらいとしています。そのねらいの実現を図るため、様々な手立てを凝らしています。

今回の学習指導要領の改訂は、教育基本法の改正（平成18年12月）及び学校教育法の改正（平成19年6月）に対応して作成されています。改訂に際しこのような経緯のあったことは、従前の改訂とは大きく異なるところです。したがって、今回の学習指導要領については、新教育基本法、改正学校教育法を併せて理解することが肝要です。

加えて、新学習指導要領の、次のような改善事項について、その趣旨や内容等についてご理解いただきたいと存じます。

- 言語活動の充実      ○ 理数教育の充実      ○ 伝統や文化に関する教育の充実
- 道徳教育の充実      ○ 体験活動の充実      ○ 外国語教育の充実

このうち、言語活動の充実は、新学習指導要領の実現のための最重要課題の一つであり、国語科だけでなく、各教科等においても強く求められています。

今回の受賞論文も、例年どおり労作ぞろいでした。さらに、新学習指導要領の趣旨にも沿い、これからの学校教育の向かうべき方向を示唆する実践も多くありました。その意味で、各受賞論文は、新年度からの新教育課程への移行に際し、全国的に普及していく糧となると思われるものでありました。この成果を受け、各受賞者が、児童生徒のために、これからも更に力を尽くされるよう心から期待いたします。

最後に、本教育賞主催の財団法人日本教育公務員弘済会に対し、深甚の敬意と謝意を表してごあいさついたします。



## 記録のすすめ ～審査を終えて～

第一次審査委員長  
秋田支部支部長  
相馬 弘 直

今年度の応募総数は81編（学校部門52編・個人部門29編）であったが、その中から最終審査を経てみごとに入賞されました皆様方、誠におめでとうございます。

又、最近学校は多忙であるとよく聞きますが、そんな状況下で81編もの応募があった事に対しても敬意を表したいと存じます。

第一次審査は、各ブロックの代表1名ずつの8名に本部から役員1名加わって9名で実施。9名を個人部門と学校部門に分け別々に審査いたしました。

各審査委員の方々も学校部門52編、個人部門29編を事前に十分読み込み、検討を加えて審査会に出席しており、その仕事量の多さに対しましても敬意を表します。

事前検討の観点は次のようなものです。

①論文として良い点、不備な点 ②研究課題からみてどうか ③現代の教育課題に適切に対応しているか ④授業の改善に役立つのか ⑤子どもの主体的な変容、発達の姿が見られるか ⑥理論と実践が一体となっているか ⑦他の学校でも活用できるか ⑧論文としての展開や文章構成はどうか ⑨論旨や意見は明確であるのか……等々でしたが、十分議論をつくり慎重に審査した結果、個人部門、学校部門合わせて14編が選考され二次審査へ推薦されたわけであり

ます。

話し合いの過程で、各委員から出された主な意見を次に紹介しておきましょう。

1. 環境の問題を取り上げた論文が多く見られ、現代の状況をよく表わしている。
2. 学校や学級の子どもが、互いに教えあいながら共に伸びていくものが多くなっていることは、望ましいことである。
3. 子どもの姿や変容がわかるものが少なくなっている。学校現場が忙しいからなのだろうか。子どもの実践を中心に論を展開してほしいものである。
4. 論文の形式からはずれているものもあり、残念である。最低限示された条件は守ってほしいものである。
5. 応募要件の一つに、すでに他の公的機関に発表したものは除くとあり、それに抵触する論文が2～3あった事は残念である。今後十分留意してほしい。
6. 資料や図表を論文の中にそう入する事は、論文をわかりやすくする為には良いが、あまり小さくてよく見えないものがある。そう入する場合は、一部を大きくわかりやすく見える範囲でそう入する等の工夫も必要である。
7. 論文内容を相手にわかりやすく伝えるには、用語や表現方法を工夫し、十分に練った文章にして記述してほしい。
8. 全国的な応募状況はどうなっているのかについても、過去と現在を比較し把握しておく必要がある。

ところで、論文は何の為に誰の為に書くのでしょうか。教師をしている以上教育実践はつきものであります。日頃の教育実践をそのままにしないで「記録」に残しておく事をおすすめします。記録に残しておく事は、自分自身の過ぎ去った足跡でもあり、長い間実践してきた証でもあります。

更に記録は、後で見る事によって客観的に冷静に授業や実践を改善する事につながります。「教師は授業で勝負」とか「教師は教育のプロ」等と言われますが、客観的な記録なしには次への発展はありません。そのような意味から、毎回でなくても一年に数回とか、ある単元を限定して記録に残しておけば、あとで実践への改善の資料になり、改善する事により最終的には子どもたちへ還元されるという事でもあります。

学校では、忙しいとはいえ実に色々な良い試みを実践しています。記録に残し、次回の論文応募へとつながってほしいものです。

## 第14回日教弘教育賞 審査委員

(順不同一敬称略)

### 《審査委員》

文部科学省初等中等教育局主任視学官	田中 孝一
帝京大学名誉教授	亀井 浩明
元埼玉県上尾市立東小学校校長	吉泉 幸枝
第一次審査委員会委員長	相馬 弘直
財団法人日本教育公務員弘済会常務理事	宮腰 東海

### 《第一次審査委員》

委員長	北海道・東北ブロック	相馬 弘直 (秋 田)
委員	関東北ブロック	柿沼 敬二 (栃 木)
委員	関東南ブロック	山田喜代司 (神奈川)
委員	東海・北陸ブロック	高橋 正俊 (石 川)
委員	近畿ブロック	小卷 建一 (兵 庫)
委員	中国ブロック	河原井一之 (岡 山)
委員	四国ブロック	五百木教男 (愛 媛)
委員	九州ブロック	守屋 至英 (宮 崎)
委員	日教弘常務理事	宮腰 東海 (本 部)

# 《目 次》

## ◇あいさつ

財団法人 日本教育公務員弘済会 会長 山田 篤 …………… 3

審査委員長  
文部科学省初等中等教育局 主任視学官 田中 孝一 …………… 4

第一次審査委員長 秋田支部 支部長 相馬 弘直 …………… 5

## ◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧 …………… 8

### ●『最優秀賞』2編

《学校部門》 大阪市立啓発小学校 校長 平 力……………18

《個人部門》 沖縄県立北部農林高等学校 教諭 東江 直樹……………22

### ●『優秀賞』4編

《学校部門》 岐阜県岐阜市立芥見東小学校 校長 大竹 恵子……………26

愛知県豊田市立足助中学校 校長 藤澤 卓美……………30

《個人部門》 宮城県石巻工業高等学校 教諭 門脇 宏則……………34

奈良県山添村立山添中学校 教諭 宮久保ひとみ ……………38

### ●『優良賞』6編

《学校部門》 島根県立出雲養護学校大田分教室 校長 江角 仁……………42

香川県さぬき市立志度中学校 校長 岡田万里子……………46

高知県香南市立野市小学校 校長 時久 恵子……………50

宮崎県東臼杵郡門川町立門川小学校 校長 児玉 和盛……………54

《個人部門》 香川県高松市立花園小学校 主任 新谷 良子……………58

長崎県五島市立椛島小学校 教諭 白石千穂子……………62

# 平成20年度・第14回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

## ◎学校部門

### ◆最優秀賞

【大阪府】 子どもも大人もエンパワーされる「むくのき学舎」をめざして  
－地域の教育力の活用と新たなコミュニティづくりへの挑戦－  
大阪市立啓発小学校 校長 平 力

### ◆優秀賞

【岐阜県】 希望と自信をもち、自己の生き方を見つめる子をめざして  
－道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を高める指導の在り方－  
岐阜県岐阜市立芥見東小学校 校長 大竹 恵子

【愛知県】 自立の基礎を育てる  
－地域に根ざしたキャリア教育の推進を通して－  
愛知県豊田市立足助中学校 校長 藤澤 卓美

### ◆優良賞

【島根県】 地域と共に歩む分教室をめざして  
－隣接する中学校との共同教育を進め、相互理解を深めるための取り組み－  
島根県立出雲養護学校 大田分教室 校長 江角 仁

【香川県】 支え合い、つながり合うなかまづくり  
－劇づくりを通して－  
香川県さぬき市立志度中学校 校長 岡田万里子

【高知県】 発信します！野市小学校の環境教育  
－児童が主体的に学ぶ力を高め、地域や社会の一員としての自覚を高めるエネルギー環境教育－  
高知県香南市立野市小学校 校長 時久 恵子

【宮崎県】 運動に親しみ、心身ともに健康な体をつくらうとする児童の育成  
－体育科学習指導の工夫と体力向上の取組をとおして－  
宮崎県東臼杵郡門川町立門川小学校 校長 児玉 和盛

### ◆奨励賞

【北海道】 「学ぶ意欲をはぐくむための実践的研究」  
－生徒一人一人が意欲をもって取り組む授業づくりへの挑戦－  
北海道留萌市立港南中学校 校長 小谷 宣雄



- 【青森県】 ものづくり教育を活かした学校教育の活性化と地域社会への情報発信  
ーロボット製作を通して、子供達の“夢”を育む活動ー  
青森県立弘前工業高等学校 校長 浅利 能之
- 【秋田県】 もって生まれたものを深く探って強く引き出す生徒の育成  
ー三つの合い言葉の下での3年間の歩みー  
秋田県大館市立第一中学校 校長 高橋 秀一
- 【山形県】 学びいきいき 地域いきいき いのち育む環境教育  
ー蔵王の自然や文化を通してー  
山形県山形市立蔵王第二小学校 校長 荒澤 賢雄
- 【山形県】 「こころ」をつなぐ食育をめざして  
ー地域から愛情・地域に元気をー  
山形県大江町立左沢小学校 校長 犬飼 藤男
- 【福島県】 感動・追究・未来  
ー身近な自然に感動し、未来をつくっていくあだたらっ子の育成ー  
福島県二本松市立安達太良小学校 校長 小林 淑人
- 【福島県】 『かわり合い高め合う力を育てる教育』  
ー協調解決能力を高める授業の工夫ー  
福島県石川町立石川中学校 校長 富岡 高春
- 【群馬県】 郷土を愛し、誇りをもてる児童の育成  
ー尾瀬に一番近い学校の子どもたちによる尾瀬学習を通してー  
群馬県利根郡片品村立片品北小学校 校長 青木美穂子
- 【群馬県】 野菜も生長 心も成長 地域とふれあう 楽しい食農学習  
群馬県前橋市立元総社中学校 校長 吉原 隆志
- 【新潟県】 英語活動に意欲的に取り組み、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成  
ーTT授業の在り方ー  
新潟県佐渡市立金井小学校 校長 山川 辰也
- 【新潟県】 小中連携教育の推進  
ー9年間の子どもの成長を願ってー  
新潟県東蒲原郡阿賀町立三川中学校 校長 加藤 久
- 【長野県】 8年目の教え  
ー中部小 全校ミュージカルの軌跡ー  
長野県木島平村立中部小学校 校長 野口 博文
- 【茨城県】 健全な職業観や勤労観を育むキャリア教育の在り方  
茨城県小美玉市立玉里中学校 校長 高橋 貞二



- 【茨城県】 不登校ゼロへの挑戦  
ーコミュニケーション力の育成ー  
茨城県結城郡八千代町立八千代第一中学校 校長 生井 修
- 【東京都】 「夢」プラン構想  
ーPISA型「読解力」の考えを基盤とした授業改善を基軸にー  
東京都足立区立梅島小学校 校長 川上 彰久
- 【神奈川県】 地域の教育力を取り入れた学校づくり  
ー小中連携から地域連携をめざした実践ー  
神奈川県川崎市立中野島中学校 校長 深澤 恵
- 【神奈川県】 地域に貢献できる生徒の育成を目指して  
神奈川県茅ヶ崎市立松浪中学校 校長 池田 雅之
- 【千葉県】 心身ともに健康で心豊かな子どもの育成  
ー豊かな体験「と(図書)・し(自然・食)・ひ(人)・ろ(労働)・う(運動)」の奨励と学級活動を通してー  
千葉県南房総市立朝夷小学校 校長 安西 和彦
- 【山梨県】 「共に学び、共に育つ、豊かな心をもった大里の子」の育成  
ー自己肯定感をはくぐむ道德教育を通してー  
山梨県甲府市立大里小学校 校長 桜林 俊一
- 【富山県】 「今日が楽しく、明日が待たれる学校」  
ー地域の教育力を活用した開かれた学校づくりを目指してー  
富山県富山市立奥田中学校 校長 藤岳 見昭
- 【富山県】 理科学習における授業の改善を目指して  
ー「教育資源との連携」を通してー  
富山県魚津市立住吉小学校 校長 平野 洋次
- 【岐阜県】 不登校生徒の減少に向けた取り組み  
ー【居場所づくり】から【絆づくり】へー  
岐阜県白川町立白川中学校 校長 瀬藤 政昭
- 【愛知県】 「互いの思いや考えを進んで伝え合うことができる児童の育成をめざして」  
ー確かな音声表現を伸ばす指導方法の工夫ー  
愛知県蟹江町立蟹江小学校 校長 伊藤 昭三
- 【三重県】 一人一人を大切に、お互いを認め合える子をめざして  
ー学校・家庭・地域とのさらに深いかかわりを求めてー  
三重県志摩市立甲賀小学校 校長 大西 久子
- 【三重県】 ものづくりを通しての実学の重要性和専門高校の今後のあり方  
三重県立津工業高等学校 校長 高田 宏司



- 【滋賀県】 9年間を見通した人間力を高める指導のあり方を求めて  
－まなび・ふれあい・そだちを大切にした鳥居本教育の創造－  
滋賀県彦根市立鳥居本中学校 校長 吉寄 治彦
- 【京都府】 地域をつなぎ・結ぶアジサイプロジェクト  
－環境を守り・環境を育て・環境を創る－  
京都府京都市立蜂ヶ岡中学校 校長 井上 方志
- 【兵庫県】 小学校でのキャリア教育を考える  
－地元の仕事・人々からの学びを通して－  
兵庫県西脇市立重春小学校 校長 中村 耕造
- 【和歌山県】 自立する子を目指して  
－芦原の人権教育・・・生活指導と学習指導の一元化の取組－  
和歌山県和歌山市立芦原小学校 校長 野田真知子
- 【鳥取県】 大山の恵み教育構想「命の源流大山から学ぶ」  
－地域を生かす学校教育のあり方を求めて－  
鳥取県西伯郡大山町立大山小学校 校長 金田 吉人
- 【島根県】 読解力育成の視点からの授業改善  
島根県江津市立青陵中学校 校長 濱岡 繁人
- 【広島県】 言語で伝え合う能力の育成  
－自己学習力の育成により伝え合う能力を高めていく授業の追求－  
広島県尾道市立木ノ庄西小学校 校長 亀川 正臣
- 【広島県】 論理的に考え、豊かに表現する生徒の育成  
－小中連携をいかし、ことばの力を高める取り組みを通して－  
広島県竹原市立吉名中学校 校長 和田 幸治
- 【山口県】 自己を振り返り、高まろうとする子どもの育成  
－能動的自己評価の取組を通して－  
山口県防府市立大道小学校 校長 古谷 尋伸
- 【徳島県】 地域と共に歩む防災学習  
－将来の津田・新浜町のリーダー育成を目ざして－  
徳島県徳島市津田中学校 校長 佐藤 利弘
- 【愛媛県】 美術における感性の教育実践  
－心を掘る。そして社会へ－  
愛媛県立三島高等学校 校長 亀島 啓喜
- 【愛媛県】 確かな「国語力」を身につけさせるために  
－活気ある図書館作りの取組－  
愛媛県立松山聾学校 校長 家藤武士枝



- 【福岡県】 すみよっ子の論理的な思考力の育成  
－説明文を読む指導法の研究を通して－  
福岡県福岡市立住吉小学校 校長 一木 信治
- 【福岡県】 進学中心の高校における職業観の育成のための取組  
福岡県立城南高等学校 校長 荒木 裕幸
- 【宮崎県】 いじめ・不登校への積極的な対応はどうあればよいか  
－一人一人を大切にす生徒指導、心の居場所のある学校づくりをめざして－  
宮崎県都城市立上長飯小学校 校長 江田 茂典
- 【熊本県】 主体的に学習に取り組み、思いを生き生きと表現する児童の育成  
－読み取ったことを「書くこと」へつなげる国語科授業の創造－  
熊本県人吉市立人吉東小学校 校長 大石不器夫
- 【熊本県】 一人一人の子どもが生き生きと活動する学習の創造  
－自信をもって自分を表現する力を育てる指導と評価の工夫－  
熊本県熊本市立大江小学校 校長 小田 隆一
- 【鹿児島県】 児童一人一人に基礎的・基本的な内容を確実に定着させ、生きる力を育む学習指導のあり方  
－算数科における指導を中心として－  
鹿児島県屋久島町立神山小学校 校長 上之園建二
- 【佐賀県】 楽しさを味わい、確かな学力を身につけた子どもの育成  
－イメージをふくらませ、学び合い、ともに伸びる算数科学習を通して－  
佐賀県伊万里市立伊万里小学校 校長 黒木 善宏
- 【沖縄県】 進路決定100パーセントを目指して  
－生徒と保護者の願いを叶える教育の実践－  
沖縄県立伊良部高等学校 校長 玉津 博克



## ◎個人部門

### ◆最優秀賞

- 【沖縄県】 地域資源を活用した農業教育の取り組み  
－琉球在来豚の繁殖と利用による地産地消を目指した産学連携の試み－  
沖縄県立北部農林高等学校 教諭 東江 直樹

### ◆優秀賞

- 【宮城県】 地域の課題解決を通じた科学技術教育の展開  
－ホヤ殻から新素材開発へ－  
宮城県石巻工業高等学校 教諭 門脇 宏則

- 【奈良県】 国語科が推進するメディア・リテラシー教育  
－情報社会における国語科の使命－  
奈良県山添村立山添中学校 教諭 宮久保ひとみ

### ◆優良賞

- 【香川県】 円滑な学校運営に資するための「学校事務」を目指して  
－事務職員も経営者意識を持って－  
香川県高松市立花園小学校 主任 新谷 良子

- 【長崎県】 自己と対話する作文指導のあり方  
－島で一人の5年生、半年間の記録－  
長崎県五島市立椏島小学校 教諭 白石千穂子

### ◆奨励賞

- 【北海道】 黒板は、なくなるのか？わかる授業を支える板書を考える  
－社会科・総合的な学習を通して－  
北海道札幌市立山の手南小学校 教諭 朝倉 一民

- 【青森県】 学びから行動へ  
－行動につながる学習と、DVD映像による記録と発信－  
青森県立むつ工業高等学校 教諭 南澤 英夫

- 【秋田県】 理科に興味・関心をもって自ら探究する生徒を育てるために  
－教育専門監2年目の試み－  
秋田県横手市立鳳中学校 教育専門監 出雲 紀行



- 【岩手県】 中学校数学における生徒の達成感のある学習指導の工夫  
－振り返りを位置づけた授業実践を通して－  
岩手大学教育学部附属中学校 教諭 佐藤 寿仁
- 【岩手県】 総合学科高校における生徒と保護者の親子関係の現状  
－実態調査から見えてくる総合学科高校の姿－  
岩手県立紫波総合高等学校 教諭 下権谷 久和
- 【宮城県】 人類愛の尊さに気づき、自ら活動しようとする生徒の育成  
－布施辰治についての道徳の授業を中心とした総合単元的な学習を通して－  
宮城県牡鹿郡女川町立女川第四中学校 教諭 阿部 一彦
- 【栃木県】 子どもに本の楽しさを伝えるための読書活動の工夫  
栃木県さくら市立喜連川小学校 教諭 黒田 敦子
- 【埼玉県】 「マット運動 異学年コラボレーション授業の試み」  
－異学年共同によるマット運動“グループリズムマット”の実践－  
埼玉県所沢市立中央小学校 教諭 山内 基広
- 【埼玉県】 「全国へのチャレンジ」  
－定時制・通信制生徒生活体験発表会への三年連続出場の軌跡－  
埼玉県立朝霞高等学校定時制チーム「櫛」  
教頭 赤羽 弘雄  
教諭 内田 章・明楽 英世・今井 俊哉
- 【長野県】 自ら課題を発見し、実験の方法を考え、結論を実生活に応用できる生徒の育成  
－ヒトの体に関わるコレステロールを素材として－  
長野県総合教育センター 専門主事 田中 孝志
- 【東京都】 エネルギー環境教育から ESD を考える  
東京都練馬区立富士見台小学校 教諭 石川 直彦
- 【静岡県】 科学技術の最先端を農業高校生に  
－環境教育に対応した光触媒技術の活用と普及－  
静岡県立静岡農業高等学校 教諭 望月 基希
- 【静岡県】 小・中連携を視野に入れた「性教育年間指導計画」とその実践  
－中学校区 4校養護教諭連絡会の取り組み－  
静岡県沼津市立静浦中学校 養護教諭 竹内 美保（代表）



- 【京都府】 家庭学習の充実を目指した教務主任会からの小・中連携  
綾部市小・中教務主任会何北中・豊里中グループ  
京都府綾部市立何北中学校 教諭 森本 重則 (代表執筆)  
京都府綾部市立志賀小学校 教諭 塩尻 竹弘  
京都府綾部市立豊里小学校 教諭 上柿 直人  
京都府綾部市立物部小学校 教諭 堀川 好  
京都府綾部市立豊里中学校 教諭 梅原 良典
- 【大阪府】 実践的コミュニケーション能力を高める国際交流活動の試み  
－良質な異文化経験の場の創出を目指して－  
大阪府枚方市立明倫小学校 教諭 角崎 洋人
- 【鳥取県】 「家庭科における環境教育を通じた地域交流の取り組み」  
鳥取県立米子南高等学校 教諭 見世ちづる
- 【岡山県】 高校生の住空間認識力に関する考察  
－高等学校家庭科における住生活領域の授業実践－  
岡山県立瀬戸南高等学校 教諭 河内 美智
- 【岡山県】 学校行事の充実を目指した評価と指導の工夫改善  
－儀式的行事における取り組みを通して－  
岡山県井原市立木之子小学校 教諭 森川 孝一
- 【山口県】 体験と言葉を結び、気付きを深める生活科学習  
－対象に寄り添いながら話し合う支援で、ひびき合いを確かにする－  
山口大学教育学部附属山口小学校 教諭 森重孝太郎
- 【徳島県】 集合住宅を活用した生活密着型の食農教育の実践  
－農業「体験」学習から農業「生活」学習への変容を目指す『ハーベスト』の実践報告－  
徳島県立那賀高等学校 教諭 寺島 幸生
- 【高知県】 確かな学力を育てる算数授業  
－説明する算数的活動を通して表現力を育てる－  
高知県四万十市立中村小学校 教諭 今城 季紹
- 【鹿児島県】 複式学級経営の充実を図る指導の在り方  
－複式5・6年における実践を通して－  
鹿児島県奄美市立宇宿小学校 教諭 二宮 進一
- 【佐賀県】 「主体的な読み手を育む読書指導」  
－本好きにするための工夫－  
佐賀県佐賀市立成章中学校 教諭 中島 洋子
- 【長崎県】 「郷土の川を大切にしようとする心を育てる『総合的な学習の時間』」  
－子どもたちの思いと願いが保護者と地域を動かした－  
長崎県諫早市立真津山小学校 教諭 永尾 哲也



# 日教弘教育賞

最優秀賞

優秀賞

優良賞

## 子どもも大人もエンパワーされる「むくのき学舎」をめざして

～地域の教育力の活用と新たなコミュニティづくりへの挑戦～

大阪市立啓発小学校

校長 平 力

## 1 はじめに

啓発小学校は、本年度で創立107年を迎える。開校当初、現在の玄関近くに大きな椋の木（むくのき）があった。大人が三人でも抱えられないほどの大きな木で、しめ縄が張られ学校のシンボルとして大切にされていた。そこには、この椋の大木のように、子どもたちに大きくたくましく育ててほしいという願いが込められていた。

1990年代後半、大阪の同和教育40年の歴史とその流れの中で、そのころの本校においても集団育成と学力保障を二本柱に、人権感覚の育成、人間関係づくり、学力向上に向けた取り組みが次々と展開されていた。しかしながら、生活実態の厳しい子どもたちが70%近くを占める状況下で、これらの課題は本校において長らく横たわり、とりわけ生活習慣や社会性、学力の課題については深刻な状況が続いてきた。

こうした長きにわたる課題の克服に向けた、新しい、そしてダイナミックな挑戦が、本テーマの「むくのき学舎」構想である。それはまさに、マンパワーを集結し、子どものみならずすべての人たちがエンパワーされる、元気になる学校をめざした取り組みである。

## 2 児童の実態と課題に向けたこれまでの取り組み

本校児童・家庭の実態から見えてくる課題としては、

- A. 学力の課題  
(国語科・算数科の大阪市学力実態調査における平均が、10ポイント以上下回る)
- B. 生活習慣の課題  
(遅刻・欠席者約20%、朝食が不安定な児童約15%、疲労感約31%)  
※関連して保健室の来室者数199人/260人(1ヶ月当り)
- C. 自尊感情の課題(「自分が好き」と答えた児童約66%)

左のようなことが挙げられる。

生活習慣の課題は、意欲や毎日の生活など「生きる」ということへの力の源である。その積み重ねや充実が自尊感情につながっていく。また、そ

の自尊感情が学力に大きく影響することは、既に統計的にも明らかにされている。つまり、これらの課題は個々別々にあるものではなく、すべてが相互に関連し合っている課題であると言える。この課題解決に向け、

本校ではここ数年、毎年新たな取り組みを生み出し、挑戦をしてきた。

Aについては、「学校全体としての基礎学力向上のためのシステムづくり」として、「啓発ワーク」(職員自作の数百枚にわたる体系的なスモールステッププリントを活用したドリルスキル学習)「本読み大好き」(読書タイム)を教育課程内に帯として導入したり、国語科における学習言語習得のための研究、算数科における繰り返し学習の研究を進めたりしてきた。

Bにかかわっては、この5年間、生活指導・健康教育をすべての教育活動の土台として位置づけ、取り組んできた。生活指導部と健康教育部を一つにし「生活健康教育部」を校内組織として新たにつくりあげるなかで、「スポーツ体験週間」や「元気アップ週間」などの実践、保護者への啓発活動、学校栄養職員・養護教諭との連携を通じての食育・睡眠指導のカリキュラムへの位置づけ等を行ってきた。

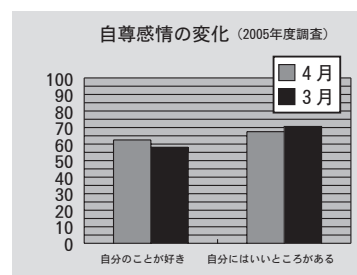
また、Cについては6年前からの3年間、自尊感情を育むことを共通のテーマとして「基礎学力向上」「人権総合学習」「人間関係づくり」の3部門の研究活動を行ってきた。

しかし、それでも課題は積み残され続けた。なぜなのか。私たちは悩み続け、分析しては新たに取り組み、また総括しては実践するという繰り返しであった。

## 3 取り組みを通して見えてきた仮説

しかし、2005年度の取り組みを通して、私たちは課題克服に向けてのある一つのヒントを得た。それはCにかかわっての取り組みを進めていたときである。

自尊感情については、20項目の「自己診断シート」を独自に作成し、全学年を対象に学年当初(4月)・



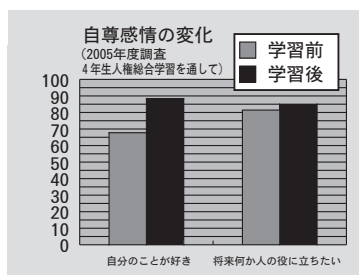
年度末(3月)の2回の調査を行ってきた。これを比較し、高まりを見ようというものがあった。それが左のグラフである。

これを見てわかるように、「自分のことが好き」「自分にはいいところがある」という質問に対し、肯定的回答を示した児童は、学年当初と年度末とでほとんど変化がない。3年間、自尊感情の高まりをテーマに取り組んだ結果がこれであったのである。

私たちはこの結果に愕然とした。既に述べたように、3つの部門に分かれて自主研究授業も含め、年間30本近くの授業研究会を行ったにもかかわらず、児童の自尊感情の高まりは得られなかったのである。「取り組みでも変わらない」感に再び苛まれた。

ところが、この2005年度は、もう一つ、興味深い結果が得られた。4年生の取り組みの評価である。4年生はこの年、特に人権総合学習に力を入れ、キャリア教育としての職場体験学習を通して児童の自尊感情を高めようと、校区内十数ヶ所の協力店・施設等に仕事体験に出かけた。児童は利用する方々への心遣いを学ぶ中で大変意欲的に取り組み、お客さんから「ありがとう」「とても助かりましたよ」という言葉をもらい、仕事の意味ややりがい、他者への思いやりなどを深く学び、人権感覚を磨くことができた。

そのときの調査結果が次のグラフである。



これを見ると、学習前と学習後で、明らかに自尊感情が高まっている様子が見て取れる。学習時に高まりを見せる自尊感情

も、年間を通じて見た場合、その高まりは得られなかった。これはなぜだろうか。

自尊感情は、1日のうちでも高くなったり低くなったりしている。従って、取り組みを行ったときには確実に高まる。実際、朝から家で怒られて登校してきた児童などは、かなり自尊感情が低い状態で学校に登校し、こうした取り組みを通してある程度もち直して帰っていくといった様子で、それを繰り返している印象である。つまり自尊感情は、高めるベクトルが恒常化されないと、なかなか高まらないのである。

となると、「学校全体で自尊感情を高める取り組みがなされているか」「学校外の児童の生活場面において、自尊感情が高められる要素がたくさんあるか」という2つのことが重要となってくる。これは自尊感情に限らず、学力や生活習慣においても同じことが言える。

前者は学校として当然努力し進化させ続ける事柄で

ある。しかし後者はどうか。学校だけでなく、家庭・地域においても同じような理念や考え方で取り組みがあったか。「連携」はこれまでもしてきたが、まだ進化の余地がそこには残されているのではないか。そこへの楔がまだ十分打てていなかったのではないか。それを実現することで、長らく横たわる児童の課題克服に向かうことができるのではないか。私たちは、数年の取り組みを通して、反省と同時に「新たな三者連携が課題解決の糸口である」という仮説を得たのである。

#### 4 三鷹市の実践から得た「むくのき学舎」構想

「開かれた学校づくり」「学校・家庭・地域の三者連携」が極めて重要であると再確認した私たちは、これまでと同じ連携だけでは不十分であると感じた。そして、PTA・保護者も地域の方々にも、もっと学校教育に、そして我が子だけでなくそのまわりの児童にも関心を寄せてもらう方法はないかと思案した。

そこに、たまたま東京三鷹市の実践を聞く機会を得た。「コミュニティ・スクール」の一環としての「夢育支援ネットワーク」による保護者や地域の豊富な人材を学校教育の場で活かす画期的な取り組みである。本校職員もこの話を聞く場に多く参加し、「児童の生活習慣の改善や自尊感情の育み、学力向上のためには、保護者や地域のたくさんの方々々に協力してもらい、よりよきをめざしていこうという雰囲気・環境で児童を包み込むことが必要だ」と確信した。「自分も人も大切にしていこう」「生活を正していこう」「積極的に学習しよう」という雰囲気を学校・家庭や地域全体に作りあげていく。そのためには、まずは保護者や地域の方々から、「日常的に学校に足を運びたい」システムを作っていく必要があるのだ。こうして私たちは、「むくのき学舎」構想を生み出した。

#### 5 「むくのき学舎」構想の理念と具体的な活動

そこから2年の構想を経て「むくのき学舎」構想は、より発展した形で、次のような理念を掲げた。

##### 「むくのき学舎」構想の理念

保護者・地域の方々のみならず、校区内にある進学先である中島中学校、あるいは大阪府立柴島高等学校の協力も得るなど、すべての資源・人材を活用し、「共生」「生活習慣」「学力」をテーマに、本校児童をエンパワーしたい。そして、たくさんの方が本校につどい、互いにふれあいながら、児童にかかわることを通して、大人自らもエンパワーされ、自分自身を咲かせるような、そんな学校、夢のある地域をめざしたい。そのための活動を、地域総がかりで進めていく。

冒頭のむくのきの話をもとに、この理念とを合わせてできあがったのが、下のロゴマークである。まずは



これをホームページや入学説明会、学校公開の際の教育説明会等、ありとあらゆる機会を使って多くの方々に示し、啓発小学校がめざしたい学校像について強く訴えかけていくことから始めた。

### (1) 「むくのきキャッチ活動」

「むくのき学舎」構想を実現するためのメインとなる具体的な活動が「むくのきキャッチ活動」である。



活動のモットーは「無理なく・できることを・一人一支援」である。大きくは「コミュニティ・アドバイザー (CA)」と「コミュニティ・ティーチャー (CT)」という2つの活動に分かれる。

前者のCAは、セーフティ・ボランティア（学校周辺・登下校見守り活動、校内安全見守り活動）、クリーン&グリーンボランティア（清掃活動、学校緑化活動）、わいわいボランティア（遊び活動）などの活動である。保護者や地域の方々自身が「やってみたい」「得意だ」と思う活動に日常的に参加してもらうなかで、児童とまずは顔見知りになり、徐々に生活面のアドバイスをさせていただこうというものである。そうすることで、児童の生活習慣や社会性を培うことをねらっている。

後者のCTは、レッスン・サポーター（授業支援）、ゲストティーチャー（特別講師）、きらめきブックサークル（読書、読み聞かせボランティア）の3つの活動である。保護者・地域の方々に実際に毎日の授業に入っただき、さまざまな学習支援を行う。

これらの活動開始にあたっては、PTA・保護者・連合町会・社会福祉協議会等を通じて説明書と登録用紙を配布し、登録制という形をとることとした。本年度4月に「登録者会議」を行ったところ、57名の方々に集まっていた。

### (2) 「むくのきガイドンス」の発行

学校や教育そのもの、子育てにもっと関心をもってもらい、ひいては「むくのきキャッチ活動」への参画意欲を引き出そうと取り組んだのが「むくのきガイドンス」の作成・発行である。これは、その一冊で学校



生活のすべてがわかる、いわゆる学校案内本である。PTA・保護者の方々を対象に「ガイドブック企画・検討委員」の募集をかけ、その作成にあたった。特徴としては、学校生活を送る上でのさまざまな事柄が詳しく解説されている



上に、「子育てワンポイントコーナー」がところどころに散りばめて掲載されており、企画・検討委員の意見がここを中心に反映されている点である。

### (3) 中島中学校、府立柴島高等学校との連携

進学先の中島中学校とは、従前から学習内容や生活指導といった具体的な事柄について連携を続けてきた。昨年度からは、「大阪市小中連携パイロット校調査研究事業」を受け、授業交換、児童・生徒交流、中学生が入ったの総合学習の展開等を行ってきた。

また、府立柴島高等学校とも、本校の総合選択学習における「障害」者交流コースの児童と、柴島高校「アミティエライフを送る会（自立支援コースの生徒を中心としたサークル）」との交流など、連携を続けてきた。

本年度からは、柴島高校のユネスコクラブの生徒10



名が、本校「放課後チャレンジ教室」にボランティアスタッフとして参加してくれている（写真）。放課後チャレンジ教室は、児童の「宿題毎日完全

実施」「学習相談」を目的に、大阪市の事業を活用して昨年度より始めた取り組みである。今後は、柴島高校の教員志望の生徒が、本校6年生を中心とした自らの将来を考える総合学習の取り組みにかかわることができるよう、柴島高校の連携担当者と一緒に検討を進めている。

その他、「家族DEチャレンジ宿題」や人間関係づくり・総合学習カリキュラムの見直しと「ぬくもり」ワーク（価値観や人権感覚、生き方を学ぶ総合的な学習）「ふれあい」ワーク（人間関係形成スキルを学ぶ連続型パッケージ学習）の新設など、取り組みとして新たに始めたものは多々あるが、ここまで述べてきたような、あらゆる資源を活用しての日常的な取り組みは、これまでにない非常に特色のあるものとなっている。

## 6 取り組みの成果と CA・CT、教職員、児童の声

「むくのきキャッチ活動」は、本年度6月6日を活動開始記念日とし、朝の児童朝会で登録者の方々に舞台に並んでいただき、全校児童に紹介しスタートした。57名の登録でスタートしたこの活動は、現在67名となり、活動の広がりを見せている。



セーフティ・ボランティアは、朝から交通安全旗を持って校区内に立ち、登校支援をした後、

巡回し校内外の安全を見守ってくださっている。クリーン&グリーンボランティアは、さっそく所定の菜園を耕したり、児童と一緒に清掃活動を行ってくださっている。菜園ではその後、ゴーヤを収穫し、2年生を中心



いた。特記したいのは、CTによるレッスン・サポーターである。担任や学年団が依頼書を作成しCTの方々に2週間前にわたす。CTの方々は、それを見て都合のつく日に授業に入るといった形で進めてきている。



である。担任や学年団が依頼書を作成しCTの方々に2週間前にわたす。CTの方々は、それを見て都合のつく日に授業に入るといった形で進めてきている。

校内研究を進めている算数科を中心に、実際に教室に入って児童へのアドバイスや学習態度にかかわる支援、丸付けまでもCTの方々が行う。授業前や授業後には担任と簡単な打ち合わせをする。支援者が増えることで、児童への支援は充実し、児童は以前にも増してしっかりと学習に向かうようになってきている。

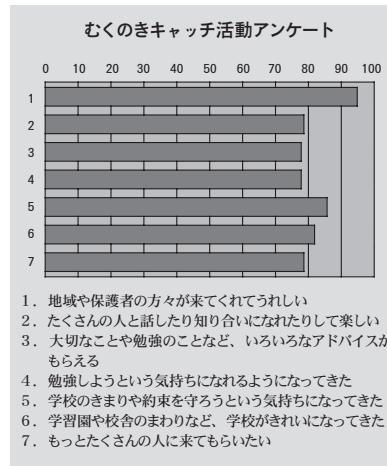
このレッスンサポーターの取り組みは、今ではあらゆる教科へと発展し、家庭科、給食指導、水泳指導にまで入って、教職員と共に児童の指導にあたっている（左の写真は本校教職員ではなく、CTの方々である）。教職員とCTとの交換ノートである「TCTノート」には、その声として、「自分たち自身が楽しんでやらせてもらってます」「学校でどんな勉強をしているのかがよくわかる」「逆に私たちが教えられる」「家庭学習に活かすことができる」と綴られている。学級懇談会では、「自分もほんとは楽しい子どもたちのためにもなるので、みなさんも一緒にやりましょうよ」とCTの方が他の保護者に訴えかける。まさに、「子どもも大人もエン



あらゆる教科へと発展し、家庭科、給食指導、水泳指導にまで入って、教職員と共に児童の指導にあたっている（左の写真は本校教職員ではなく、CTの方々である）。教職員とCTとの交換ノートである「TCTノート」には、その声として、「自分たち自身が楽しんでやらせてもらってます」「学校でどんな勉強をしているのかがよくわかる」「逆に私たちが教えられる」「家庭学習に活かすことができる」と綴られている。学級懇談会では、「自分もほんとは楽しい子どもたちのためにもなるので、みなさんも一緒にやりましょうよ」とCTの方が他の保護者に訴えかける。まさに、「子どもも大人もエン

パワーされる学校」へと向かいつつある。

児童の受け止めとしては、この9月にアンケート調



査を行っている。その結果が左のグラフである。

今回が初めてのアナケートのため比較はできないが、全体的に非常に高い肯定回答率となっている。実際、「〇〇さん!またきてね!」と毎

回児童の声が飛び交う。また、担任は、当初の不安も消え「来てもらうことで子どもたちへの支援が充実して非常に助かる」という声をあげている。さらに、「勉強しようという気持ちになれるようになってきた」「学校のきまりや約束を守ろうという気持ちになってきた」という質問においても、上のように高い肯定回答が得られている。

## 7 今後の課題とこれからの啓発小学校がめざす方向

自尊感情や生活、学力面などの児童への効果は、すぐに表れるものではないだろう。まだまだ未知の部分が多い。しかし、例えば「標準服の着用率が大幅増加」「上靴忘れの減少（木曜日・金曜日はゼロ）」「宿題の実施率増加（73.3%→94.1%）」など、目に見える効果はすでに表れている。

取り組みは、まだまだ始まったばかりである。巷間では「地域コミュニティの崩壊」と言われている。それは本校区においても感じられはする。しかし、私たちの目の前には、実際に、自分に責任のないところで苦しみ、あえいでいる児童の姿がある。私たちは、そうした児童の豊かな自己実現のため全教職員でタッグを組み取り組んできた。その思いを同じくする保護者や地域の方々は、まわりに必ずやいるはずである。それらの方々と再度協力し合い、学校を核とした新たなコミュニティをなんとしても作りあげたい。そして、その大きなぬくもりで包み込むことで、児童はかつて正門にあったあの椋の木のように、自らの豊かな人生の実現に向け、すくすく伸びていくと信じてやまない。

（首席・同和教育主担 石井宏尊）

# 地域資源を活用した農業教育の取り組み

～琉球在来豚の繁殖と利用による地産地消を目指した産学連携の試み～

沖縄県立北部農林高等学校

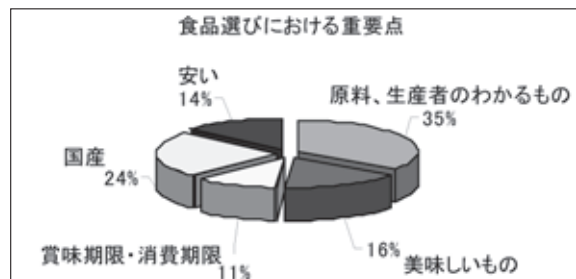
教諭 東江 直樹

## はじめに

今、世界的に経済破綻の嵐が吹き荒れ、農業を取り巻く情勢も大変厳しく、我が国の畜産業界においては飼料費の高騰による経営悪化は深刻な問題となっている。また、食品メーカーの偽装問題の発覚等により、消費者の食の安心・安全への関心が高まり、安全性を重視した食糧生産も重大な課題となっている。

そこで、本校畜産コースでは県民を対象に消費者の食に対する意識の変化を把握するため、食に関するアンケート調査を行った。

その結果、消費者が食品選びの際に重要視しているものは、原材料や生産者のわかるもの、添加物が入っていない食品などであった。消費者は安全な食べ物、生産者がわかる商品などを求める傾向にあり、「トレーサビリティ」への意識がさらに強まっている事がわかった(図1)。



(図1 アンケート結果)

この結果は、日々の授業、実験実習において、自分達が育てた農産物により一層の責任と誇りを持ち、安全で安心な食料を生産することの重要性を認識し、消費者に何を伝えたいのか、何を学び何を実践すべきかについて、考える、きっかけを与えたものだった。

本校、熱帯農業科畜産コースでは、「畜産の飼育及び経営に関する知識と技術を習得し、畜産経営や関連業務に従事する技術者の育成」を目指し、学習を展開している。そこで、地域資源を教材化することで地域の特産品開発に取り組み、将来、社会への貢献、生活目標を意識した、自ら学ぶ学習につながると考えた。

## I. 研究計画

- (1) 琉球在来豚アグーの保存意義
- (2) 琉球在来豚アグーの問題点の克服
- (3) 地域の未利用資源の利用

- ① シークワサーの現状
- ② シークワサー果肉果皮の飼料化
- (4) 産学連携
  - ① 商標登録(ブランドの確立)
  - ② 相互協力協定
  - ③ 地域振興・貢献(名護市商工会との連携)
- (5) 校種間交流
- (6) まとめと今後の課題

## II. 研究方法及び実践

沖縄では歴史的にも古くから豚食文化が根付いており、豚は各家庭で飼育されていた。それが中国に起源をもつ琉球在来豚アグーである。本校では昭和59年より、わずか6頭の交雑化された豚を基礎に琉球在来豚アグー(図2)の復元及び保存に取り組み、戻し交配を重ね、貴重な遺伝資源の保存と家畜としての利用性をアピールし、そのプロジェクト学習を行ってきた。



(図2 琉球在来豚アグー)

- (1) 琉球在来豚アグーの保存の意義
  - ① 沖縄県の食文化のルーツであるアグーの動物学・畜産学的評価のみならず、県民の心の拠り所としても再評価が必要である。
  - ② 繁殖が閉鎖的集団になっているため、系統保存や増殖については遺伝育種的な研究が必要である。
  - ③ 今後の利用の方向性をさぐり、沖縄のブランド豚の核とする。
- (2) 琉球在来豚アグーの問題点の克服
 

戻し交配を重ねていく中で2つの大きな課題を発見した。それは、太りやすい体質のため過肥になり繁殖率が低下することと、連続した近親交配によ

て繁殖能力が低下するという「近交退化」の問題である。

本校では付加価値のある豚肉の生産を目標に、養豚の三要素（豚・飼料・畜舎）の充実を図り、地元で採れたものを地元で消費する「地産地消」に取り組んできた。豚の体力、抗ストレス、抗病性を高めることが安定供給の必須条件であり、これらを保証できるのは飼料であるとの考えから、「医食同源」の教えを養豚にも生かし、地域の未利用資源を活用した発酵飼料を製造し、ローコスト・ハイクオリティのオリジナル豚の生産を行いたいと考えた。

### (3) 琉球在来豚アゲーとデュロック種の交配

繁殖性と経済性の向上を目指し大型種との交配を行った。交配の際の条件を①アゲーらしいこと、②外貌の特徴として、全身黒毛でなければならないことに注意した。

アゲーより繁殖性・産肉性に優れた、黒毛に近い茶色のデュロック種との交配による子豚は黒毛であり産子数、育成率ともに向上する結果となった。

毛色が茶色のデュロックとアゲーを交配したことから『チャーゲー』と名付け、北農オリジナルのNew銘柄豚が誕生した（図3）。



（図3 チャーゲー）

## Ⅲ. 地域の未利用資源

我が国の畜産業は飼料のほとんどを輸入に頼っており世界的な石油の高騰により飼料費が高騰して経営を圧迫し、廃業を余儀なくされる農家も出ている。

飼料自給率を向上させ経営を安定させる為にも、地域の未利用資源を利用した飼料の製造が急務になっている。

### (1) シークワサーの現状

やんばるには多くの特産物があり、特に近年シークワサーが注目を集めている。

シークワサーは本校が位置する地元名護市勝山区が、主要産地として知られ、その効能として抗酸化作用や血糖値・血圧の上昇を抑制、健康効果成分が豊富なことでも話題になっている。

シークワサーは、出荷のほとんどは果汁用で、

原料の50%以上が果肉果皮と未利用資源で、産業廃棄物として処理されている。しかし、果汁よりも栄養素が多量に含まれていることがわかっており、皮にこそ価値があり、その有効利用の開発が急務である。

シークワサーの果汁と搾り果肉果皮の分析では、100g中に含まれるタンパク質、脂質、ノビレチン等の含有量が多く、十分栄養素が残っていることがうかがえる。この栄養豊富な未利用資源を飼料へ活用することを試みた。

### (2) シークワサー果肉果皮の飼料化

シークワサーの搾り果肉果皮の利用については、サイレージ化することで、pHの値にもおいても豚の好むものになると考えた。

食品残渣を使い、発酵飼料の製造に取り組んでいる琉球大学農学部、草地学研究室のもとを訪ね、考えを聞いて頂いた。「充分、飼料として使える」との反応であった。

#### Challenge 1（乳酸菌の培養）

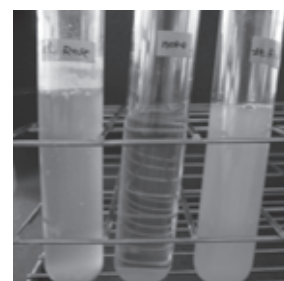
牧草サイレージの応用から、牧草搾汁液を作り、乳酸菌の培養を行った。牧草は、本校、寄合原農場由来のローズグラスをハサミで1cm以下に切断し、牧草の総重量の3倍の水と一緒にミキサーに掛ける。それをガーゼで濾し、搾汁液を容器に移し替え、グルコースを3%添加する。2日間30℃で保温しておいたところ、色は緑色から黄色に変化、においは酸っぱく、牧草サイレージと似たようなにおいであった。

搾汁液の乳酸菌を確認するために培養実験を行った。サンプルは、本校で作成したローズグラス、琉球大学が作製したローズグラスとトランスパーラの3つの搾汁液を用いた。

まず、嗜好性に関わってくるpHの測定では、3種類ともpH 2～3を示した。乳酸菌の確認実験は乳酸菌の生菌を確認するYM培地、乳酸菌の存在を確認するプレートカウント培地で行い、さらに発生した乳酸の量を確認する実験を行った（図4）。結果、培養実験から菌の存在と乳酸の発生を確認できた（図5）。



（図4 培養実験）



（図5 菌の確認）

#### Challenge 2（サイレージ化）

シークワサーの乾燥果肉果皮を、ミキサーを使って細かく砕き、粉末にし、乳酸菌搾汁液を5%添加、水分を全体の約50%に調整後、攪拌機で混ぜ、ビニー

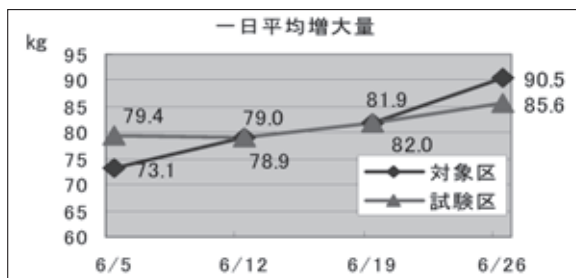
ル袋に分封し、シーラーと掃除機を使い、真空状態にして2週間発酵させた。数日後には、密封していたビニール袋がパンパンに膨れていた。これにより、ガスが発生していることが証明され、発酵が進んでいることを確認した。

### Challenge 3 (肥育実験)

2週間発酵させたサイレージを用い肥育実験を行った。

まず、同じ親から産まれた6頭の兄弟豚を3頭ずつに分け、平均体重78kgとし、従来の仕上げ用発酵飼料を給与した対象区と、その飼料に20%シークワサー発酵飼料を添加した試験区で比較実験を行った。いずれも1頭あたり朝と夕の1日2回1.5キロずつ与えそして、試験区と対象区で体重測定を週1回、1ヶ月間の比較実験を行った。

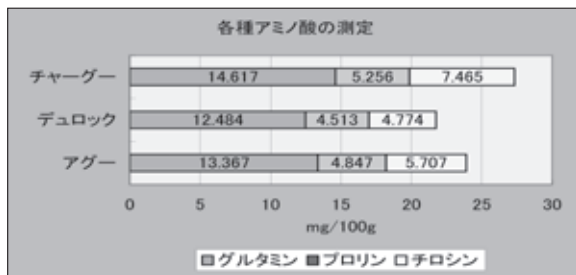
結果、試験区と対象区での体重の変化はグラフの通りになった。一日増体量は対象区で600g、試験区では500gと対象区に対し試験区の増体率はカロリーを抑えているシークワサー発酵飼料を与えているので多少低くなるが、ほとんど差はないと判断した(図6)。



(図6 1日平均増体量)

#### (1) チャーグーの産肉能力

肥育したチャーグーの肉、100g中に含まれているアミノ酸成分を両親と比較すると、チャーグーは免疫力をアップさせるグルタミン酸、肌再生成分の主原料となるプロリン、集中力をアップさせるチロシンなどが、多く含まれている事が解った(図7)。



(図7 各種アミノ酸の分析結果)

#### (2) 脂肪酸の測定

試験区と対象区、それに一般豚の脂肪酸測定をガスクロマトグラフ法で行った。

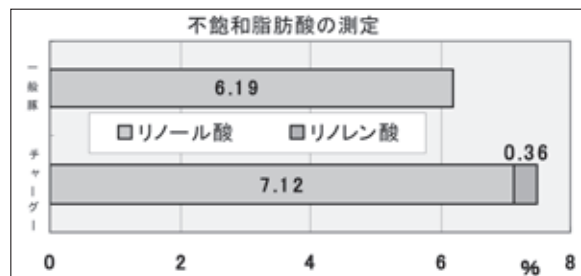
人の体内ではつくることが出来ない必須脂肪酸で

体に良いとされる不飽和脂肪酸のリノレン酸・リノール酸を比較すると、一般豚にはリノレン酸は含まれておらず、リノール酸の量もシークワサー発酵飼料を与えたチャーグーの方が多という結果になった(図8)。

分析結果によりチャーグーは甘味と旨味を兼ね備えた肉で一般豚よりも不飽和脂肪酸が多く含まれ、コレステロールの沈着を防ぐ働きがあるといえると判断した。また、対象区のチャーグーとシークワサー飼料を与えたチャーグー2頭を比べても肉質的には変わらないという結果がでた。

また、シークワサー発酵飼料を代用すると、1ヶ月約800円、年間では約10万円の削減ができる試算になる。

この結果から、飼料の20%を未利用資源であるシークワサーの発酵飼料に代用しても、肉質を保ちながら、出荷までの飼料費が削減できる事がわかった。



(図8 不飽和脂肪酸の分析結果)

## IV. 産学連携

### (1) 商標登録 (ブランドの確立)

特許庁・発明協会より「産業財産権標準テキスト活用に関する実験協力校」事業の研究指定を、平成17年度に受け、農業教育と知的財産権教育を有機的に結び付けることで、教育効果を試みた。

弁理士の先生のアドバイスをいただき、特許庁の電子図書館を活用し、チャーグーをブランド豚として確立させるために、商標登録を行った(図9)。



(図9 商標登録証)

このことで、商品流通の際に販売店との交渉において、優位に商談を進めることが可能となった。

また、チャーグーのチャは、デュロック種の茶色、沖縄の方言で「いつも」、「常に」を意味し、グーはアグーのグー、「Very good」のGood (OK)、上等の意味を持たせ、「いつも上等」というメッセージを込め肉質の良さをアピールした。

### (2) 相互協力協定

商標権を得たことでブランド豚としての価値が大

きく評価され、学校、農家、地元企業の三者間で協定を締結することができた。相互協力協定は、チャージャーの安定供給を確立し、地産地消の推進を行い、地域振興に努めることを目的に調印された。

学校と本科畜産コースのOBの養豚農家と地元企業との取り組みであり、企業においては、生徒の就職先になるという点でも、極めて珍しいケースとなった。

このことにより、本校は生産技術の確立と担い手の育成を行い、地域企業が安定的生産体制の確立、流通・ブランド化確立を分担し、北部地域振興、地域資源の活用に努め、その結果、地域が活性化し、雇用の創出などの大きな成果をもたらすことになった(図10)。



(図10 調印式)

### (3) 地域振興・地域貢献

平成19年度、「産学連携新ブランド豚・チャージャーの全国展開事業」が名護市商工会により推進された。

名護市はシークワサー、ゴーヤー、冬瓜などで知られているが、畜産物では特産品がなく、「チャージャー」が地域ブランドとして確立され、「名護の特産(図11 名護市との連携事業)品」として認知されたら、「チャージャー」を取り扱う店舗はもちろん、地域イメージの向上に繋がり、収益拡大が期待される(図11)。



本校においては生徒の研究意欲も高まり、人材の確保・育成に寄与できるものとする。その他、畜産農家及び加工品工場等への雇用面においても、消費の拡大とともに期待されている。

これまでの継続的なプロジェクト学習の取り組みが地域を巻き込み、さらには地域の活性化につながる大きな輪となった。と同時に、マスメディア等に取り上げられるたびに、生徒は充実感と地域の期待を肌でリアルに感じ、日頃の学習に自信を持ち、一層の興味・関心、学ぶ意欲・意義を見いだすことができた。

## VI. 小学校との交流

地域の小学4年生の道徳の時間に食育をテーマに体験交流を行った(図12)。体験交流では、普段食べている肉がどの様に生産されているのか、生産現場の苦



(図12 体験交流学習) (図13 小学校での授業)

労を体験し、知ってもらうものになった。その後、本コースを代表し、2名の生徒が小学校でゲスト・ティーチャーとして招かれ、農場での体験を行ったあとのまとめとして、生産者としての熱い思いを伝えることができた(図13)。

この取り組みは、「学ぶ(知識や習得した技術、体験したこと)」から「伝える(継承)」という自主的な学習活動につながり、「科学性」、「指導性」、「社会性」を身につける事ができ、小学生を前に「僕たちが育てている家畜を、みんなが美味しく、いただきますと感謝の気持ちで食べてくれる事が僕たちのやりがいになる。」と話す生徒の言葉に頼もしさを感じた。

## VII. 研究の成果と課題

「琉球在来豚の繁殖と利用」というテーマで取り扱われてきた「豚」は、単に教材としての対象だけでなく、経済効果と地域産業の活性化を生みだし、地域の未利用資源利用の可能性をさぐる、生徒の活動につながったと考える。また、この取り組みが「良い肉質状態を保つ事や、未利用資源の有効活用法など試行錯誤しながら生産者としての苦勞を知ることができました。」、「畜産で鍵になるものに、飼料と呼ばれる専用の餌がある。その飼料製造のプロジェクト活動も、家畜とペットの概念を見直すきっかけになりました。」、「動物とふれ合うことで命の大切さ、仲間と協力することを学んだ。」という生徒の感想から伺えるように、農業教育は、知識や技術の習得だけでなく、人を育て、生命の尊さを感じさせる大きな力を秘めた、素晴らしい学問だと考える。

農業の無限の可能性で多くの生徒を魅了し、経験豊かな後継者の育成を図ることで、担い手不足を解消したい。

### おわりに

農業には、地域との結びつきが重要である。地域との繋がり、地域の資源を有効活用し、資源循環型の農業、地産地消を目指し、豊かな精神性と身体を育む教育活動を行っていきたい。この取り組みを更に、充実させ、地域の期待に応えることができる農業高校を目指し、研究活動に励み、地道に生徒達と共に農業高校ならではの取り組みを実践していきたい。

最後に、ご指導、ご支援を頂きました皆様に心より厚く感謝し、御礼申し上げます。

# 希望と自信をもち、自己の生き方を見つめる子をめざして

— 道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を高める指導の在り方 —

岐阜県岐阜市立芥見東小学校

校長 大竹 恵子

## 1 主題設定の理由

本校では、3年間、「希望と自信を持ち、主体的に自分に向き合う子をめざして」という研究主題のもと、児童一人一人に道徳的価値を受け止めさせるために、道徳の時間を中心に授業構想力の中の発問構成と学習過程における効果的な手立てを中心に授業実践を繰り返し行ってきた。

その中で、価値を詳細に分析し、児童の実態を踏まえて受け止めさせたい価値を明確にすること、その上で基本発問や中心発問、さらに補助発問や深めの発問を教師が意図的に構成することの大切さが分かり、ねらいとする道徳的価値を追求し把握する展開の前段における授業作りに成果が見られた。また、学習環境における工夫として、どの学級でも道徳の学習の足跡が分かる道徳コーナーや個のよいところ見つけコーナーを掲示に位置付けることができた。

しかし、把握した価値と自己の生き方をつなぎ内面的自覚を深める展開の後段や終末では課題が残った。

さらに、教師が意図的に学級の歩みや児童の生活につないで継続して指導していく面では弱さが見られた。

本校の児童の実態をみたとき、道徳的価値を理解し、その大切さを感じ取る道徳的心情は育ちつつあり、集団としての道徳的判断力は付いてきたが、個のそれぞれの場面での道徳的判断力はまだ十分とは言えない。

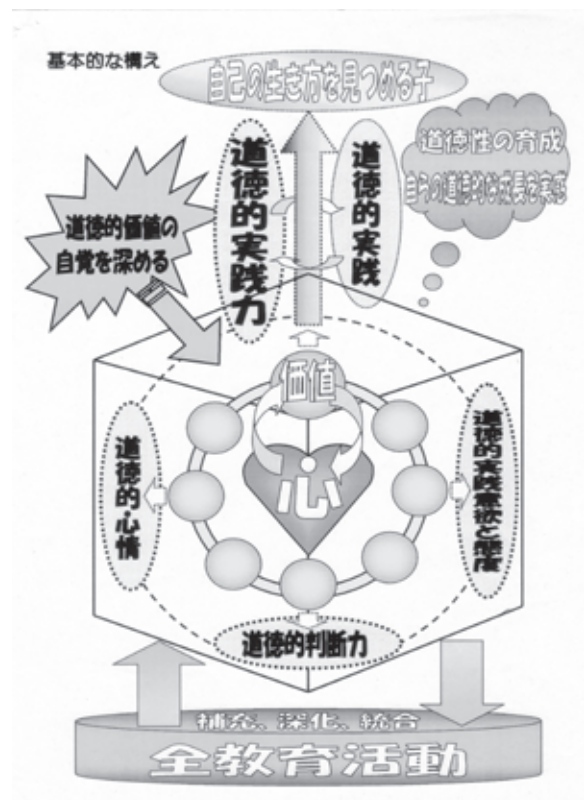
さらに、道徳的価値を実現しようとする道徳的実践意欲の不足や日常的に道徳的行為を行うという道徳的態度的実践にまで至っていない。

本来、人は誰でもよりよく生きたいという願いをもっている。日常生活の中で自分をよりよくしていこうと努力し、自分の成長を実感できたとき、自信が生まれ、自分のよさをさらに伸ばしていこうとする。だからこそ、自分とのかかわりで道徳的価値をとらえ、主体的に自己を見つめる中で自己理解を深める姿が大切である。また、道徳的実践ができた姿を自らの道徳的な成長と実感できるように、全教育活動の中で、道徳の時間の指導を機能させる必要がある。新学習指導要領の学校教育全体で取り組む道徳教育の実質的な充実の観点からも、道徳の時間と他の教育活動との関連を一層図り、全教育活動の中で意図的に指導を継続していけば、本校の課題である道徳的実践力を高め、自己の生

き方を見つめる児童が育つと考えた。

## 2 研究仮説

道徳の時間において、ねらいとする道徳的価値を追求、把握し、自己を振り返ることによって価値の内面的自覚を深め、全教育活動の中で意図的に指導を継続していけば、道徳的実践力が高まり、自らが道徳的な成長を実感でき、自信がもて、自己の生き方を見つめる児童になるだろう。



## 3 研究内容

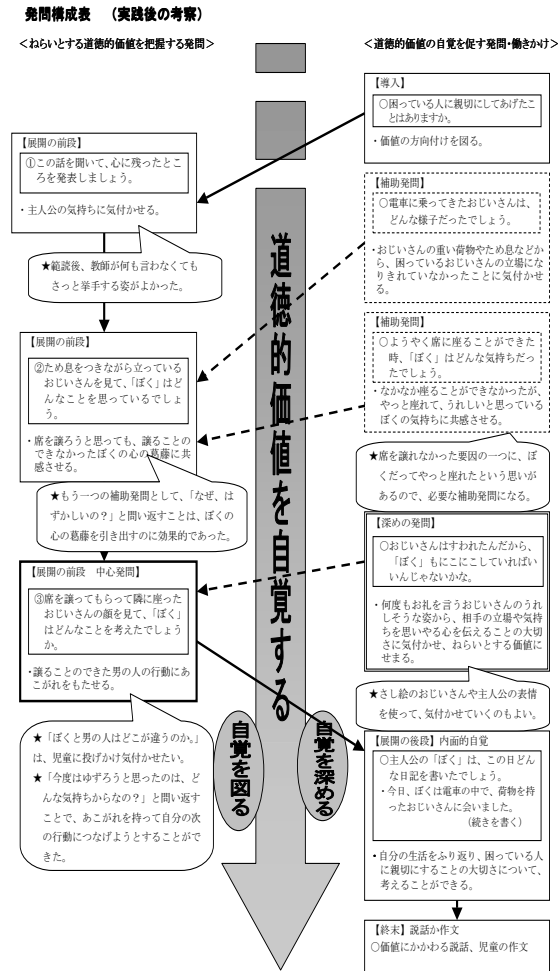
- (1) 道徳的価値を受け止めさせ、内面により深く働きかける発問の工夫
- (2) 把握した価値を自己の生き方と結び付け、道徳的実践力を高める工夫
- (3) 全教育活動の中で、自らの道徳的な成長を実感させる指導の工夫

4 実践より (○成果 ●課題)

研究内容 (1) について

道徳的価値を受け止めさせ、内面により深く働きかける発問の工夫

方法・道徳的価値の分析、道徳的価値の自覚を深める発問の工夫に視点をあてた発問構成表の開発  
 <3年 資料名『おじいさんの顔』(親切)の 実践より>



○発問構成表の作成によって、ねらいとする道徳的価値の追求、把握ができるように、指導過程において、欠くことができない基本発問と本時の中心的な価値を追求する中心発問を精選したうえで、児童の発言を予想して補助発問や深めの発問をいくつか用意して、授業に臨むことができた。

○補助発問や深めの発問によって、多様な考え方や感じ方を引き出したり、自己を見つめさせたりすることができ、児童の反応に応じて道徳的価値をより深く追求していくことができた。

【展開の前段 基本発問②の実際】

- T 1 : ため息をつきながら立っているおじいさんを見て「ぼく」は、どんなことを思っているでしょう。
- C 1 : 荷物が重そうで、えらいだろうな。  
 C 2 : 誰かかわってあげないかな。次の駅で席が空くかもしれない。  
 C 3 : かわってあげたいけど、はずかしいな。
- T 2 : なぜ、はずかしいの。席をゆずることは、はずかしいことなの? 《補助発問A》
- C 4 : いいことだけど、他の人もたくさんいる電車の中で声をかけることがはずかしい。注目されるから…。  
 C 5 : 知らない人に声をかけることがはずかしい。  
 C 6 : ことわられるかもしれないし、声をかける勇気がない。
- T 3 : 譲ってあげたかったけど、勇気がなくて言いだせなかつただけなの? ようやく席に座ることができた時「ぼく」は、どんな気持ちだったの。《補助発問B》
- C 7 : やったあ、ようやく座れてうれしいな。  
 C 8 : せっかく座れたからずっと座っていたい。  
 C 9 : 気になるけど、気付かないふりをしよう。

○補助発問Aは、主人公の心の葛藤を引き出すと同時に児童に自己見つめをさせるのに効果的であった。

○補助発問Bは、席をゆずれなかった要因の一つに、やっと座れてうれしいと思っっている主人公の気持ちに共感させるのに効果的であった。

【展開の前段 中心発問③の実際】

- T 1 : 席を譲ってもらって隣に座ったおじいさんの顔を見て「ぼく」は、どんなことを考えたでしょう。
- C 1 : おじいさん、座れてよかったな。  
 C 2 : 譲ってあげたおにいさんは、えらいな。  
 C 3 : ぼくも今度は譲ってあげたい。
- T 2 : お兄さんとぼくはどこが違うの。お兄さんは、電車の中で知らない人に声をかけることがはずかしくはなかったの。《深めの発問C》
- C 4 : ぼくもお兄さんも重そうな荷物を持ったおじいさんのえらい様子を見て、座らせてあげたいと思ったところはいっしょだけど、お兄さんは、思うだけじゃなくて声をかけておじいさんを楽にしてあげることができた。  
 C 5 : ぼくは、思っているだけで声をかけることができなかったから、ぼくのやさしい気持ちはおじいさんには伝わっていない。  
 C 6 : はずかしいと思っっているぼくは、自分のことを考えているけど、お兄さんは、おじいさんの事だけを考えている。

○深めの発問Cによって、「お兄さんはえらいな。ぼくも今度は譲ってあげたい。」という表面的な考えから、相手の立場や気持ちを思いやる心を伝えることの大切さに気付かせ、ねらいとする価値に迫ることができた。

●授業後「こうあるべきじゃなかったか。」と振り返ったり話し合ったりすることで、さらにねらいとする価値に迫るための発問を生み出すことが大切である。実践後の考察を発問構成表に★マークで付け加えて残しておくことで、発問構成を改善して次の授業に生かす。

研究内容 (2) について

把握した価値を自己の生き方と結び付け、道徳的実践力を高める工夫

方法・重点目標や学級目標に向けての学年での取り組み活動を柱にし、その活動の中での自分の姿や思いを見つめさせる。(スリッパそろえ、掃除、委員会活動、学級遊び、行事など)

< 4年 資料名『親子せいそう』(勤労)の 実践より >

【導入】

○普段の掃除で楽しいと感じたり夢中になったりしたことはありますか。

- 普段の掃除の姿から価値に近い体験を出させておく。
- 今日は「働くこと」について考えていきます。

【導入の実際】

T 1：普段の掃除で楽しいと感じたり夢中になったりしたことはありますか。(掃除中の写真を提示する。)

- C 1：トイレ掃除でこびりついた汚れを夢中になって一生懸命きれいにしてすっきりした。
- C 2：理科室の洗い場をきれいにした時、夢中になった。
- C 3：山田川清掃の時、ゴミがたくさん取れてきれいになったから、楽しかった。
- T 2：今日は、働くことについて考えていきます。

○日頃の掃除での自分の姿を見つめさせることは、「人のために進んで働く喜び」という価値を自己の生き方とつなげて考えるのに分かりやすく効果的であった。

【展開の後段】 内面的自覚

○今までの掃除を思い出して「夢中になって掃除をしたこと」や「これからよくしていきたいこと」を考えましょう。

- 「私にもできた」という体験を思い出させたり「これからよくしていこう」と考えさせたりすることで『進んで働こうとする態度』について

【展開の後段 内面的自覚の実際】

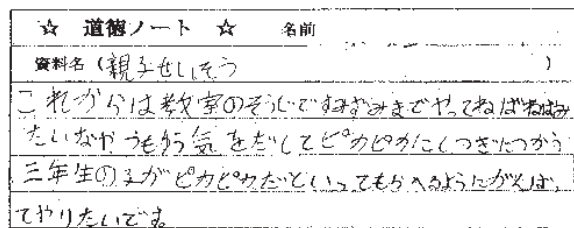
T 1：「みんなのために進んで働く気持ちがいい」(板書) こんな気持ちありますか。これから掃除するときは、どんな気持ちでやりますか。思ったことを書きましょう。

T 2：書いたことを読んで発表しましょう。

- C 1：山田川清掃をこれからも進んでやりたい。地域の人たちが、きれいな川だと思ってくれるようにがんばりたい。
- C 2：階段掃除の時に、給食をこぼした所を避けてやっていたけど、これからは汚い所も勇気を出してきれいにしていきたい。

○掃除は「人のために進んで働く喜び」という価値を子ども達が価値実現を果たしやすい場面であり、道徳的実践力を高めるのに効果的であった。

○書くことにより、一人一人が「これならできそうだ」「やってみたい」などと、今後の生き方に自分を位置付けることができた。



●展開の後段における価値の内面的自覚の過程では、「自己のよさの再発見」することで自分自身の生き方に自信をもたせたい。その上で道徳的実践へつなげていくことが大切である。

→「私にもできた」という体験を思い出させるために、「主人公みたいに『えいや。』とがんばったり、終わった後で気持ちがよくなったりしたことはない？」などと、振り返らせやすくするための発問も必要である。

●「自己のよさの再発見」ができるためには、「本時のねらい」「子どもの実態(反応)」「資料内容」を適確に分析する中で、道徳的実践力が高まるように最もふさわしい発問を考えていくことが必要である。

【終末】 教師の説話・児童の振り返り

- 掃除に一生懸命取り組む様子が書かれている児童の日記を教師が読んで紹介する。

【終末の実際】

T 1：初めてトイレ掃除に取り組んだMさんの日記を紹介します。

日記：『黄色くこびりついた汚れを一生懸命磨いてきれいにした。次の人が使いやすいように自分から進んでやって気持ちがよかった。』

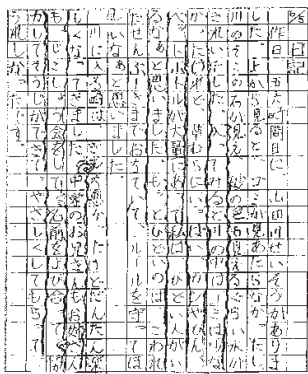
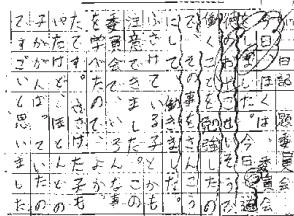
○価値の本質に迫るよい姿を紹介することによって、道徳的実践への意欲化を図ることができた。

研究内容 (3) について

全教育活動の中で、自らの道徳的な成長を実感させる指導の工夫

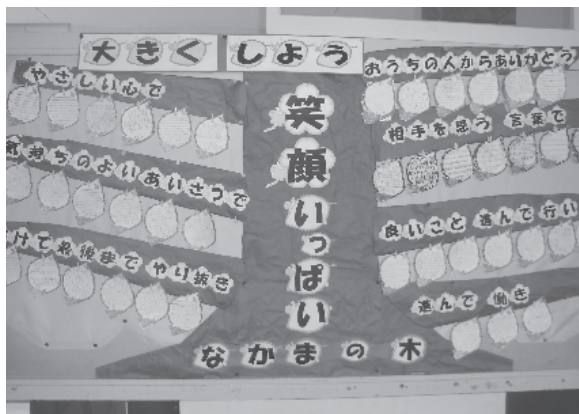
方法①活動後の振り返りの場を意図的・効果的に位置付ける。

○活動後に取り組みの様子を振り返らせ、できる限り書くことを大切にしました。書くことで、一人一人の考えを確かなものにする事ができた。



○よい姿や素晴らしい行為が見られたときは、タイムリーに道徳の時間に学んだ価値とつなげて褒めたり、学級通信などを通して広めたりした。このことで、道徳的な成長を実感させることができた。さらに道徳的实践への意欲化を図ることができた。

方法②朝の会、帰りの会などでのよいこと見つけて、価値につながる事実に気付かせる。



大きくしよう なかまの木 3年

○朝の会・帰りの会でのよいこと見つけては、価値を分けて位置付け、道徳の時間に学んだ価値とつなげて児童自身が成長を自覚できるようにした。

●さらに、仲間のよい姿や素晴らしい行為を見つけた児童やその姿を素直に素晴らしいと感じ取れた児童も同じくらい素晴らしいことを価値付けていきたい。

方法③道徳コーナー、よいところ見つけコーナーなどの掲示を工夫して活用し、価値につながる意識を高める。



学級のたからもの・道徳コーナー 2年

○「道徳コーナー」では、資料の挿絵を利用した掲示をし、道徳の授業で学んだ価値をいつでも振り返ることができた。また、いろいろな活動前後に大切にしていきたい価値につながる意識を高めることができた。



よいこと見つけコーナー 2年

○よい姿が見られたときは、道徳の時間に学んだ価値とつなげて褒め、道徳的实践への意欲を広めることができた。

○「よいこと見つけ」のコーナーは、お互いに認め合う場となり、各自の自信につながり認められた児童に優しさを生むなどの効果が見られた。



学級のたからものコーナー 1年

●さらに計画性・指導性・こだわりのある掲示を工夫し、コーナーを学級の歩みや生活にリンクさせて、全教育活動の中で意図的に継続することにより、道徳的实践を自覚できるようにしたい。

5 終わりに

研究を進めながら改めて、自己を見つめ、よりよい生き方を学ぶことの大切さ、道徳的实践力に支えられた実践を繰り返していくことで、実践力も実践も深まっていくことを実感した。これまでの成果を大切に積み上げながら、今後も、一つ一つ課題について指導法を工夫し取り組んでいきたい。

(研究主任 教諭 高田みどり)

# 自立の基礎を育てる

—地域に根ざしたキャリア教育の推進を通して—

愛知県豊田市立足助中学校

校長 藤澤 卓美

## はじめに

本校は愛知県東部の山間に位置し、校区内に10の小学校在学する。校区内の面積は193.27km<sup>2</sup>と広く、標高は700mから80mと高低差が大きい。全校生徒は約250名で、その内の約70%がバスで通学している。朝、校門坂で出会う生徒、廊下や階段ですれ違う生徒らの爽やかなあいさつからは、生徒同士、教師と生徒の関係が良好であることを強く感じる。

### 1 主題設定の理由

#### (1) 本校の教育目標から

「足助の風土に立脚した教育活動を展開する中で、豊かな人間性と確かな学力を育成し、自立心に富む生徒を育てる。」が本校の教育目標である。

校訓「自立」のもと、以下の3点を「自立の基礎」ととらえ、全職員が一丸となり、教育目標の達成に努めている。

- 確かな学力と、それを活かす知恵をもった生徒
- 望ましい人間関係を構築できる生徒
- たくましい体力と気力に満ちた生徒

そして、「キャリア教育の推進」を重点努力目標(マニフェスト)の一つに取り上げ、各学年の目標も明記した。

#### (3) 本年度の重点目標 スローガン「チャレンジ足助中」

○ 自他の命を大切にす「心の教育」の推進

重点目標	家庭	地域	学校	足助中マニフェスト(重点努力目標)
いじめ・不登校への対応の強化	○		○	キャリアカウンセリングを年3回実施します 親子・教師がふれあう交流行事を実施します 小学校との情報交換会を年4回以上開きます

○ 社会に生きる力を育てる教育活動の推進

重点目標	家庭	地域	学校	足助中マニフェスト(重点努力目標)
確かな学力の育成			○	学習の基礎基本を身に付け、家庭学習と授業との相乗効果で充実をはかります 教師一人2回の授業研究を行い、その成果を教育論文にまとめます
キャリア教育の推進	○	○	○	地域の福祉施設と連携して福祉交流を継続的に行っています
	○	○	○	あすけチャレンジWEEK(職場体験学習)を連続5日間実施します 地域の文化芸術等の伝達・継承に努めます

○ 次世代を展望し、視野を広げる教育活動の推進

重点目標	家庭	地域	学校	足助中マニフェスト(重点努力目標)
読書活動の推進	○		○	継続的な読書タイムを設定し、読書量の増加に努めます(朝9時～13時～15時～17時)
情報教育の推進	○	○	○	家庭・学校が連携して読書活動を推進します
	○	○	○	情報モラルや有害情報対策に取り組みます

#### (2) 愛知県の政策指針と本校の地域事情から

本校は一昨年度、県の「あいち・出会いと体験の道場」、豊田市の「チャレンジ&ドリーム推進事業」を受け、連続5日間の職場体験学習を中核に据えたキャリア教育をスタートさせた。

一方、本校区内である旧足助地区は、キャリア教育の社会的要請に加えて、少子化・高齢化の波にさらさ

れている地域の活性化を図っていく必要に迫られている。足助を愛し、誇りに思うことが、自分の将来を自ら考え、判断し、よりよく生きていこうとするための大きな礎となると考える。

#### (3) 本校の実態から

生徒は、学校生活の大半を学習と部活動に追われている。そのため、なぜ今自分が足助に生まれ、育てているのか思いを巡らせたり、家族や自分について改めて見つめてみたりする機会は極めて少ない。また、自分の将来について深く考える機会も少ない。足助に愛着と誇りをもてる生徒、足助という地域や人々と向き合い、将来の人生設計の基盤に、郷土とのかかわりを大切にして夢や希望をもとうとする生徒を育成したいと強く願う。

#### (4) キャリア教育の位置づけ

生徒は、将来、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面する様々な課題に主体的な態度で対応し、社会人・職業人として自立していかなければならない。私たちは、こうした自立の基礎を育てることが中学校の役割であると考えた。

そこで本校では、この自立の基礎の中核となる教育活動をキャリア教育であると捉え、具体的なねらいとして4つの能力(「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」)を設定した。また、学びを社会性と結びつけるために、地域の教育力を活用することにした。

このように、これまで行ってきた教育課程をキャリア教育という視点から再度見つけ直すことで、教育課程の諸活動の中で身につけた「確かな力」「豊かな人間性」「たくましい体」を有機的に結びつけ、生涯にわたるキャリアを形成していく基礎を養っていきたいと考え、本主題を設定した。

### 2 研究の仮説

地域に根ざした体験的学習、課題追究型の学習を取り入れた3年間を見通した系統的な「総合的な学習の時間」を中心に据えたキャリア教育を実践することで、生徒は郷土足助に愛着と誇りをもち、自分の将来を見据えて主体的に判断し、行動していこうとする気持ちを高めることができる。

### 3 仮説に対する手立て

(1) 生徒が足助に愛着と誇りをもつために、3年間を見通した系統的な体験的学習を設定する。

○1年次 異世代との交流をベースにした体験的学習

○2年次 連続5日間の「職場体験」を中核に据えた体験的学習

○3年次 地域の文化芸術等に着目した課題追究学習

(2) 生徒が主体的に判断し、行動していこうとする気持ちを高めるために次の3つの手立てを考えた。

①単元との出会いを工夫し、学習計画を知らせて見通しをもたせることで、課題追究への意欲を持続させる。

②個々の追究をもとに、体験的学習で何を学びたいのかを明確にして体験に臨ませる。

③体験的学習、課題追究を振り返らせ、自分にとってどんな価値があったのか、意味づけをさせる。後に、個々の追究課題を整理し、全体で学び合う場を設け、自分なりに学習活動を意味づけし、振り返る場を設けることで、体験から学びへと変容させていく。

### 4 全体計画



### 5 実践

1年次、生徒はオリエンテーションをもとに、学級テーマ、交流場所、そして活動内容を決め、足助にある3つの施設（特別養護老人ホーム「巴の里」、社会福祉協議会「まめだ館」、NPO法人ネットワーク「ハピネスあすけ」）での交流を通し、主としてコミュニケーション能力を高めた。ワークシートを利用して、交流のたびに「ふり返し」を行い、個別・グループ別の追究課題を明確にして体験を重ねた。まとめとして、

3つの施設に国語科で学んだ手紙の書き方を生かしてお礼の手紙を書き、交流時の写真を添えて送った。

ここでは、1年次に地域の異世代との交流を経験した生徒が、2年次に5日間連続の職場体験を中核に据えた学習、そして3年次の課題追究学習を展開した2年間の学習活動と生徒の変容について論述する。

(1) 第2学年『夢を育てよう』

① オリエンテーション「足助で働く人に話を聞く会」

長年足助のために尽力されてきた小澤庄一さんに「足助という町」について、「働くということ」について講話をいただくことにした。

足助のよさを生かした町づくりをされてきた方の言葉は、将来足助とともに生きていく生徒の心に響いた。

わたしは、将来保育士になりたいと思っています。保育士という仕事は、子どもに夢を与える仕事だと思います。小澤さんがおっしゃったように、自分が一番やりたい仕事で、楽しんでやれる仕事をやりたいと思いました。  
(生徒の感想)

② 突撃 職業取材

小澤さんの講演後、10名のゲストティーチャーを招き、生徒たちが仕事に対する疑問をぶつける機会をもった。

スタイリストのお話を聞いても、「仕事をしている時は楽しい。」とおっしゃっていました。だから、前の小澤さんの話と同じように「仕事は楽しんでできるものを選ぶ。」ということで、また考えが深まりました。(生徒の感想)

③ 自分と身近なところを見つめる活動

ア 問題意識を掘り起こすイメージマップづくり

自分に関するイメージマップづくりでは、今の自分のものの見方や考え方、受け継がれた命、育てきた環境、強い影響を及ぼしたエピソードという4つの観点から、生徒は自分を見つめた。課題追究していく際に、どのような追究課題を立てるかが大切と考え、イメージマップをもとにして担任と一人一人面談をし、課題設定を行った。

**【個人追究課題例】**

○家族の仕事、生き方  
「お父さんが築いたもの」「母の仕事と将来のわたし」  
「おじいちゃんの手」など

○受け継がれた命、足助とのかかわり  
「わたしが足助に住む理由」「受け継がれた川合家」  
「内藤家のルーツ」「わたしの先祖たち」など

イ 家族や家族の仕事についての理解を深める追究

生徒は、自らの課題に対し、先祖や家系図を調べたり、職業選択の動機や仕事に対する意識をインタビュー形式で取材したりして追究活動を進め、発表会を開い

た。この発表会を通して、生徒の意識を「働く」ということに焦点化することができた。まとめに「働くとはどういうことだろう。」と発問した。

働くということは、自分の好きなことを楽しくやることだと思います。わたしは、人の役に立つ仕事がやりたいです。役に立てる仕事は絶対やりがいがあって、楽しくて、自分のためにもなると思います。(生徒の思い)

発表会の最後で「職場体験であなたは何を学びたいか」という発問に「父母から仕事の話をよく聞く機会があるので、仕事の大変さを学びたい。」と記述した生徒がいた。このように生徒は、自分や自分の周辺を見直す活動から発表会を通して職場体験に対する明確な目標をもつことができた。

#### ④ 職場体験「あすけチャレンジWEEK」

##### － 5日間連続の職場体験－

8月3日から9日までの間の5日間行われた。足助地区52の事業所にお世話になった。

毎日書いた実習日誌からは、日数を重ねていくごとに周囲の人とのかかわりや仕事をする上での責任感を感じ、大変さとともに楽しさを感じることができた様子を伺うことができた。「いらっしゃいませ」と元気にあいさつをして接客

に励んでいる生徒、慣れない手つきで老人の手を拭いてあげる生徒、炎天下の中、杉の木の間伐を行った生徒など、それぞれの仕事場で、郷土足助に働く方々に支えられながら、生徒は5日間の貴重な体験を無事終えることができた。



#### ⑤ 総合発表会「足中祭」

業種別にブースを設け、働くことの一部を披露した。病院で実習した生徒は、健康のための運動の講習会を開いた。また花の木(養鶏所)で実習した生徒は、鶏の解体を披露するなど、生徒一人一人が実体験を生き生きと発表することができた。

#### ⑥ あすけチャレンジWEEKから地域貢献活動へ

単元学習終了後、「職場体験でお世話になった地域へ何か恩返しをしたい。」という生徒の思いが高まった。その思いが、40年近く続いている生徒会の地域貢献活動(ASK活動)で気づいた国道420号線のごみの多さと重なった。「森の整備がされていないからだ。」という生徒の声が、学級から学年全体へ広がり、2年生として地域貢献活動「国道420号改造プロジェクト」を立ち上げるようになった。土にまみれながら一生懸命にごみを拾い、竹を切った。この活動は、地域へと広がり、たくさんの地域の方々の協力と賛同を得て、

進めることができた。拾い上げたごみは2トン、切った竹は600本を越えた。終わってみれば、20名の保護者やボランティアの方々、24社の土木建築業者の方々にもお手伝いいただき大プロジェクトとなった。

「420号改造プロジェクト」活動後、整備した国道沿いを「風の街道」と命名した。また、

ジャングリラ足助(「わくわく事業プラン」)の実践報告会)で発表する機会を得て、自分たちの活動を地域へ発信することもできた。



#### (2) 第3学年「足助への提言」

##### ① 「足助のよさを見直そう(修学旅行)」

修学旅行は、「東京、岩地を知り、足助のよさを見直そう」というテーマで行われた。山村部の足助とは対照的な、日本の中心大都会東京と海の生活が味わえる静岡県賀茂郡松崎町岩地での体験学習を通して、それぞれのよさを知り、足助のよさを見直すことが目的である。

修学旅行後、改めて足助のよさ、理想の足助について、生徒は次のように記述した。

##### 【足助のよさ】

- ・人口が少なく、いろいろな人と関われる。
- ・人の心が温かく、居心地がよい。
- ・地域の人との交流が多いので、いろいろなことにチャレンジできる。

##### 【理想の足助】

- ・もう少し交通機関を発達させる。
- ・今ある自然を守っていく。
- ・足助のいいところをもっと伝える。
- ・足助の伝統を受け継ぐ人を見つけ、伝統を守る。
- ・改善するところはたくさんあるかもしれないけれど、今の足助のままを残すべきだと思う。

##### ② 「風の街道プロジェクト」

修学旅行後、足助のよさを再確認した3Cの生徒の中から、昨年度整備した「風の街道」がどうなっているか見に行きたい、昨年度の活動が地域にどのような反響を呼んだのか知りたいという声があがった。そこで、現場を見に行くグループと豊田市役所足助支所にインタビューに行くグループに分けて活動を行った。

##### 【現場の様子】

- ・国道沿いの草がかなり伸びている。
- ・新しいゴミがあった。
- ・昨年度の活動で取り忘れた、木の枝や竹がある。
- ・新しく竹が生えてきている。
- ・森をしっかり整備すればきれいになる。

### 【地域の人の声】

- ・各自治区でもこのような活動を大に行ってほしい。
- ・ゴミを拾うことから、自分も行いたい。
- ・将来自分たちの子どもに誇れる町にしたい
- ・子どもたちの将来にとって、よい町を残す義務がある。
- ・この活動が広がっていくとよい。
- ・明るい地域が見えてきた。(生徒の調査から)

これをもとに話し合い、昨年度の続きであるが、心新たに「風の街道プロジェクト」として立ち上げるようになった。学年集会を開き、学年全員が賛同すると、一気に活動への意欲が高まった。

生徒に、思考の深まりや変容を捉えるために、活動ごとに同一内容のワークシートを書かせた。ここでは、「風の街道プロジェクト」を行うことに対する思いや考えを記せるように、6つの項目を設けた。

### 【ワークシートの6項目】

- (1) あなたにとっての価値
- (2) 学級・学年にとっての価値
- (3) 地域にとっての価値
- (4) 今の足助をどう思うか
- (5) 今後がんばりたいこと
- (6) 感想

2回目の作業後、本校に入学と同時に足助に来て、それまで足助は住みにくい、不便だとよく口にしていた生徒はワークシートに、

「(2)新しい伝統をつくることができた。」

「(3)まだ若い力が残っている証明になった。」

「(4)中学校の一声でみんなが動いてくれるすばらしい地域だと思う。」

と記述した。

全ての作業終了後、「風の街道プロジェクトで得た価値を共有しよう」というテーマで話し合いを行い、プロジェクトの総まとめをした。

### 【風の街道プロジェクト総まとめ】抜粋

- ・この足助がどこよりも好きなのところなので、これからここに住み、大切にしたい。
- ・住んでいるところでの身近な問題をその地域の方と協力して、改善していけるような積極性をもちたい。
- ・この活動で大人の方にしてもらったことを、自分が大人になったときにそっくりそのまま返していきたい。
- ・この風の街道プロジェクトで学んだ、自然の大切さや地域全体で協力して何かをする達成感を忘れず、地域での活動や関わりを大切に生きていきたい。
- ・足助人として、ボランティアや地域をよくする活動に積極的に参加したい。
- ・いつまでたっても足助は僕のふるさとだから、足助のよさをもっと伸ばしたい。
- ・自然を大切にしていって呼びかけをいろいろな人に行きたい。

### ③ 足助の偉人調べ、総合発表会「足中祭」

その後、歴史から足助を見直す活動を実施することになった。足助には、足助次郎重範（武士）、板倉塞馬（俳人）、鈴木正三（思想家）といった歴史に名を残す人物がいる。足助出身の校長の概略説明を聞いた後、学級ごとに分担して課題追究学習を行った。足中祭では、地域の講師を招いて学んだことや、追究を重ねていった3人の足助の偉人について、映像や紙芝居などで参観者に説明した。

### 【足助の偉人】総まとめ 抜粋

- ・足助の土地は古くから歴史があることを知った。そんな足助を誇りに思いたい。足助の偉人を学習することで足助に親しみを感じ、大切にしようと思った。自分の子どもの世代にも受け継がれていくといいと思った。
- ・鈴木正三や足助次郎重範といった偉人をたくさん残した足助はすごいと思う。若い人は都会へ出て行ってしまいうけど、ずっと足助のよさがなくならないように残った人たちで大切に守っていくべきだと思う。

## 6 成果

○足助に限定した3年間を見通した体験的学習をベースとした課題追究を重ねた生徒は、足助の「もの」「ひと」「こと」から多くのことを学び、何か足助に返したいという思いをもつことができた。その思いを具体的な地域貢献活動に移すことで、多くの生徒が地域との一体感を感じ、足助を大切にしていこうという気持ちを高めた。

○明確な追究課題をもって体験に臨み、活動ごとに自分の学習を振り返ることで、生徒は、学習の価値や自分の成長を実感することができた。特に5日間連続の職場体験では、自分の体験に思いや考えを肉付けし、自分にとってどういう意味があったかを考えることで、今の自分や将来に真摯に向き合い、主体的に考え、行動していこうという姿勢を育むことができた。

### おわりに

生き方を考えるキャリア教育の主旨に沿って考えるとき、自分が生まれ、育っている足助という地域に生きる逞しい人たちと接することを「一人一人の生徒の将来へ続く道のスタート」とすることが重要だと考える。昨年度行われた全国学力・学習調査での「地域への愛着を問う」項目で、全国の値を大きく上回ったことから、本校が考えるキャリア教育が生徒の豊かな人間性の育成、社会的自立への大きな支援の一助となっていると考える。

# 地域の課題解決を通じた科学技術教育の展開

－ホヤ殻から新素材開発へ－

宮城県石巻工業高等学校

教諭 門脇 宏則

## 1. はじめに

日本は工業国であり、その高度な科学技術が日本を支えてきた。最近ではこの科学技術の進展が一層速くなり、高度な科学技術と創造性及び環境技術の習得が必要となってきた。本校は工業高校であり、高度な科学技術の装置や設備が設置されており、従来から上記の課題解決に力を入れてきた。また、本校は日本でも有数の漁港である石巻港に隣接しており、生徒たちは豊富な海洋資源に接して生活している。特に「ホヤ」は石巻の特産品であり、生徒の馴染みも深い。

近年、このホヤの被のう（皮）が産業廃棄物として不法投棄されている問題が浮上し、新聞等でも報道され生徒たちの関心を引いた。生徒達は、地元にとって大きなこの課題を解決する方法を研究したいと考えた。

そこで、生徒達はクラブ活動（天文物理部：12名）の中でホヤ被のうの有効利用について主体的に研究を始めた。この教育は、授業で学習している科学技術の基礎を活用して、クラブにおいてホヤ被のうの有効利用についての研究を行うことをとおし、「科学技術」及び「環境技術」の習得とその深化を行う。また、様々な工夫を生徒自らが行うことを通し、「創造性の育成」から「生きる力の育成」を行うことを目的とする。

## 2. 概要

ホヤはその筋膜部分のみが食用として利用されており、外側の殻である被のうについてはまったく利用されず、毎年大量のホヤの被のうが廃棄されており、その廃棄については地元で大きな問題になっている。廃棄先に困った水産加工業者が違法に海へ投棄したのである。このホヤの被のうを生徒たちが調査したところ、ツニシンと呼ばれる非常に高い強度を持つ成分が含まれていることがわかった。このツニシンはセル

ロース系の多糖類であり、強度が高く、使用後は自然に分解される環境に低負荷な「生分解性」の物質である。そこで北海道及び宮城県を中心とした東北地方で産出されるホヤ被のうの有効利用の可能性について、平成18年度から現在まで、特にツニシンを活用した方法を化学的手法を取り入れ、生徒が主体となり、研究してきたのでその結果を報告する。

## 3. 使用した研究材料・機材及び装置等

### (1) 研究材料

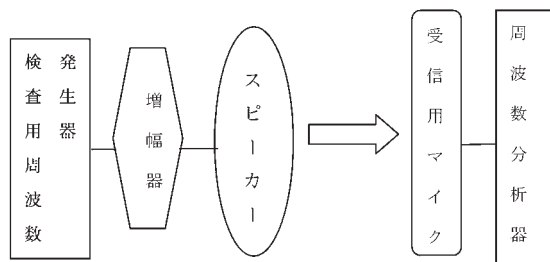
石巻産マボヤ、雄勝産マボヤ、北海道産赤ホヤ

### (2) 主な機材等

走査型電子顕微鏡（SEM）、フーリエ変換赤外分光光度計、X線元素分析器、パソコン2台

### (3) スピーカー特性測定装置による周波数分析

以下の様にスピーカー特性測定装置を製作した。テスト信号発生ソフトとして「Wave Gene」を、高速リアルタイムスペクトラムアナライザソフトとして「WaveSpectra 解析」を使用した。入力した信号はサイン波等6種類の波形で、1000Hz、-10dbの特性であり、各種のスピーカーから出力し、周波数及びノイズ分析機で分析した。



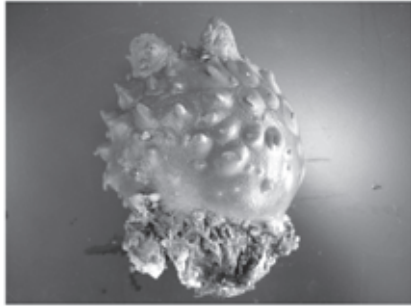
スピーカー特性測定装置の構成図

#### 4. 指導内容及び方法

##### (1) 実験内容の概略

##### (ア) ホヤ皮のうの部位と存在量に関する調査

各食用ホヤ中に含まれる被のうとその部位の割合を調査し、有効利用した場合の資源量を検討すること、及び再利用が可能かどうかを大量のホヤを種類毎に解体し、部位毎に割合を調べ研究した。

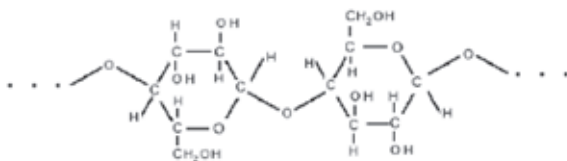


雄勝産天然ホヤ

ホヤ全体の国内流通量が年間1万トンであるので、上記実験より、これの被のうが占める割合を約21%~25%とすれば、一年間に排出される被のうの量は、約2,100 t~2,500 tと推測した。資源の量として、十分であることがわかった。

##### (イ) ホヤ被のうからのツニシン抽出方法の研究

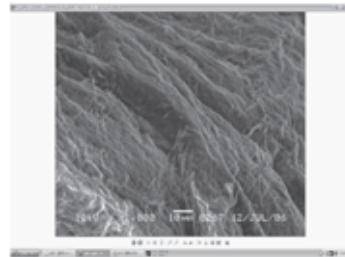
ホヤ被のうを有効利用するために、被のう中から有用成分である「ツニシン」を抽出した。被のうは非常に丈夫なうえ、参考文献も少なく、抽出は困難を極めた。以下にツニシンの化学構造を示す。



ツニシンの化学構造

この構造から、生徒達はツニシンの構造がセルロースと近いことを知り、セルロースの抽出方法を参考に独自にツニシン抽出方法を開発した。方法の概略は、被のうを水酸化ナトリウム水溶液で加熱後、氷酢酸と亜塩素酸ナトリウムを加えて加熱、抽出できた。以下に得られたツニシンのSEM写真を示した。その

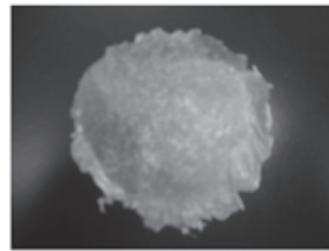
繊維の太さはおよそ1 μm以下である。



抽出したツニシンのSEM写真

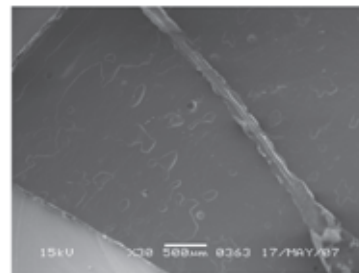
##### (ウ) ホヤ被のうの溶解による有効利用研究

ツニシンは加工性が非常に悪いことが知られている。そこで唯一溶解させることができるLiCl/DMIを使用して溶解させ、フィルムを作成したときの有効利用の研究を行った。得られたツニシンフィルムはプラスチック状で薄くて丈夫にできることが分った。以下に成型したツニシンフィルムを示す。



ホヤから作成したツニシンフィルム

更に、工業的に様々な用途に応用可能なように、ツニシンで太さ20 μmのファイバー（繊維）を作ることに成功した。



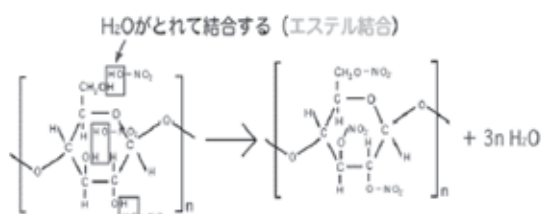
ツニシンファイバーのSEM写真

##### (エ) アルカリ・硫化処理による有効利用研究

ホヤ被のう中のツニシンをアルカリ処理した後、ツニシンゼン酸カリウムにし、溶解してから成形することによる有効利用の研究を行った。更に、ツニシンゼン酸カリウムを濃硫酸中にくわえ、ツニシンを再生した。成形性が良くなかった。

(㊦) ホヤ被のうのニトロ化による有効利用研究

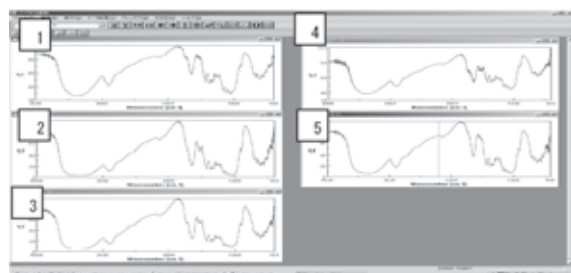
ツニシンをニトロ化し、ニトロ化ツニシンを合成してその有効利用の研究を行った。また、成形することによる有効利用の検討を行った。ニトロ化は以下のような反応で、適切に冷却しながら行った。



ツニシンのニトロ化の反応式

(㊧) ホヤ被のうのアセチル化有効利用研究

ツニシンの水酸基をアセチル化し、その有効利用の研究を行った。得られたアセチル化ツニシンは、成形性がよく、可塑剤を加えることで、プラスチック状の板に成形することができた。開発したツニシン化合物中では一番成形性がよく、将来工業化が期待できると考えられる。



アセチル化量とアセチル化ツニシンのIR図

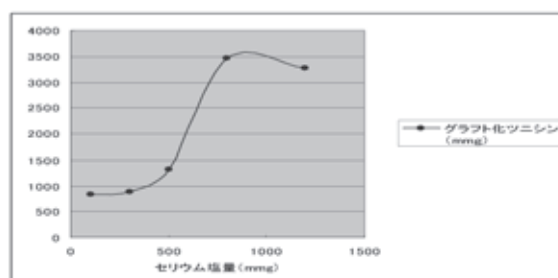
(㊨) ホヤ被のうのグラフト化有効利用研究

ツニシンにグラフト重合させ、PMMAを化学的に結合させた。生徒達が初めて創り出した物質である。柔軟性もあり、将来工業化が期待される。



グラフト化ツニシン

下記に反応に使用したセリウム塩とグラフト化ツニシン生成量の関係を示した。反応の最適化が可能である。



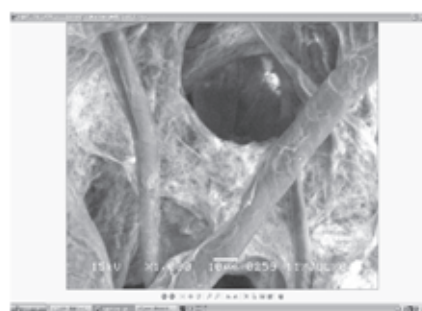
グラフト化ツニシン生成量

また、以下に走査型電子顕微鏡 (SEM) 及び X線元素分析等の高度な装置による作業の様子やその結果を示した。生徒達は、教師が基本的な原理や考え方、操作方法等を教えると、後は殆ど自分たちで研究を行える程成長した。

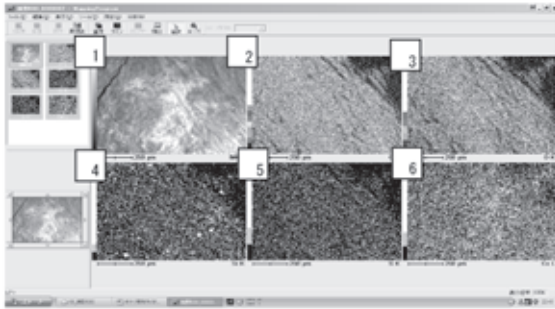


SEM及びX線元素分析装置による分析

以下は生徒達が新しく創り出した物質「グラフト化ツニシン」の電子顕微鏡写真であるが、セルロース繊維にびっしりとグラフト化ツニシンがくっついていることがわかった。高い強度の理由もここから証明された。



グラフト化ツニシンSEM写真

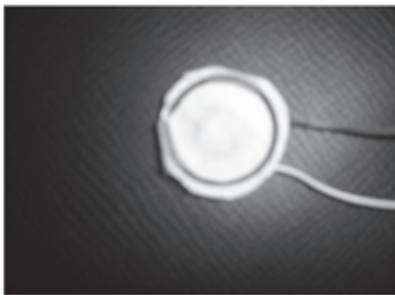


グラフト化ツニシンX線元素分析

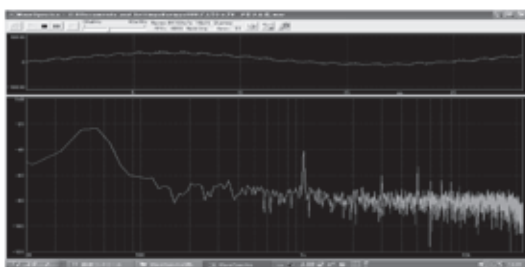
また、上にグラフト化ツニシンのX線元素分析の定性分析結果を示した。これからツニシン繊維とPMM Aが結合しており、その分布状態まで分析できた。内容としては高度で難しいが、生徒達は自分たちの研究成果をはっきりと観測することが出来て充実感を得ることができた。

#### (ク) ホヤ被のうの工業製品への有効利用の検討

ツニシンフィルムのしなやかさ及び強さを利用して、スピーカーの振動板とした場合にどのような特性が得られるのかを研究した。ホヤ被のうから抽出したツニシン及びその誘導体は、それぞれ特性が異なることがわかったので、これらの特性を踏まえて、ホヤ被のうのツニシンから用途にあった各種スピーカーを作成できた。ノイズ低減に効果がある。



アセチル化ツニシンスピーカー



アセチル化ツニシン製スピーカー周波数特性

## (2) 指導方法の概略

### (ア) 特許情報の活用

生徒はインターネット上において、特許庁の電子特許図書館を活用し、研究計画作成や研究の遂行に有用な情報を集めた。

### (イ) 大学との連携

京都大学へ教師が連絡を取り、生徒達がわからない所のアドバイスを受けるとともに、参考資料を送付いただいた。そして、生徒が自ら研究を進めた。

### (ウ) 研究機関との連携

地元石巻市にある県の研究機関「水産加工研究所」において、指導いただき、また、資料もいただいた。

### (エ) 実験方法の調査・検討

実際に実験を進めて行くにあたって、実験方法の詳細な調査等は、文献とインターネットにより主に行った。また、上記の大学及び研究機関からいただいた資料も大変参考になった。

## 5. 実践の成果

(1) 今まで邪魔者扱いされてきたものを有効利用し、環境を意識した新材料を開発する柔軟な発想と、積極的に開発する科学技術者としての意識の高揚の醸成。

(2) 日本の将来を支える科学技術者として、必要な高度な科学技術及び環境技術の習得と環境問題についての意識やその資質の伸長。

(3) 地域や関係研究機関と連携を図り、地域の問題や課題解決に積極的に参画する意識の高揚。

この活動は、多数の報道機関を通して地域の方々へ知れ渡り、多くの協力と応援を頂いた。生徒たちはこの大変な活動をとおして、人間的にも鍛えられ、大変成長した。学校生活も充実し、学習意欲も向上した。

今まで様々な面で消極的だった生徒も少しずつ積極的になってきた。又、主体的に様々な発表の場において活動を行い、充実感を得て、更に積極的に研究活動を行っていくという望ましいサイクルができており、これは「生きる力」が育成されて行っていることと考えた。更にこの教育方法は、同様の設備を持つ全国の工業高校において、その地域の特性や特産品を活用したり、課題解決を目標にする事で活用が可能である。

# 国語科が推進するメディア・リテラシー教育

—情報社会における国語科の使命—

奈良県山添村立山添中学校

教諭 宮久保ひとみ

## 1 はじめに～研究の動機～

我々は、加速する情報社会の中で生きている。ケータイやネットに依存し、バーチャルな世界に引きこもる若者やネットいじめも問題となっている。前大阪大学総長の宮原秀夫氏は、「ITはバーチャルで、真のコミュニケーションではない。face to faceが促進されるシステムが必要。」と警告する。劇作家平田オリザ氏の「引きこもりやニートはコミュニケーションの問題。若者の表現の意欲が低下している。」という指摘も耳が痛い。情報教育の推進が叫ばれているが、「伝え合う力」を育成すべき国語科は、どうすればよいのだろうか。数年前から国語科でもメディア教育が行われているが、メディア・リテラシーは、単発的な取組や国語科だけの取組でも育たない。国語科を中心に全校でいかに連携して取り組むかについて提案したい。

## 2 研究の方向

本校は、奈良県北東の山間部にある生徒数百名足らずの小規模校である。生徒は素直でおとなしく、どんな情報も鵜呑みにする傾向がある。また、自信のなさや遠慮から、なかなか自分の意見が言えない生徒も多い。しかし、卒業後はより多くの情報にふれ、多くの人と交わることになる。生徒の実態と時代の要請から私は彼らに、情報を活用して主体的に生きるためのメディア・リテラシーと、積極的に人間関係を築く「コミュニケーション力」を着実に育てることが大切だと考え、次の3点に留意し、系統的な指導を組み立てた。

### A 「読む力」と「書く力」の連動

「発信者としてのメディア・リテラシーを育てるには、まずしっかり書くこと、話すこと。」と宮原氏は言う。また、全国的にPISA型読解力（書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力）育成が課題となっているため、従来の作文指導をより系統化すると同時に、説明的文章の構成や表現を評価しながら読む指導を強化し、書く指導と結び付けた。

## B コミュニケーション力の育成



国語科メディア・リテラシー教育のイメージ

一般的にメディア・リテラシー教育で重視されるのはプレゼンテーション力だが、本校では総合的な学習の時間に総合基礎「国語」科を設け、「福祉体験のポスターセッ

ション」、「職場体験のニュース番組制作」等の支援をした結果、生徒が堂々と発表できるようになってきた。

そこで、話し合いの指導を強化したり、演劇を取り入れたりして、互いの価値観を交流して話し合う力を育て、初対面の人とも積極的にコミュニケーションが図れる力につなげたいと考えた。

### C 情報発信の意欲を引き出す指導の工夫

AやBの指導において、情報発信の推進力となる意欲を引き出せるよう指導を工夫した。なお、全校態勢でメディア・リテラシー教育を推進する素地を作るため国語科から積極的に情報を発信し、メディア・リテラシーの必要性を訴え、技術を広めたいと考えた。

## 3 研究実践の内容

### (1) 系統的・継続的な意見文の指導で、相手を意識し、自分の思いを素直に書く力を育てる

1年1学期に3段階で集中指導し、どの生徒にもまとまった分量の意見文を書く力を育ててきた。

#### ① 4月「野外活動体験」リレー作文

・200字程度。時系列で分担し、生き生きとした体験文を書く。材料があり、短いため書きやすい。

#### ② 5月「水の作文」

・1,200字以上。「水を大切に」というテーマが設定

されている。村は水に恵まれ、作文材料も集めやすい。

### ③ 7月「少年の主張」等（意見文）

・1,600字程度。テーマは自分で考える。中学生や社会に対して分かりやすく主張する文を書く。

②と③は、3年間で次のように発展的に指導する。

1年 事実と意見を書き分けた体験文

2年 根拠を明らかにして書く意見文

3年 構成を工夫した主張文

作品はコンクールに応募する。入賞作品は文化発表会でスピーチさせ、他生徒へのモデルとしてきた。

## (2) 系統的・継続的に話し合いの場を設け、自分の意見を意欲的に発信する生徒を育てる

討論ゲームからディスカッションへ、徐々に人数を増やししながら、発展的に指導している。

1年：グループ討論「テレビゲームは子どもをだめにするか」等の論題をめぐり、2派に分かれ、立論をミニポスターに書いて討論。白熱した討論を展開した。

2年：パネルディベート 小説「走れメロス」を材料に必要な情報を探し、説得力のある根拠を示して討論。他の班に負けまいと、攻防に総力を注いだ。

3年：パネルディスカッション・対談 メディアについての話し合いと将来の夢についての対談を実施。

## (3) 対話劇で、他人と積極的にコミュニケーションする意欲を育てる

積極的に人間関係を築くコミュニケーション力の育成を目指して対話劇指導を行い、授業を公開した。

### 2年 対話劇Ⅰ「朝の教室」（平田オリザ脚本）

声優の外部講師を招き、転校生がやってきたという設定でダンスも取り入れて実施。どの班も展開を工夫し、参観者の前で、楽しく演じた。

### 3年 対話劇Ⅱ「電車内で知らない人と対話をする」



講師に平田オリザ氏を招き、電車内で隣席の人とどう対話するかというワークショップを開いた。グループで話し合い、窓外に東京タワーを見つける、横に来た人が女優だと分かる、など工夫を凝らして創作し、のびのび演じる姿が見られ、終始「楽しい。」という声 leaked。終了後は、平田氏に講評していただき、生徒たちは自信を深めていた。

## (4) 説明的文章の評価読みで、情報受信力を発信力に結び付ける

説明的文章が分かりやすく書かれているか前向きに評価する学習を、能動的に自己評価しながら書く学習に結び付ければ、書く意欲も高まるのではないかと考えた。テキストの中には、情報が偏ったり、構成がとらえにくかったりするものがあるため、複数の文章を用い、情報や構成を比較して、評価させた。

### ① 1年〔入門期〕と2年〔応用期〕の学習

年	月	教材名	学習内容・ねらい
1年 入門期	4	指示語と接続語	・説明的文章の指導前に扱い、文章構造をとらえやすくする。
	5	三宮麻由子 「ユニバーサルな心を目指して」	・総合的な学習の時間「福祉体験学習」と関連。初めと終わりが照応しているか評価する。
2年 応用期	6	大場信義 「ホタルの里づくり」	・一般的な事例を挙げた新聞記事と比較して視点の違いをまとめ、情報を多面的にとらえる。
	7	井上恭介 「壁に残された伝言」	・筆者が語る執筆意図を矢印や囲みを用いて構造的にメモし、文章に再構築する。

### ② 3年〔発展期〕「メディア・リテラシーを考える」

これまでの学習のまとめとして、論説文の評価読みと話し合いを組み合わせた総合単元を設定した。比較する論説文は、情報発信のしかたやメディアとの付き合い方を考えるのにふさわしいものを二つ用意した。

#### i 学習計画（全10時間、3年7月）

次	教材名	学習内容
1次 (2H)	荒巻 裕 「平和を築く」	事例が適切か評価する。関連資料より、レポートを書く。
2次 (3H)	A 菅谷明子 「メディア・リテラシー」	キーワードを基に色ペンや囲みなど工夫して分解図を作成し、効果的な構成を考える。
3次 (1H)	B 水越伸「メディア社会を生きる」	A・B二つの論説文では、どちらが分かりやすいか、グループで観点別に評価する。
4次 (4H)		「新聞」「電話」「テレビ」「パソコン」とどう付き合うか、パネリスト（中学生班4つ）、フロア（会社の代表者の班4つ）、コーディネーター班1つを作り、全員参加のパネルディスカッションにアレンジして実施した。

#### ii 第3次 論説文比較で情報受信力を情報発信力に

二つの論説文は、どちらが分かりやすいか、比較の観点をグループで考えさせ、話し合わせた。

生徒はまず、互いの評価が違うことに「どうして？」と驚き、グループで活発に話し合った。その後、各グループの話し合いの経過と結果を報告させ、最終結論を出した。その結果、生徒は、観点4を除き、後の項目はBのほうが優位であり、総合的にもBのほうが分かりやすいと結論づけた。

	比較の観点(情報受信)	情報発信との関連
1	題名は適切か(内容にふさわしいか)。	題(テーマ)に沿って書けたか。
2	分かりやすい例が挙げられているか。	身近で具体的な例を挙げられたか。
3	主張がよく伝わる構成になっているか。	構成をしっかりと考えて書けたか。
4	体験を基に説得力のある意見を述べているか。	実体験を基に、説得力のある意見に結び付けたか。
5	使われている言葉は適切か(難易度も)。	具体的な言葉で分かりやすく書けたか。

その後、この学習を意見文を書く学習に結び付けるため、自分が意見文を書くときのことを想定し、分かりやすい情報発信の観点を話し合わせた。それが上の表の右である。この学習は互いの価値観を交流する機会となり、読み手を意識して書く重要性を意識させることになった。この単元学習の直後に、(1)の③の意見文の指導に入った。

### iii 第4次の指導について

事前準備で、パネリストには「各メディアとどう付き合うか」、自分たちの主張を視覚的に訴える効果的なポスター制作(模造紙半分)、フロアは予想される中学生班からの質問に備え、企業側の立場での答弁準備、コーディネーターには、話し合いの趣旨説明の原案作成と討議の柱を予測させた。なお、パネリストの主張のまとめ方として、論説文に出てきた「光と影(利点と欠点)」のキーワードを具体的に考えさせた。

#### <パネルディスカッションの流れ> (50分)

- 1 コーディネーターの初めの言葉  
→趣旨説明・進行方法、テーマ確認・パネリスト紹介
- 2 4つのパネリストから意見発表  
→その後、それぞれのフロアと質疑応答
- 3 パネリスト・フロアの意見交流  
→4つの立場を超えて意見のやりとりをする
- 4 パネリストとフロアによる協働のまとめ  
→ホワイトボードに工夫して再提案を書き表す
- 5 パネリストの最終発表
- 6 コーディネーターによるまとめ

#### □評価規準及び評価方法

【関心・意欲・態度】…ディスカッションに積極的に参加し、考えを深めている。

<授業観察・ワークシート・評価シート>

【話す・聞く力】…分かりやすく、説得力のあるまとまった内容を話し、共通点や相違点を考えながら聞いている。構成を考え、具体例や根拠を示しながら主張している。

<授業観察・準備シート記入状況>

【書く力】…自分の意見が効果的に伝わるように、構成を工夫して書いている。

<ポスター制作、ボードまとめ>

【言語についての知識・理解・技能】…役割を理解し、話の流れをとらえて参加している。

<授業観察・評価シート記入状況>

私たちは様々なメディアに囲まれて生活を送っています。その中で私たちはメールを送ったり、テレビの取材でインタビューに答えたりと、情報の送り手・表現者にもなっているのです。そんなだれもが情報を送れる社会で私たちは大げさにももの言ったり、曖昧なことを言ったりするだけで簡単に嘘をつくこととなります。そんな社会で私たちはどう情報を受け止め、表現していけばいいのでしょうか。

(コーディネーター趣旨説明より)



生徒は、視覚に訴えるポスター制作や、分かりやすいメモの工夫、分解図の作成等の既習事項を話し合いの場に応用し、これまでに付けたメディア・リテラシーを情報受信と発信の場で総合的に駆使して、メディアとの付き合い方を話し合った。班内や全体の意見交流の場で生き生きと話し合い、時間が足りないほどだった。コーディネーター班は、各班の様子を積極的に取材して回り、討議の柱をつかもうと努めた。日頃目立たない生徒が堂々と発表し、パソコンは堪能だが寡黙な生徒がボードに明瞭な分析をしてみせた。教師と生徒の相互評価をシールで表し、速報版としてコメントを添えて張り出すと、にぎやかに、学習を振り返っていた。



#### (5) 国語科から情報発信し、教師間の連携を強化する

- ① 月1回、国語科通信を発行し、全校朝礼時の生徒スピーチの講評、授業や生徒作品の紹介等を行っている。生徒には授業を振り返り、今後の学習に展望を持てるようにした。また、他教師にも配り、国語科の取組を知ってもらい、関連を図れるように心がけた。
- ② 話し合いの授業や対話劇は研究授業や公開授業とし、生徒の実態を知り、変容や効果を確認していただく場とした。
- ③ 総合的な学習の時間のポスターセッションや新聞制作、番組作りなどの場面で、積極的に支援した。

### 4 成果と課題

#### (1) 書く意欲と構成を工夫して書く力が向上する

論理的に書く力が高まり、各種コンクールの入賞者も増えた。文化発表会等で堂々とスピーチする生徒の姿に刺激を受け、自分も来年は発表したいと言う生徒が出てきた。また、日頃のテストでも記述式の問題を最後まで書こうとする意欲が高まった。

#### (2) 相手の考えを理解しようとする態度が育つ

パネルディスカッション後のアンケートでは、「相手の話をしっかり聞く態度 (72%)」、「相手の主張と自分の考えを比べて理解しようとする態度 (64%)」の高まりが見られた。次に生徒の感想を挙げる。

相手の考えを聞き、自分の考えと照らし合わせて自分の意見を深くまとめられる。他人の前でも相手に流されず、積極的に発言できるようになる。高校生になったら、いろんな人と出会うだろうし、ディスカッションで学んだことをしっかり身に付け、深くかかわりをもてるようにしたい。

1年時は意見が言えなかったり、言い合いになったりすることもあるが、3年時には相手の意図をとらえ、意欲的に発言するようになった。対談では、将来の夢を談笑していた。今年1月には3年道徳の参観で「赤ちゃんポスト」を論題にディスカッションを行った。

(生徒感想) 同じ賛成の意見でも、違う考え方もあるし、反対意見の中にもなるほどと思うことがあり、いろいろな意見を聞き、考えが深まった。ディスカッションの楽しさを知った。

#### (3) 対話劇でコミュニケーションへの意欲が高まる

対話劇ではどの生徒も活発に演じ、「あの子にあんな一面が。」と教師を驚かせた。また、自分たちの劇

をよりよいものにしようと、アイディアを積極的に提案する姿が見られ、他者と関係を結ぶ方法を話し合っ

#### (4) 説明的文章の評価読みで情報の受発信力が高まる

3年の論説文比較では、「論説文Bが『地球の反対側』という言葉を用いているのに対し、Aは『地球の裏側』と書いているのは失礼ではないか。」という鋭い指摘が出た。また、3年では主張を明確にまとめたポスターが制作できるようになり、2学期の論説文の予習段階で論理構造をとらえた分解図が書けるようになった。波状的に指導を行った成果だと考える。なお、マグネット板や色ペンを用いた話し合いは、全生徒が参加でき、すぐ消えてしまう音声情報の整理に有効だ。

#### (5) メディア・リテラシー教育への関心が高まる

研究授業で生徒の意欲的な姿に学習効果を確認していただき、通信を見て「もっと討論をさせよう。」と提案されるようになった。また、全教育活動を俯瞰し、指導内容を系統的にまとめた全教育活動相関表を作成して、情報教育に向けた連携意識が高まってきた。

#### (6) 情報倫理教育の必要性

ケータイやネットは予想以上に生徒の間に浸透している。今後、「情報とコンピュータ」を扱う技術科との連携をさらに強化し、情報倫理教育を確立し、その可能性と危険性の両面から教えなければならない。

### 5 終わりに

新学習指導要領では、他教科でも言語の力を育成することが求められている。国語科は、使命感を持ってその支援にあたらなければならない。その際、全教育活動を通じて早急にメディア・リテラシー教育を推進すべきであることを伝えたい。3年生のディスカッションでは、メールで悪口を書かれるより、直接悪口を言われるほうが嫌だと感じる生徒が多かったが、これは実際に友達との対立を体験できているからだと考える。摩擦を避け、表面上友達に合わせている生徒は、ネットで友達だと思っていた子の本心を知って傷つくことがよくある。ノーケータイ空間である学校に「face to face」で価値観を交流させる場を作り出せば、互いの思いに気づき、責任ある情報発信ができる生徒に育つのではないか。そのために今後も、国語科が牽引役となってメディア・リテラシー教育を推進したい。

# 地域と共に歩む分教室をめざして

～隣接する中学校との共同教育を進め、相互理解を深めるための取り組み～

島根県立出雲養護学校 大田分教室  
校長 江角 仁

## 1 はじめに

今、障害児教育は「特別支援教育」へと大きな転換期を迎えている。そうした時期に、4年前に開設された出雲養護学校大田分教室は、島根県内で初めて市立中学校の敷地内にできた県立の養護学校（小・中学部）である。設置までには、市民や保護者などの自宅から通学可能な養護学校設置要求の運動などがあって実現した学校である。そのため、分教室が開設された当初から、「地域とのつながりを重視した学校づくり」「隣接する中学校との共同教育による相互理解の実践」を経営の柱として掲げて取り組んできた。さらに、時代のニーズや学校設置の意義を踏まえて、特別支援教育のセンター的な役割も果たしていこうとしている。

そこで、地域に根ざした養護学校経営をめざした取り組みの中でも、隣接する中学校との取り組みについてまとめた。

## 2 共同教育の取り組み

### (1) 昨年度までの様子

お互いの交流や相互理解をはぐくむ場としては、①日々の分教室掃除、②行事交流、③授業交流、④昼休みなどの自由時間、⑤その他がある。

昨年度までの様子を振り返ってみると、毎日の掃除や昼休みに遊びに来る1年生との関係作りは進むが、1年生時のかかわりを次学年や全校でのかかわりで広げていくことが大きな課題であった。

### (2) 分教室と中学校の共同教育のねらい

共同教育のねらいとしては「相互の理解を図る」ことである。さらに、分教室としてのねらいを次のように考えている。

- 同世代の人とのふれあいを通して、自己肯定感や自己客観視がもてるようになる。
- 社会のルールを学び、大集団やいつもと違う集団、場所でも自分の力を発揮できるようになる。

さらに、学習活動の充実を図り、興味・関心の幅を広げる。

### (3) 今年度の取り組み

#### ① 指導上大切にしたこと

##### ○ 見通しの持てる取り組みを積み上げる。

昨年の行事参加の経験を、分教室生徒の見通しの土台とし、さらに関係作りが深まる参加になるように工夫する。(体育祭、文化祭、送る会)

##### ○ 「総合的な学習の時間」の取り組みとして、生徒の主体性を大事にした実践を柱にする。

「昼休み交流企画」を中学部の「総合的な学習の時間」の交流学习として位置づけ、企画や運営を生徒主導のものにして、内容の充実を図る。

表1 「具体的な交流場面」

	場面（時間・対象）	活動内容
①	掃除（毎日10分 1年生交替で）	・分教室の掃除に10名程度が来て一緒にする
②	合同授業 （特別支援学級）	◇畑作業（年間数度合同で） ◇調理実習（学期1回ずつ） ◇英語（ALTも参加）
③	プロジェクトS （春・秋 2回 昼休み 希望者）	・企画&準備（総合的な学習の時間） ・中学校全クラスに給食時間にPR、放送でのPR
④	交流会 （生徒会執行部） （放課後）	・中学校生徒会執行部の企画した交流会を分教室で実施 ◇交流会② ◇きれいにし隊
⑤	行事 ◇対面式 ◇海岸清掃 ◇避難訓練 ◇体育祭 ◇文化祭 ◇卒業を祝う会	→顔合わせ →地域清掃活動の出身地班に参加 →年2回合同実施 →交流種目、応援合戦など参加 →※太鼓出演、学年合唱参加 →お祝い出し物出演
⑥	※太鼓B&G （ボーイズ&ガールズ）	・文化祭で、3年生有志と合同発表 ・昼休み練習会
⑦	昼休み	・分教室、中学校体育館など
⑧	部活動（陸上部等）	・部活動参加希望者が参加

○ 生徒の主体性を大事にしつつ、意図的な支援をする。

特に、生徒会との関係作りを深める。また、昼休みの活動は、生徒だけに任せるのではなく、教員が仲立ちとなるような立場で遊びを作っていく。

○ 交流相手の中学生に対して、その在籍3年間のなかでのかわりを意識した年度ごとの取り組みを考えて、交流を積み上げる。

中学校1年生は、掃除に年1回は必ず来てもらう。入学して間もない1年生にこそ、分教室の存在や生徒の様子を実際に見てもらおうようにする。さらに、いっしょに活動したりする機会を持ち、その後の2年間で交流を深めていく。

中学2年生とは、授業での交流を計画していき、さらに学校行事や生徒会などの主体となる3年生とは、そうした行事や生徒会での関係作りを進めていくようにする。

○ 中学校への理解学習の場を設け、分教室の様子を知ってもらう。

年度当初に、中学校の各学年に「分教室紹介」の集会を持ち、分教室教員が理解学習として授業を持つ。同じく、教職員に対しても「分教室紹介」として教育課程や生徒の実態などについて説明する機会を持つ。

② 実践事例

(a) 事例Ⅰ 「07プロジェクトS春」

中学部の「総合的な学習の時間」の一つとして、「中学生と昼休みに一緒に遊ぼう」という単元を年2回(1・2学期。2日間ずつ)開くことにしている。

指導にあたっては、「見通しを持って取り組む」「前回の経験や学習での経験をもとに、自分たちのしたいことを考える」「自分たちで話し合っ決めて」「自分も楽しい、中学生も楽しいもの考える」などを大切にしつつ取り組んだ。

◇ 生徒の様子

【分教室生徒】

- 企画の立案では、昨年度の取り組みやクラス

表2 「07プロジェクトS春の活動内容」

	活動名	主 な 内 容
①	計画立案	・昨年度のビデオ・写真を見て振り返り、どんな活動をしたか話をし合う。
②	準備	・班に分かれ、活動に必要な「やり方表」「得点板」「道具」などを製作・準備する。
③	運営練習	・小学部児童やお互いをゲストに見立てて、運営してみる。その後反省、修正する。
④	宣伝活動	・ポスター作り、掲示。昼の放送や給食時に中学校各教室を回って宣伝する。
⑤	当日	①オープニング「太鼓」 ②各グループに分かれて遊ぶ
⑥	反省会	・ビデオや写真を見て反省し、次回の運営を考える。

表3 「07プロジェクトS春の班活動」

1	オープニング～広場にて「太鼓」披露
	グループ別あそび(各班1～2名にて運営)
①	「ストラックアウト」 屋外で9コマの板への的当てゲーム
②	「竹馬」 ゴールまで竹馬(分教室生徒作)で歩く
2	③ 「空き缶積み」 1分間で10個の空き缶を積む
④	「プラバン」 プラスチック容器を加工してメダルへ
⑤	「変わった的あて」 草の実を糸の的へ投げる

でのお楽しみ会の経験をもとに、したい遊びの案が以前に比べて出るようになった。

- 特に自己主張を普段あまりしない生徒が「私はこの遊びがしたい」「一人でもする」と強い要求を出し、それをもとに準備も根気よくして自信をつけた。
- 大勢の見知らぬ友だちを相手にすることへの不安感を持つ生徒は、頼りになる生徒に信頼を寄せ、「一緒にしてよ」と誘い、グループで取り組んだ。時々自信がなさそうな態度はあっても仲間がいることで大きな声で説明や呼び込みをしていた。
- はじめて取り組んだ1年生も2日間実施した

ことで見通しが持てるようになった。

- 宣伝活動では、中学生への接し方でトラブルも起こった。給食時のクラス宣伝は経験を積んできたことで、以前は譲り合っていたのに、今では緊張しても堂々と話すことができるようになった。
- プレ大会をすることで、見通しが持てて運営ができるようになった。
- 参加者が多かったのが充実感が持てた。

#### 【中学生（交流校）】

- 普段よく来る1年生以外の生徒や、以前分教室に来ていた2年生が多数やってきて遊んだ。3年生は姿を見せない。
- 自分たちが勝手に遊ぶところもあるが、分教室生の運営に合わせて、説明を聞いたり、「どうするん？」と尋ねたりして、やり取りも楽しみながら参加した生徒も多数いた。
- 空き缶積みがなかなかうまくルール通りにいかないときお互いのやり取りで意見調整をして、ルールをその場で変更して遊んでいた。

#### ◇ 取り組みを振り返って

多数の参加者があり、よく来る1年生だけではなく、昨年度来ていた2年生も来てくれるなど、いままでの開催時より広がりが見られた。「早く来ないかなあ」と待つ分教室生の姿もあった。それまでの「中学生への接待企画」から、「一緒に楽しむ」企画になり、分教室生徒も緊張するだけでなく、一緒にゲームを楽しんで笑顔がたくさん見られる活動になった。人とかかわりが苦手な生徒には当日参加が難しい面もあったり、大勢を一度に相手にすることで混乱する場面も見せる生徒もいた。しかし、分教室の生徒から「関わる」「話しかける」といった積極性が発揮できるようになった。中学生からも話しかける場面も増えた。

#### (b) 事例Ⅱ 「生徒会企画」と「体育祭・文化祭」

中学校の行事参加は、開設当時から行ってきたが、「お客さん」的な雰囲気、「じゃまをしないように」といった雰囲気の中で活動してきた。しかし、今年度は、中学校の方からの積極的な誘いかけや提案があり、「集団の大きさに圧倒される活動（行事）」ではなく、「楽しめる」「期待する

行事」に変容してきた。

表4 中学校への主な行事参加

生徒会 交流企画	① レクリエーション会（放課後） ・生徒会からの申し込み ・自己紹介・じゃんけん列車・かくれんぼ
	② きれいにし隊（放課後） ・中学校特別教室清掃活動に参加
	③ レクリエーション会Ⅱ（予定）
体育祭	◇ 競技参加（なわとび、綱引き、リレー等） ・交流種目（生徒会考案・準備） ◇ 応援合戦（4色に分かれて参加） ・応援練習にも参加
文化祭	◇ 太鼓発表 ・太鼓B&G（ボーイズ&ガールズ、中学生有志）も一緒に昼休み練習をし発表する。 ◇ 学年別合唱参加
※「3年生を送る会」 参加の仕方は未定だが、3年生（有志）に「ソーラン節」を教えてもらって発表したこともある。	

#### ◇ 取り組みを振り返って

今年度のかかわりの中での一番の変化は中学校からの積極的な活動提案が増えたことである。特に生徒会や、彼らを中心にした3年生との関わりが充実したものになった。

レクリエーション会を、「もっとかかわりたい」「プロジェクトSなど分教室から遊びの誘いかけはあっても、僕たちの方からは今までになかったから、ぜひしたいと思って…」と企画してきてくれた。「まずは僕たちが先頭に立って仲良くなりたいです。」といった発言をした生徒もいた。当日は、お互いに緊張したスタートだったが、「分教室の生徒が分かりやすく、一緒に楽しめるもの（やり方）を考えたい。」といった内容だったため、会が進むにつれて笑顔があふれ、話が弾んだ。分教室生の表情を見て、中学校に戻る際には、飛び上がって「やったあ」とハイタッチをする執行部生の姿があった。

さらに、体育祭では、昨年度までは1年生の分教室掃除担当者と一緒に「交流種目」として、分教室教員の考案した内容で取り組んできた。しかし、今回は、執行部が、参力者も「全校に参加募集」をし、

種目もやり方も「生徒企画」として実施できた。また、「色別なわとび」では、ハンディーをつけてくれたりもした。応援合戦も、今年は応援練習から参加したことで、リーダーたちも動きを考えてくれたり、放課後には分教室まで出かけてきて応援ダンスを教えてくれるチームも出てきた。分教室生も見通しが持てる活動になり、大勢の前でやり遂げたという満足感に溢れていた。

文化祭では、オープニングを飾る太鼓発表に3年生有志による「太鼓B & G」と一緒に昼休みに練習を積んで、分教室生も堂々と発表することができた。太鼓B & Gの募集も生徒が全校に呼びかけてくれて、応募者の人数調整もするほどになったそうだ。太鼓B & Gも真面目に練習に取り組んでくれた。しかし、練習中に分教室生と会話をしたり、助け合ったりすることはむずかしい。また、昨年度までは単に見学するだけの合唱コンクールにも、中学校音楽担当者から学年別合唱への参加を提案してもらい、学年ごとに練習をして歌った。歌詞表を持たない分教室生が「見せて」と要求し、快く見せてくれる生徒もいたりといろいろな交流場面を目にするようになった。

### 3 生徒の変容と成果

1年生の時からつきあいが始まった生徒たちの年代が初めて3年生になった。中学校の全学年が一度は分教室に来たことがある状況が今年度から始まった。そうした経験が双方にあることで、関わり方が少しずつ変容してきた。変容をまとめると次のようになる。

- 交流校の中学生は、関わりの主体が掃除や昼休みに遊びに来る1年生だけでなく、生徒会や3年生との関わり方が充実してきた。
- 分教室生徒にとっては、年間を通じての行事や活動、日々のかかわりについて見通しが十分に持てるようになり、「自分から」という積極的なかかわりや考え方が発揮できるようになってきた。

生徒A・B～「昼休みに将棋をしよう」「カードゲームを  
しに、明日来て。」といった誘いかけをする。  
生徒C～「○○君は、こんなこともできるんで～。すご  
いんで。」と、中学生との会話の中で彼への  
あこがれ感を膨らませ、自分のことのように自慢する。  
生徒D～「かくれんぼ一緒にする人いませんか～」  
と誘いかける生徒もいる。

- 分教室生徒のあそびの場が広がる。自由時間は、教師の仲立ちが不要になり、生徒同士で遊びや関係を作っていけるようになった。
- 以前は、中学生側に「違和感」からの発言や態度からのトラブルが多かったが、今年度は接する機会が多くなり、人との関わりに課題を持つ分教室の生徒からトラブルを起こすことも出てきた。
- 事例を通して、指導者側側の理解と連携も図られ、中学校側への理解学習も必要に応じて行ったり、分教室生徒もソーシャルスキルを学ぶ学習を取り入れたりして対応するようになった。



このように、双方からの積極的なかかわりと理解の広がりが見られるようになってきた。

### 4 まとめと今後の課題

太鼓B & Gの募集をし、人数調整をした中学生は「今までに分教室とかかわりを持ったことのない人を優先して選びました。」と言っていた。このように、中学校側からのかかわりも、分教室からの働きかけを待つ、受け入れるという立場から、「自分たちにとっても有意義なかかわり方をしよう。」というかかわり方にかわってきた。昼休みになると必ず分教室を訪れ、リラックスをしにきている生徒もいる。

一方で、分教室生にとっても、中学生に対してあこがれ感を持ちつつも、自分たちのやり遂げたことが増えるにつれ、自信を深め、「一緒にしたい」「同じ」という視点で、かかわりを持とうとし始めている。

このように、一緒に遊んだり過ごしたりしていく中で相互理解が進んできたことを強く感じるようになった。しかし、直接的に分教室生を指すことばとして使ってはいないようだが、中学生の中には、特別な支援を必要とする生徒に対し、無理解な言葉を発する場合もあり、このことへの課題も残っている。指導者側の連携や関係作りも徐々に進んできているが、「隣接する意義、よさ」を相互に受け取れる関係作りを今後も進めていきたいと考えている。

# 支え合い、つながり合うなかまづくり

～劇づくりを通して～

香川県さぬき市立志度中学校

校長 岡田万里子

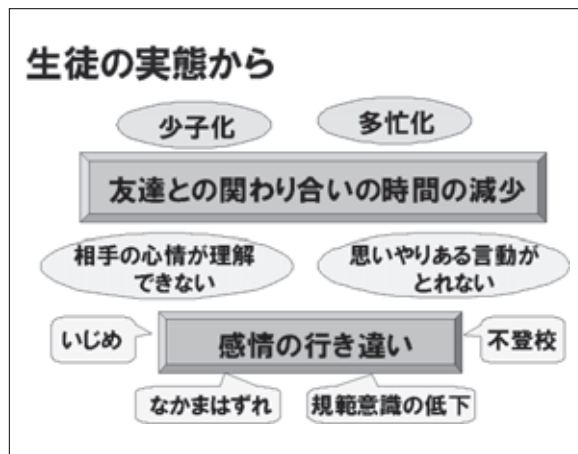
## 1 主題設定の理由

現代の子どもは人間関係づくりが苦手だと言われる。その背景として、

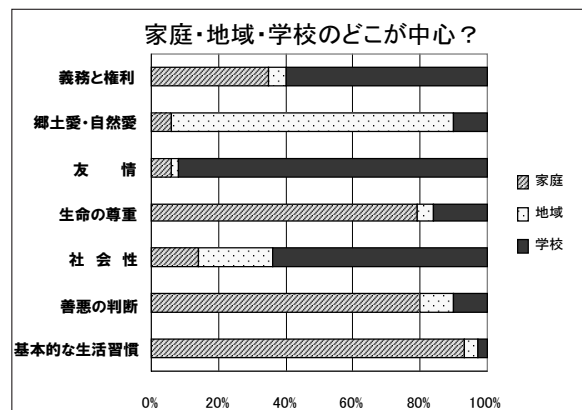
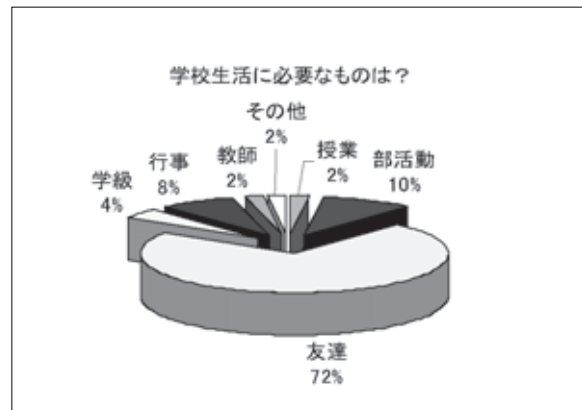
- (1) 友達と関わり合う時間的な余裕がない。
- (2) 他者と心から関わった経験が少ない。
- (3) 集団として充実感・達成感を味わった経験が少ない。

等が挙げられる。

本校は、一小学校から上がってくる生徒だけで構成されており、幼い時からの強いつながりがある反面、小学校時からの人間関係をそのまま引きずっており、狭い仲間意識に固まったゆえの感情の行き違いや誤解も多い。



現在の3年生が入学した当初（平成18年度）の全校生・保護者対象アンケートにおいても、「学校生活に必要なもの」としては「友達」と答えた生徒が72%、「悩みの相談相手」も「友達」が66%と回答する一方、「悩みの内容」も「友達関係」が27%と最も多かった。また保護者も「学校教育に期待するもの」として挙げた回答は「友情」・「社会性」が多く（次表）、ここに現在の学校の存在価値や、学校教育の果たすべき重要な要素があると考えられる。



そこで、なかまとともに集団学習活動を行わせて達成感を味わわせ、なかまを認めさせるための一方策として「劇づくり」に三年が取り組んだ。その背景には、本校の修学旅行先が今年度から沖縄に変更になり、何らかの形で下級生や保護者に学習成果を発表したいという願いもあった。

以上のことから、劇づくりに取り組むことによって、多様な考え方や価値観を持つ生徒が、一つの作品づくりに向けてイメージを具体化するために、「共創的対話」（目白大学教授多田孝志著『対話力を育てる』より）を繰り返し、そのプロセスを通して、表現力の育成はもとより、創造的な人間関係を構築することができる。また、何より、仲間と感動をともにすることができる。それが、互いに支え合い、つながり合うなかまづくりに役立つことになる、と考えたのである。

## 2 創作+朗読劇『ガジュマルの記憶』

活動の時間としては、教科横断的な学習に取り組み、生徒個々の個性を発揮させられる総合的な学習の時間を活用した。昨年度後期から沖縄の事前学習を計画的に行った（約15時間）。生徒選択の沖縄テーマ学習（自然・生活・生物・歴史・観光地）と、学年一斉の平和学習を行い、沖縄に対する学習意欲を高めさせた。

また、1月には、地元の朗読グループによる『ひめゆりの少女-16歳の戦場-』の鑑賞を行った。

こうした活動を受けて、今年度の前期25時間の総合的な学習の時間に、本格的に劇づくりに取り組んでいった。学年114名を生徒の希望により4グループに分け、7月上旬の発表会に向けて活動を始めた。おおまかな活動計画は下のとおりである。

- ① 活動方針・グループ分け……2時間
- ② グループごとに役割分担……2時間
- ③ グループでの活動……………8時間
- ④ ステージでの通し稽古……6時間
- ⑤ グループごとに修正……………2時間
- ⑥ 直前リハーサル……………2時間
- ⑦ 準備・本番・片付け……………3時間

劇のタイトルは生徒の案を採用し、『ガジュマルの記憶』とした。あらすじは、「沖縄の歴史を見守ってきたガジュマルの古木が、平和を謳歌する現代の修学旅行生にひめゆり部隊の話をし、中学生たちはこれをきっかけに平和への誓いを新たにする」というものである。劇は3部構成にし、1・3部は生徒創作の演劇、2部は元ひめゆり部隊の宮城喜久子さんの手記をもとにした朗読グループの脚本を利用させてもらった。

## 3 各グループの活動の様子

### (1) 役者グループ

第1幕担当者は、自分たちが沖縄で実際に経験した現代の平和な観光地の様子や特産物、伝統芸能などを織り込みながら独創的な台本づくりから始め、明るい沖縄を強調した。

第2幕担当者は、朗読グループの脚本を参考に、中学生にとってわかりやすい言葉に変えていき、感情を込めて読む練習を繰り返した。

第3幕担当者は、現地で実際に見聞きしたこと（平和祈念資料館・ガマ・語り部さんによる講話など）から自分たちが感じた平和への思いをせりふに込めていった。



### (2) 道具グループ

今回の劇の主役となる沖縄の古木ガジュマル（高さ2.5m）と、平和な現代の明るい沖縄の海と対照的な戦争中の暗い海の2枚の背景画（3×4m）、戦時中に多くの犠牲者を出したガマの入り口（2×3m）などの製作に取り組んだ。道具づくりは細部にまでこだわり、創意工夫を重ねていった。



### (3) 舞台グループ

効果的な劇の演出のため、映像・衣装・音響・照明・小道具づくりなどに取り組んだ。沖縄で撮影してきた写真や合唱曲の歌詞などをスライドにして写したり、波の音や爆撃音などを工夫したり、役者を照らすライトのセッティングをしたりと、劇の裏方として活動した。また、劇を盛り上げるためのポスターや舞台横に設置する看板（2×3m）づくりも意欲的に行っていた。



#### (4) 音楽グループ

沖縄で製作して持ち帰った三線の演奏、劇中で披露する沖縄の踊りエイサー、キーボード・ピアノ・フルートなどの楽器演奏などを担当し、それぞれ練習に励んだ。劇中に楽器演奏や合唱を挿入することで劇の効果は格段に上がった。



これ以外に、学年全体で取り組んだ学習活動としては、国語の時間に修学旅行の思い出を短歌に表す活動、音楽では沖縄の歌を全員で合唱する活動などを織り込んでいった。

#### 4 活動の中から

こうした活動の中で、生徒個々に意欲的な活動の様子が見られるようになった。具体的な生徒の活動状況として、

- 普段の学習活動には消極的な生徒が、音響係としての自分の役割の重要性を認識し、他の係の生徒との連絡を密接にとり、効果的な音響をめざして入念な打ち合わせをしたこと。
- 音楽に関心のある男子生徒が、自ら志願して初めてキーボードの演奏に臨んだこと。
- より実物に近づけるため、ガジュマルの葉一枚一枚に折り込みを入れていったこと。
- ミシンを使ったことのない男子生徒が、失敗を繰り返しながら、劇中で使う防空頭巾を縫ったこと。
- 「ひめゆりの塔」の記念碑づくりにも、リアル感を出すため、本物のコケを貼り付ける工夫をしたこと。
- お互いのせりふに注意し合い、感情を相手に伝える難しさと楽しさを味わっていったこと。

など、どれも今までに見たことのない生き生きとした生徒たちの活動の様子が見られ、生徒個々のすばらしい一面を発見することができた。

また、劇づくりの中で教科横断的な総合的な学習の

時間の醍醐味が発揮されたことも大きな成果であった。

国語の言語表現力、社会科の歴史学習、音楽・技術家庭科・美術の創作技能など、生徒は各教科で培ってきた知識や技能を十分に活用していった。

その一例として、生徒がつくった平和への思いを込めた短歌を、第3幕でスライドにして紹介した。

「この海は 戦争を呼ぶ 海じゃない  
この美しさ 永遠であれ」  
「戦争の 悲惨さ知った ひめゆりの塔  
次の世代に 伝えていこう」  
「悲しみの 歴史を背負う 美らの海  
平和を願い 今日も輝く」  
「平和の日 命は宝と 教わった  
この先人生 忘れず生きる」  
「春過ぎて あらゆるものが 涙して  
大地を潤し 戦後（なつ）は来にけり」

#### 5 本番当日

そして、本番当日。1・2年生、保護者、地域の方々などおよそ350名が見つめる緊張感の中、いよいよ幕が上がった。



強風のため、舞台袖の控え室で朗読劇グループの台本が飛んでいってしまったり、マイクの調子が悪かったりと、数々のハプニングもあったが、生徒たちは知恵を出し合い、協力してそれぞれの危機を乗り越えていった。およそ1時間の発表を終え、観客からの温かい喝采を受けた生徒の満面に達成感あふれる笑顔がはじけ、どの生徒も明るく輝いて見えた。

様々な評価も生徒の意欲を高めるには効果的であった。新聞記事による報道、地元ケーブルテレビによる番組放送、劇後の多方面からの賞賛の言葉などの社会的な評価は、生徒の努力を認めてもらったものであったが、それ以上に生徒の心に残ったのは、生徒個々の相互評価である。

生徒の感想の中にも、他の係や周囲の人たちへの感謝のことが並んだ。

「役者以外の道具係や音楽係の人が一生懸命に活動してくれ、ステージを陰で支えてくれました。みんなで一致団結し、無事に上演を終えたことは私にとってすごく大切な思い出となりました。みんなで団結すれば、どんなに難しいことでも乗り越えられるんだなあと思いました。」

「この劇にかかわった人すべてが、一人一人自分の役割を自覚し協力したからこそ、今回の劇が成功で終わったのだと思います。」



また、下級生からの賞賛の声は、晴れがましく、うれしいものとして生徒の心に刻まれていった。

「合唱は、さすが3年生だと思える素敵な歌声でした。物語の内容もわかりやすかったし、役者のみなさんの演技はとても上手だったし、背景画もきれいに描けていました。一人一人が助け合い、協力し合ってがんばっていました。私も今の3年生のようになりたいと思いました。」

「舞台の上だけでなく、裏でもがんばっていた人がいたからこそ、今回のようなすばらしい劇ができたのだと思います。」

学年生徒全員で一つのものをつくりあげ、成功を収めた今回の経験は、一生心に残る忘れられない思い出の活動として、生徒たちの人生の宝物となるであろう。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

今回の劇の創作で、生徒たちは多くのものを得ることができた。その成果を生徒の感想からとり上げる。

①達成感：「劇を見てくれていた人の中に泣いている人がいた。自分たちが人に感動を与えられる作品を作ったんだなああと改めてうれしかった。」

②表現力：「最初は恥ずかしく、大きな声も出せなかったけど、堂々と演技したほうが気持ちいいし、自分のためになるのだと感ずることができた。」

③状況判断：「仲間の小さな失敗も、みんなのアイデアで乗り越え、臨機応変に対応できたことがよかった。」

④連帯感：「みんなでいろいろ考えたり話し合ったりすることで、仲もよくなり連帯感が高まった。」

⑤感動：「最後にみんなで『ありがとうございます』と言った時、何ともいえない充実感と感動を覚えました。」

現代の子どもたちは表現力が乏しいと言われている。しかし、それはそうした力を伸ばす活動の機会を、学校や地域社会が十分にとっていなかったからではないだろうか。今回の活動を通して、時間と手間をかけた分だけ生徒は予想以上の成果を上げてくれたことが、上記の感想からも読み取れる。

### (2) 課題

#### ①「なかまづくり」を全教育活動に広げる取組

活動後の好意的な相互評価は、その後の諸行事への活動意欲が高まるなどの効果は得られたものの、これを教科指導などの全教育活動へ展開することまでは十分できていない。グループ・ペア学習など、高まった「なかま意識」を教科の学習活動へつなぎ、広げていく工夫を考えていきたい。

#### ②表現活動の継承

創作劇をつくることは、前述のように多くの成果を得られるものの、かなりの時間と労力が必要である。しかし新学習指導要領では、総合的な学習の時間の削減が見込まれており、活動時間の確保は難しくなると予想される。今後こうした表現活動を継承していくには、年間活動計画を綿密に立てなければならないし、他の教科指導との関連を図ることも必要となってくるであろう。

しかし、今回の活動を通して成長した生徒たちの姿を見て、こうした表現活動の教育効果の大きさを再確認できた。形を変えてでもこうした表現活動を継承することで、温かな人間関係に包まれた「なかまづくり」ができ、それが将来の豊かな「地域社会づくり」に発展すると確信する。

# 発信します！野市小学校の環境教育

—児童が主体的に学ぶ力を高め、地域や社会の一員としての自覚を高めるエネルギー環境教育—

高知県香南市立野市小学校

校長 時久 恵子

## 1. はじめに

本校の太陽光発電施設の工事にかかわった岡本さんが、「私たちの身の回りにある食べ物も服も自動車も建物もそして人間も全て地球の物でできているのですよ。」と語りかけたことがあった。言われてみれば当たり前前のことだけど、私たちの中で「ずっと地球めぐみを受けて生きてきた」ことを意識している人は多くはないのではないだろうか。しかし、今、私たちの暮らしから出る温室効果ガスの増加による地球温暖化は、地球の環境や生物に深刻な影響を与えていて、早急に解決しなければならない問題となっている。

そこで、本校では「エネルギー環境教育」を研究の中心におき、「身のまわりの環境とかかわりながら、自然を豊かに感じ、自ら考え、進んで行動できる児童を育てる」研究実践に取り組んだ。同時に教科学習（特に算数科）で学んだことを生活の中で活用することの指導に重点をおき、児童の学力向上を図ることにした。

## 2. 児童の実態

野市小学校は香南市野市町にあり、高知県東部では最大規模で、学級数26学級、児童数618名である。香南市は高知市へも近く、近年、高知市のベッドタウンとして人口が増加しており、旧来の農家と市街から流入した勤労家庭が混在している。

児童は素直で落ち着いて学習できているが、自ら考え学んだり、主体的に行動したりすることは弱い面がみられる。また、家庭や地域は教育熱心で学校に協力的である。「環境」に対する児童の主な意識調査結果は、全般的に「環境」に対する意識は高いが、実生活で行動することはやや弱い。

## 3. 研究主題について

そこで、研究主題「見て ふれて 学びをひろげる のいちの子」を設定し、研究に取り組んだ。「見てふれて」とは児童が直接体験を通して、①自然を豊かに感じることができる、②身のまわりのできごとから自分なりの問題をもつことができる、③自ら方法を考え、他とかかわりながら問題を解決できる姿をめざしている。また、「学びをひろげる」とは自らが学んだことを多様な方法で表現しそれを地域や社会に発信したり、学んだことを生活の中で活用できたりできることをめざしている。

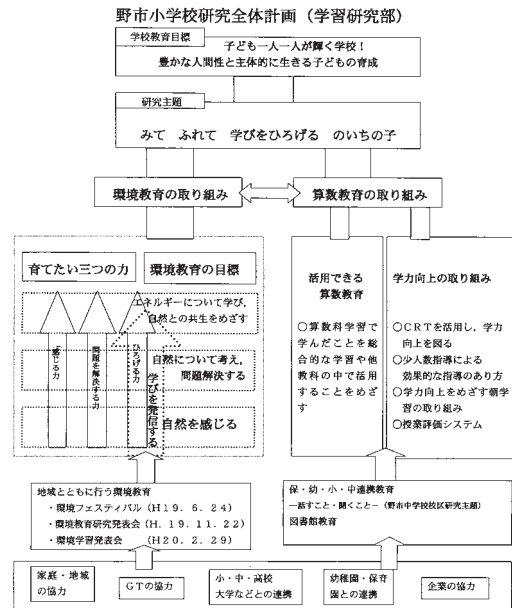
## 4. 研究仮説

子どもの活動を重視した自然を感じる場、人や自然や社会とかかわりながら問題を解決する場、学んだことを広げる場を工夫すれば、児童の主体的に学ぶ力を高めることができるだろう。

## 5. 研究内容・方法

①「環境」や「エネルギー」について生活科、総合的な学習で児童が主体的に学ぶ探究学習を行うことにより児童の自ら学ぶ力を高める。

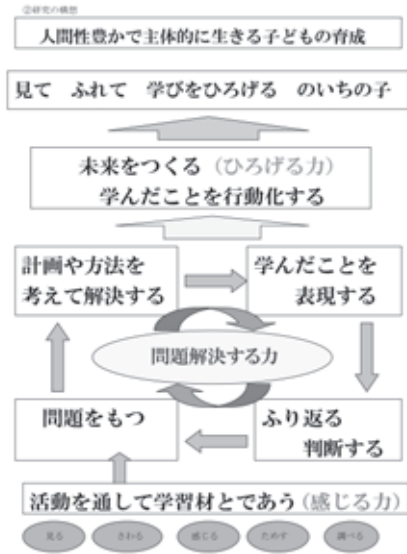
学習を進めるにあたっては各学年の育てたい三つの力を明らかにし、各学年の到達目標を設定する。



②「環境」、「エネルギー」についての学習は児童の発達段階に応じて、全学年で環境に関する学習を行う。

具体的には低学年はエネルギー環境学習の基盤づくりとして、自分の身の回りにある自然を五感で豊かに感じ、思いやり活動できる子どもを育てる。中学年は自然について考え、友だちと協力し、支援を受けながら問題解決できる子どもを育てる。高学年では「地球温暖化」や「原子力」、「自然の中の放射線」などエネルギー問題についても学ぶ。自分の地域について学ぶだけでなく、地球環境について考え、行動し、自然との共存を目指す子どもを育てる。また、地域・各種学

校・関係団体と連携して教育を進めるとともに「二酸化炭素削減」を意図して改修された学校施設を学習材として活用する。



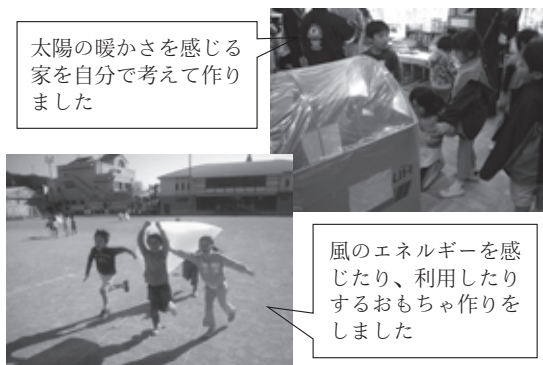
③環境学習を教科学習（特に算数学習）と関連させ、学んだことを生活の中で実際に使うことで、児童の活用力の育成を図る。

④児童がいろいろな表現方法で学んだことを積極的に発信することでその表現力やコミュニケーション能力を高めるとともに、家庭や地域の「環境」に対する意識を高める。

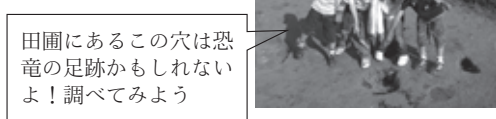
## 6. 教育実践から

### ①低学年の実践から

低学年の学習は「自然を自らの五官で感じる」、「地域の人・自然・社会とかかわりながら学ぶ」を目標にしている。そこで、1年生は「太陽と風のエネルギー」に焦点を当てて、取り組んだ。

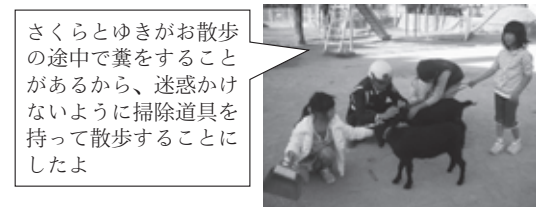


2年生は野市町を学習の場として人・自然・社会に思いきりかかわる学習を行った。



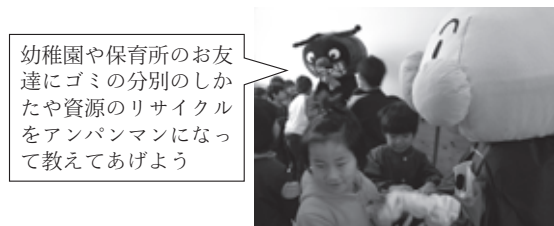
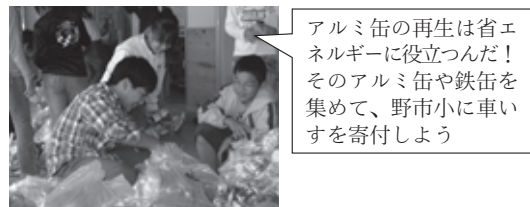
### ②中学年の実践から

中学年は「自分の問題を解決できること」を目標にして、山羊やウズラを飼う、物部川探検、間伐材でツリーハウス作り、地球にやさしい僕たちの学校の屋上ガーデンや中庭づくりを行った。その活動の中で起こる様々な問題を解決しながら児童は自らの経験を広げることができた。



### ③高学年の実践から

高学年は「エネルギー」や「地球温暖化」など今日的な課題にも焦点を当てた探究学習を行った。



室内と室外では最高10℃も違ってくるんだね。冷房や暖房のエネルギーが節約できるんだ！すごいね

④算数学習と環境学習を関連させ、算数の活用力を高める実践から

本校では研究主題である「環境学習」（生活科・総合的な学習）と教科学習（特に算数学習）を関連させて児童の活用力を高めようと実践してきた。ここでは壁面緑化（緑のカーテン）の実践例（6年）を紹介する。

僕たちの学校に緑のカーテンを作ろう！どんな植物がよいのだろうか？蔓植物を植えて試してみよう（総合）

胡瓜、ヘチマ、アサガオ、瓢箪、イリオモテアサガオ、ゴーヤ、山芋、なた豆などを栽培しよう（総合）

イリオモテアサガオはよく茂るね。野市小学校にはイリオモテアサガオが合っているみたいだね！

緑のカーテンの表と裏で気温が違うのか、温度計を使って計測してみよう（総合）

緑のカーテンがある、なしで部屋の温度は2℃違うね。地面だと表と裏で10度も違うんだ！

植物で日陰を作ると涼しくなるね。また、クーラーの消費電力量も抑えることができるんだね。

植物は二酸化炭素を吸収できるけれど、野市小学校の緑のカーテンはどのくらいの二酸化炭素を吸収しているのか、野市小の緑のカーテンの面積を計測して計算してみよう（算数・およその面積、総合・計測、吸収量の計算）

全植物の平均吸収量 $3.5\text{kg} \times \text{面積}426\text{m}^2 \approx 1,491\text{kg}$ ・年1,491kgの二酸化炭素が吸収されることがわかったよ。意外と少ないのだね！（総合）

植物のCO<sub>2</sub>吸収量は少ないけれど、それだからこそ地域へ広げていこう



緑のカーテンの面積を計測

CO<sub>2</sub>吸収量を計算する



このあと児童は「緑のカーテン」を地域へ広げる活動に取り組んでいった。



フジグラン野市で緑のカーテンの効果を買物客にPR



ふれあいセンターや香南市庁舎の壁面緑化に苗を提供する



児童の学習後の感想より

吸収量を計算すると1,491kg吸収していることがわかりました。僕はこの吸収量をみて少ないなと思いました。なぜなら、人間は1日に1kgの二酸化炭素を出すからです。こうなると年間4人ぐらいで効果が打ち消されることになります。僕はこのことを知ってこの緑のカーテンを町中に広げる計画をして出来る限りのことをしたいと思います。人間は、常に自然と隣り合わせて生きており、人間だけが便利に生きていけばよいというのは勝手すぎます。自然は僕たちにとってなくてはならない存在です。しかし、今、人々は自分のためだけに自然を壊します。僕はこの活動を通して、自然に少しでも恩返しをしたいと考えています。

⑤家庭・地域・各種学校・各種団体・企業と連携し、地域社会を巻き込んで進めるエネルギー環境教育

本校では環境教育を進めるにあたり、「環境学習」を通して幼稚園・保育所と連携した学習を行った。また、児童が自らの問題を解決するために必要な専門的な知識・技能の支援を高知大学、高知工科大学、四国電力、(株)森と緑の会、(株)エネルギー環境教育情報センター、香南市など色々な機関と連携して行った。そして、それらの活動を通して児童は実際の生活の中で活発に活動した。実生活とつながった活動は「地産地消」の学習から「高知パレスホテルのレストランで提供されるメニューに採用されたこと」、「住宅展示場ライムで学んだことや建物についての実験結果から、新しく新築される野市幼稚園の建築についての提案をしたこと」、「渡りをするアサギマダラ蝶の食性を調べることから絶滅危惧種フジバカマの植栽活動」、「森林の間伐

材木を材料に児童・家庭・地域の協力で作ったツリーハウス」、「特別支援学級の児童が自分たちの学びをもとに自作したエコすごろくを家庭・地域に配布したこと」など学校という枠を取り外し、児童の学びが地域の温かい支援のもと社会に広がっていった。

また、日曜参観日には親子で体験的に環境について学ぶ「環境フェスティバル」、環境学習の在り方を提案した「環境教育研究発表会」、児童が1年間の学びを地域に発信した「環境学習発表会」を開催し、啓発、教育実践研究などの発信をすることができた。特に親子で学ぶ「環境フェスティバル」については保護者からの継続要望が多く、継続して行われている学校行事になっている。

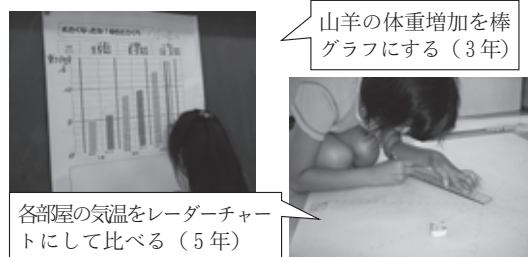
## 7. 成果と課題

### ①児童の成長について

これまでの児童の成長の見取りについては各担任が報告書にそれぞれ記しているように自分の問題を「こだわり」をもちながら、自分たちで解決していくことにより主体的に活動していけるようになった。また、環境に対する意識の向上を図るとともに、「困っている人がいたら助ける77%」、「人の気持ちのわかる人になりたい85%」、「この地域が好き90%」という結果がでている。地域の自然や人、実際の社会とかかわり合いながら体験的に児童が学ぶことは児童の知識や経験、活動空間を広げるだけでなく自己肯定感を高めることになる。

### ②教科学習（特に算数）の活用力向上について

環境について学ぶ中で各教科の既習内容を横断的、実践的に活用することで、児童の理解の強化を図ることができた。自製のゼリーを販売した児童は販売時の教員や保護者とのやり取りや温度の計測などをする中で、数値化して考えることを経験していった。実生活で既習内容を使うことで、実感を伴った理解ができた。また、活用力を向上させるためには指導者も児童に既習内容を活用させるためには、「どう活用させるか」「この学習場面で活用させたい」という指導者の指導にあたっての意識化が必要である。算数科においては「やぎの体重変化」や「教室の気温」などを棒グラフやレーダーチャートなどに表すことも効果があった。また、国語では児童に環境学習のいろいろな場面でその体験や経験に合わせて、感想文、意見文、要約文、新聞記事、パンフレット作成など所謂「生活文」に留まらず、多様な文章を書く、絵やグラフで表すなどの経験を積ませることで表現力を向上させることができた。



### ③野市小学校方式の環境学習の在り方について

#### i 児童の意識の流れを大切に探究学習支援

本校では、児童自身が「子どもの僕たちでも考え、行動すればこんなこともできるのだ」という自信をもたせたいと「環境学習」を題材として生活科・総合的な学習で取り組んできた。そこで、専門的な知識・支援などで大学や地域の方々など学校外の方に児童支援をしていただくときは、講師の準備したプログラムをそのまま実施するのではなく、児童自身の課題や考えを最も大切にして、それらを解決するため支援をしていただいた。このことにより、児童の主体的な学習態度が育成できた。このような支援を可能にする為には、関係各位との協議の時間が必要である。協議には時間を割かなければならないが、話し合い、講師と教員が相互に交流する中で教員もたくさんのお話を教えることができた。このように児童の思考の流れにあった有効な支援をすることで、児童の問題解決能力を育成することができた。

#### ii 連携し、交流しながら児童が学ぶ、大人が学ぶ

環境問題は最近「地球温暖化」の問題が注目され、関心が高い内容である。しかしながら、大人が子どもよりもよく理解できているという内容ではない。今回の取り組みの中で、児童の学びが大人を啓発していくことが明確になった取り組みであった。「子どもにお母さん野市で作った野菜を買いやと言われました。」「お父さん、電気のつけっぱなしはもったいないで。と子どもに注意されました。」という保護者の発言からも児童が自分の行動として、大人に発信していることがわかる例がたくさんあった。これからも子どもの学びを中心にして、「環境学習」に取り組んでいきたい。また、正答のない環境問題を子どもとともに考え続けたいと考えている。

# 運動に親しみ、心身ともに健康な体をつくろうとする児童の育成

～体育科学習指導の工夫と体力向上の取組をとおして～

宮崎県東臼杵郡門川町立門川小学校

校長 児玉 和盛

## 1 主題設定の理由

生活様式の変化に伴う児童の体力の低下や、少年団やスポーツクラブへの加入の有無による運動への取組の二極化が全国的に大きな課題となっている。本校の実態調査結果でも全国と同様、体力の低下が伺えた。【表1参照】

18年度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
男子	1年 69	103	111	105	98	94	97	110
	2年 65	97	99	100	90	96	92	105
	3年 61	107	103	89	96	88	79	103
	4年 60	104	105	98	90	93	86	104
女子	1年 63	100	108	99	92	92	93	112
	2年 61	90	95	100	91	88	89	102
	3年 60	99	104	92	88	83	73	110
	4年 54	99	101	95	81	94	84	98

(全国平均を100%として比較した結果)  
 ①握力 ②上体起こし ③長座体前屈 ④反復横び ⑤20mシャトルラン ⑥50m走 ⑦立ち幅跳び ⑧ソフトボール投げ

【表1 平成18年度の新体力テストの結果】

平成18年度の新体力テストの結果は全国平均比が90%未満の項目が64項目中19項目もあり、最低の項目は54%であった。また、運動好きと運動嫌いの二極化も見られ、休み時間に外で体を動かして遊ぶ児童もいるが、校舎の中で過ごす児童も多く、全体的に外遊びが少ない現状であった。

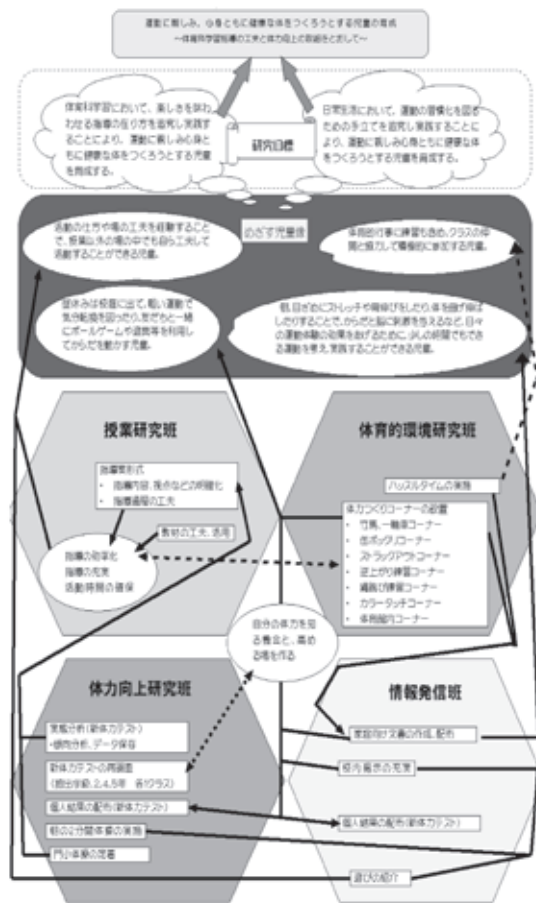
このようなことから、運動の楽しさを味わわせ運動の日常化を図りながら、運動に親しみ、心身ともに健康な体をつくろうとする児童をはぐくむことをねらいとして、研究を行うこととした。

## 2 研究の仮説

研究を進めるに当たり、4つの研究班を組織し、それぞれ次のような研究仮説を立てた。

- 1 体育科学習において、指導過程や効果的な評価方法の工夫を行い、運動の楽しさを味わわせる指導を行えば、自ら運動に親しみ、進んで心身ともに健康な体をつくろうとする児童を育成することができるであろう。【授業研究班】
- 2 体力の実態調査の結果を活用したり、日常的な取組を工夫したりすれば、体力を向上させることができるであろう。【体力向上研究班】
- 3 児童を取り巻く体育的環境の整備や工夫を行ったり、児童が運動に取り組み、活動する場を設定したりすることによって、児童は体を動かす楽しさを知り、自分から進んで運動に親しむようになるであろう。【体育的環境研究班】
- 4 児童や家庭に対して、体力向上についての情報発信を行えば、健康や体力づくりへの意識が高まるであろう。【情報発信班】

## 3 研究の全体構想



## 4 研究の実際

### 1 体育科学習指導の工夫

体育科学習指導の充実をとおして、運動の楽しさや仲間との関わりを体験させ、日常的に運動に親しむ児童を育成することは、児童の体力向上に不可欠なことである。仲間と楽しく活動すること、自分の運動能力に合わせて運動をすることを学習させることで、体育の授業への興味・関心・意欲の向上につながるだけでなく、体育科学習の時間以外の運動に対する意欲の向上にもつながることができると考えた。そのため、授業内だけでなく、授業外でも運動に取り組みたくなるよ

うな「意図的な仕掛け」を学習指導に取り入れることで、運動の日常化を目指した。

#### 《実践例 第4学年バスケットボール型ゲーム》

##### 「仲間との関わり」を重視した指導の工夫

実践では教材として「ポートボール」を扱った。導入時のめあての確認と練習内容の話合い、ゲーム前の練習、ゲーム後の反省を各チームのキャプテンを中心に行わせた。児童同士で話合いをすることで、より関わる機会を多く設定することができた。

その結果、相手の意見を尊重しつつ自分の考えを伝えることができるようになり、ゲーム中にうまくいかないことがあっても励ましの言葉を掛け合うようになった。友達からの励ましや賞賛の声に喜びを感じ、仲間と運動することが楽しいと考える児童が多くなった。

##### 能力に合わせて運動をさせる工夫

実践ではルールの工夫を児童にさせることで運動の楽しさを味わえるようにした。単元の導入時には、「得点になるとき」「ラインからボールが出たとき」「ボールの取り合いになったとき」などの基本的なルールしか与えず、その後の技能の習得状況に合わせてルールを変更できるようにした。ルールについての話合いを学習の最後に取り入れ、ゲームや練習を振り返らせながら意見を発表させた。

単元後半では、バスケットボールの3ポイントシュートのように距離に合わせて得点を変えたり、シュートまでに一定回数以上のパスをまわすようにしたりするなどの意見を採用し、ルール変更をした。

ルールの変更を可能にしたことで、技能の高まりを児童が実感しながら学習を進めることができた。

## 2 体力向上のための日常的な取組

本校においても運動の二極化が見られる。スポーツ少年団に加入していない児童は運動をする機会といえば学校での体育や昼休みの遊び程度である。そこで、数少ない運動の機会を有効に生かすため、また、やらされる運動ではなく主体的に行えるようにするために学年の実態に合わせて運動に関われるようにすることが大切であると考えた。

### (1) 門小ストレッチの考案と活用

全身の曲げ伸ばしや手先の運動を取り入れ、体力の向上のみならず、1日の学習を始める前の体の目覚めにもつなげることをねらいとし



【写真1 門小ストレッチ】

て、毎朝全校一斉に門小ストレッチを実施した。

### 【写真1 参照】

### (2) 「門小体操」の考案と活用

門小体操は体育科学習の導入段階で体操やストレッチと同じように準備運動として取り扱えるように考案したものである。「体づくり運動」を基に考え、ストレッチやペアで行う馬とびなどを取り入れた。また、基本的な運動能力向上のために、反復横とびやバービー運動も取り入れ、音楽に合わせてリズムよく、準備運動を行うことができるようにした。

### (3) 「門川サーキット」の考案と活用

運動場の遊具を使ったものと体育館の運動施設を利用したものの

2種類を門小サーキットとして考案し、主として授業前に活用した。それぞれのポイントには、スーパーカムリウミスズメ



【写真2 門川サーキット】

を最高レベルとする

3段階の運動方法を掲示し、児童が自分の運動能力に合わせて挑戦することができるようにしている。また、児童にはそれぞれのポイントでの運動がどのような運動能力の向上につながるのかを学年に応じて説明したことで、児童が体力向上の意識を持って意欲的に取り組む姿が見られるようになった。【写真2 参照】

### (4) 新体力テストのデータ分析と活用

本校では新体力テストの結果を5月の実施直後に集計し分析をしている。児童一人一人に結果を伝えることで、自分自身の体力の実態を知り、門小ストレッチや門小体操、門川サーキットに目標を持って取り組むことができるようになった。

また、児童一人一人の新体力テストの結果を各家庭に配布することで、保護者にも児童の実

態を知ってもらうことができた。保護者からは「子どもの体力について考えるきっかけとなってよかった」という声もあり、家庭と連携して児童の体力向上に取り組むきっかけをつくることができた。

### 3 体育的環境の整備と運動の習慣化のための工夫

身近にあるものを工夫して遊べる場を作れば、友達と関わりあいながら遊びを工夫することができ、体力の向上につなげることができると考えて体力づくりコーナーを設置した。

#### (1) 体力づくりコーナー

児童が気軽にいろいろな運動や遊びができるように、学校内にある設備や施設を使って体力づくりコーナーを設置した。



運動場には竹馬・一 【写真3 カラータッチコーナー】

輪車、缶ぽっくり、ストラックアウト、逆上がり練習、縄跳び練習のコーナー、校舎内の多目的ホールにはカラータッチコーナーを設置した。【写真3参照】

#### (2) 活動の様子

各コーナーの設置後の児童の変容には以下のようなものが見られた。

- はじめはものめずらしさから缶ぽっくりで遊ぶ児童が多かったが、大きさの違う缶ぽっくりに挑戦したり、友達とうまく乗る方法を話したりしながら工夫をして遊ぶ児童が多くなった。
- 逆上がり練習台には毎日のように児童が列を作って順番を待つ姿が見られるようになった。特に鉄棒を苦手とする児童が積極的に挑戦し、アドバイスし合いながら練習をする姿が見られた。
- 縄跳び練習台では二重跳びに挑戦する児童の姿が多く見られるようになった。また、感覚がつかめると練習台を使わずに新しい跳び方に挑戦する児童も見られた。次第に友達と誘い合いながら毎日のようにさまざまな跳び方に挑戦する児童も見られるようになった。

- 竹馬コーナーでは生活科で経験した低学年の児童が上手に乗りこなすのを見た中・高学年の児童が竹馬に挑戦する姿が見られるなど、異学年交流のきっかけともなった。

各コーナーの設置により、昼休みに積極的に外遊びをする児童が大幅に増加した。今後は体力づくりコーナーを活用したイベントを計画していくことで、さらに児童が進んで運動や遊びに継続して取り組んでいけるようにするための「仕掛け」を考えていきたい。

### 4 児童・保護者への情報の発信

学校での取組や児童の体力の実態、体力づくりの利点などを家庭に伝えることで、家庭でも気軽に運動に取り組んだり、各家庭で体力づくりに対する意識を高めたりすることができると考えた。また、児童が主体的に異学年と交流しながら様々な遊びを知ることで、体を動かすことの楽しさや運動することのよさに気づき、生涯体育へとつながっていくためのきっかけづくりができると考えた。

#### (1) 伝承遊びの情報発信

昼休み時間を利用して、地域で昔から伝え遊ばれていた「ゴムとび」や「田んぼ鬼」などを児童に紹介した。毎回40名～50名が集まり、異学年間で楽しく活動する光景が見られるようになった。【写真4参照】

また、高学年児童の中から積極的に自分たちでも活動を進めていきたいという児童を中心に、「百万馬力クラブ」を作った。はじめは教師主導で活動を進めていたが、現在では「百万馬力クラブ」の児童が主体となって日常的に活動する姿が見られるようになった。



【写真4 田んぼ鬼の様子】

#### (2) 体力向上通信「百万馬力」の発行

保護者に体力向上への関心を持ってもらうための手段の一つとして、体力向上通信「百万馬力」を月一回発行している。より多くの保護者に読んでもらうため、通信の名前を募集したり、通信欄を設けたりして、双方向的な通信になる

ように工夫した。

## ⑤ 児童の変容

研究実践の結果、児童の新体力テストにおける運動能力の変容は以下のような結果となった。【表2 参照】

20年度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
男 子	3年	89	103	102	103	97	103	91	112
	4年	97	96	92	94	95	101	90	107
	5年	96	93	88	85	96	96	82	96
	6年	102	100	94	90	95	105	83	101
女 子	3年	89	106	99	101	94	104	92	110
	4年	98	89	94	83	88	98	79	100
	5年	96	94	101	93	93	99	87	109
	6年	99	93	100	87	86	101	88	103

(全国平均を100%として比較した結果)

①握力 ②上体起こし ③長座体前屈 ④反復横とび  
⑤20mシャトルラン ⑥50m走 ⑦立ち幅跳び ⑧ソフトボール投げ

【表2 平成20年度の新体力テストの結果】

研究実践以前に全国平均比が90%未満の種目は64項目中19項目であったが、そのうち10項目は実践後に全国平均比を90%以上へと向上させることができた。また、実践前は全国平均比が最低の項目で54%だったものが実践後には最低が79%へと向上した。

## ⑥ 研究の成果と課題

### 1 成果

- 体育科学習において、教師主導の指導と児童主体の学習を実態に合わせて効果的に取り入れたことで、児童が主体的に学習に取り組むことができた。また、技能の習得や向上のために授業時間内だけでなく昼休みや休み時間にも同じチームの友だちと練習をしたり作戦を考えたりするなど、運動の楽しさを見出し、積極的に体を動かすことができるようになった。
- 体力の実態を児童に知らせることで、いろいろな運動に目標を持って取り組むことができるようになった。目標を持たせたことで、体育の授業はもとより、授業外での運動や遊びにも積極的に取り組む姿が見られるようになった。
- 門小ストレッチや門小体操を親しみやすい音楽を使って、取り組ませたことで、楽しい雰囲気の中で運動をすることのよさを味わわせながら、継続して運動に取り組ませ、体力の向上に

つなげることができた。

- 学校内の体育的環境を児童の興味・関心に合わせ、教師の「意図的な仕掛け」のあるものへと改善を加えたことで、児童が主体的に運動に取り組むことができるようになった。また、様々な運動を体験させることができ、運動相互のよさを組み合わせて創意工夫をして遊ぶ児童も多くなってきた。その中で友達との関わり方もうまくなり、意見を出し合ってみんなで楽しめるルールを考えたり、うまくいかないときもそれぞれがよい方法を考えたりすることができるようになった。
- 学校での取組や、児童の体力の実態を各家庭に知らせることで、保護者の子どもの体力に対する意識も高まり、学校と家庭とともに児童を育てていくという連携をより強めることができた。また、返信欄を設け、保護者から出た意見も学校全体、保護者全体で共有することができ、学校と家庭で児童の実態を相互に理解しあうことで、実践をより深めることができた。

### 2 課題

- 学習指導要領の改訂に伴い、指導過程や指導上の留意点について更なる工夫が必要である。
- 新体力テストの結果をもとに運動能力の伸びを児童に知らせていくことで、さらに運動への意欲を高める必要がある。
- 今後も児童の実態に合わせてながら体育的環境の整備に努める必要がある。
- 保護者も一緒に関わられるような体育的な行事を企画し実践することで、さらに家庭との連携を強めていく必要がある。

### ⑦ まとめ

今後も研究実践を継続し、残された課題を確実に解決していき、さらなる体力向上を実現していきたい。体力向上をきっかけに基本的な生活習慣や学習習慣の定着へと幅広く児童や保護者の意識を高めることで、本校の児童が一層たくましく成長していけるように研究を深めたい。

今後とも、児童と成長の喜びを共感し合いながら、本校の教育目標である「自ら学び 心豊かに たくましく生きる 子どもの育成 ～子どもがいきいきと活動する学校」の具現化を目指していきたい。

(研究主任 中島 寛)

# 円滑な学校運営に資するための「学校事務」を目指して

— 事務職員も経営者意識を持って —

香川県高松市立花園小学校

主任 新谷 良子

## 1 はじめに

本校の教育目標は「自ら考え、正しく判断し、主体的に実践する、心身ともに調和のとれた子どもの育成」である。その達成のために「確かな学力」（子どもがわくわくする授業づくり）、「豊かな心」（心の育ちとなかまづくり）、「健やかな体」（健やかな体と生命づくり）、「学校力・教師力」（信頼される学校づくり）という4つの柱がある。教師と児童の合言葉は「見つけ、考え、やってみて、一步前進 今日のおぼく、もっと前進 明日のわたし」である。

最近、企業の社訓や取り組みを知ったり、市町村の取り組み（徳島県上勝町の過疎で高齢者の町を活性化させた例や旭山動物園の発想の転換で来客数を増加させたこと等）を知るに付け、学校も変わらなければという思いが強くなっている。どの取り組みも発想が豊かで、ないものを作ったり持ってくるのではなくそこにあるものを活かすことで、その中の職員や来客、地域の人達がいきいきと暮らすことができている。

学校も同様であろう。職員一人一人がやりがいを持って取り組める環境、児童が学びやすい環境を整備することで、いきいきとした学校になるはずである。学校事務職員の仕事も教育目標達成のためにするものでなければならない。私は学校という教員主体の組織の中で唯一の行政職という職種を活かし、学校運営を円滑に行うためのスタッフとしての役割を果たしたいと考えた。

## 2 目標の設定

4年前に赴任した当初から、教育環境を整えるために必要と感じた事務改善をその都度行ってきた。その中で、より教育効果を上げるためには、実際に児童の指導に携わる教員へ働きかけたいと考えようになった。また、「信頼される学校づくり」のために事務職員として積極的に貢献したいとの思いも強くなり、以下のような個人目標を順次設定し、取り組んだ。

- ・事務改善で能率化を図る
- ・教材備品の効果的な活用を図る
- ・経営者意識をもって取り組む

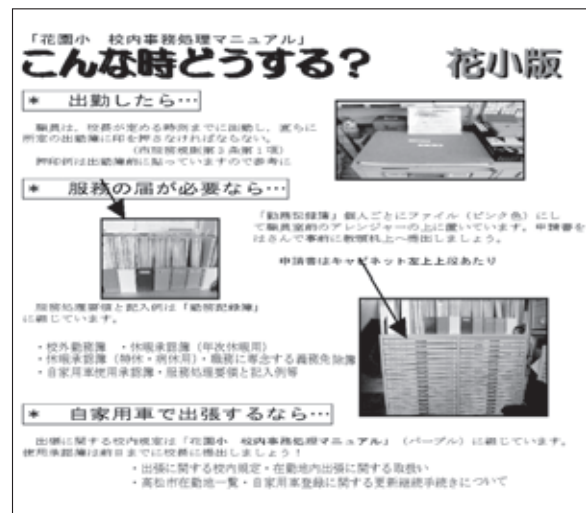
## 3 具体的な実践内容

### (1) 事務改善で能率化を

1年目の個人研修目標は、異動後の新鮮な目で改善が急務と思われた「職員室の物品、書類の効率的な保管」である。保管庫に無造作に詰め込まれた状態では消耗品を探す時間が無駄であり、奥の方にあるものは取り出されないまま古くなり、そのうち使えなくなることもある。無駄をできるだけなくし、少ない予算を執行するのが事務職員の「仕事」でもある。

消耗品の整理は、そのまま使える保管庫は利用した上で、種類ごとに仕分けできるような、活用されていない整理箱を校内を回り探してきて、職員作業で数人の教員に協力してもらい配置換えを行った。一種類の消耗品は一つの引き出しに入れ見出しを貼り、誰が見てもすぐ分かるように仕分けをした。教員からもとても見やすく使いやすいと声をかけられた。

各種書類については、古い様式を破棄し現在使用されている様式を入れ直し、見出しを新しく貼り直した。校内用に作成した様式等はより使いやすいように事務職員として意見を出して変更をしていっている。公文書の管理等校内の事務処理は、前任者の提案で行っていた方法をそのまま引き継ぎ、修正を加えながら「花園小 事務処理マニュアル」としてまとめ、全職員が持ち活用している。



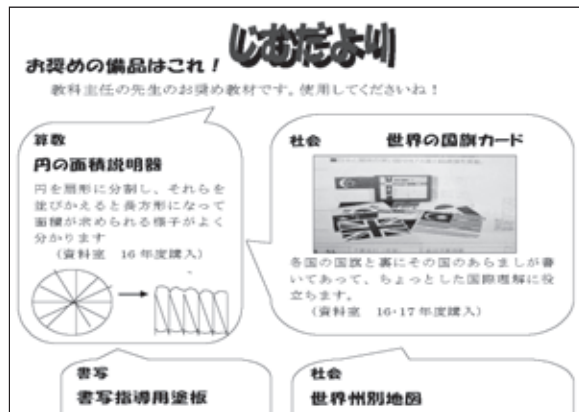
(2) 教材備品の効果的活用のために

教材備品は、忙しい学校現場にあって購入・活用・管理が後回しになる可能性がある事務である。活用頻度の高い備品もあるが、眠っている備品も少なくない。そこで赴任2年目の個人研修目標は、児童のための教育環境を整えることに目を向けていった。確かな学力を身に付けさせるための支援（子どもがわくわくする授業づくり）を意識した研修目標である。

①「教材備品の効率的な購入計画や効果的な活用を促す」ための広報

ア「現有備品や新規購入備品を紹介する工夫」

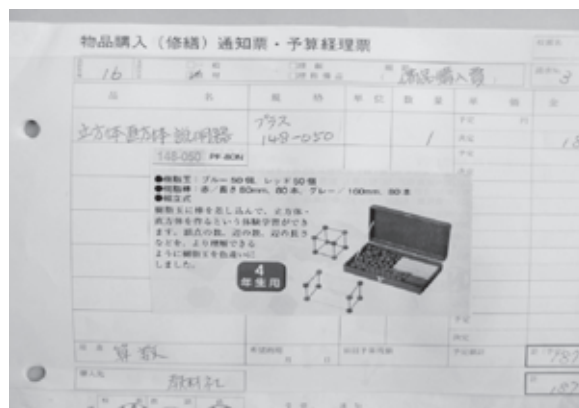
新規購入備品は、現物を終礼等で教科主任に必ず紹介してもらう。また、購入した備品一覧や教科主任の奨める備品を紹介する「じむだより」を配布する。



イ「目で見て分かる備品管理票の工夫」

どんな備品があるのか、教科主任に把握してもらうために、現有備品のカタログを切り取り備品管理票に貼り付けることにした。古い備品でカタログのないものはデジタルカメラで撮影したものを貼る。

(備品管理票にカタログを貼った例)



本校では備品整理を年3回行っているが、視覚で把握できると、管理の効率化につながるだけでなく、活用しやすい状態も保てると考え、情報を即時に提供できる状態にしている。

ウ「教職員の意識を知ること」

管理職から「教職員にアンケートを実施し、その結果を還元することで、教科主任の意識を変え、自覚を促すことになる」というアドバイスを受け、17年度の終わりに教職員にアンケートをとった。結果は次の通りである。

Q教材備品をどのくらい利用するか (15名中)
よく利用する…………… 2名
時々利用する……………12名
あまり利用しない……… 1名
Q今年度購入した備品を知っているか (15名中)
いくつか知っている……… 6名
ほとんど覚えていない…… 9名

一回くらいの周知では何を購入したか覚えていないし、自分に関係のない備品は興味を示さない様子も窺えた。18年度は、前年度に次年度の購入計画を立てるとい前任者が行っていたシステムを続けていくことと、引き続き教職員の協力を得ながら何度も繰り返し周知していくことで、備品の活用を更に進めていこうと考えた。

②初めての「備品探検ツアー」

昨年度具体的に行ったことは、年3回の備品整理の中で、7月末の備品整理に合わせて「備品探検ツアー」を提案したことである。教職員からは予想以上に良い反響があった。

(備品整理資料より)

**備品の効果的な活用について (お願い)**

**※どんな備品があるのかわかっておきましょう!**

**【教材備品探検ツアー!】**

校内にはどんな備品があるかご存知ですか。保管場所等教科主任に聞いたりお互いに情報交換をして活用してくださいね。今回教科主任をツアーガイドにみんなでどんな備品があるか見て回りたいと思います。

1, 日時 **8月1日(水) 15:00~16:30**  
(コンピュータ室 放送室は7/30)

2, 要領 主として特別教室を見てまわる。教科主任が備品の紹介と保管場所、使用方法を説明してもらう。  
(他に見て回る場所があればお知らせください。)

8/1 (水) **音楽室** → **※理科室** → **体育館** → **家庭科室**  
音楽主任 8分 理科主任 15分 体育主任 10分 家庭科主任 8分

→ **図工室** → **※資料室** → **生活科室**  
図工主任 8分 社.算.国 20分 生活科主任 8分

7/30 (月) **放送室** → **コンピュータ室**  
メディア教育主任 20分

「備品探検ツアー」とは、教科主任がツアーガイドとなり、担当教科の備品を全職員に紹介しながら特別教室等を回るというものである。次に示しているのは、ツアー後の感想をまとめた「じむだより」である。

**じむだより**  
**教材備品探検ツアーをしてみよう**

【みなさんの感想から…】

- ・いつも授業前に急いでさしに行くくらいなので、今回のツアーはよかった。
- ・もう少しゆっくり自分で見ておくとよいと思った。
- ・知らないものがいろいろあるのがわかった。
- ・知らなかった備品がありました。宝物を発見した気分?!
- ・理科室にとってもいいものがあった。(心臓の模型) それからとてもきれいに整理整頓されていて使いやすいなあって思った。家庭科室も誰かきれいにしといてえー……””調理用具を一新したい。
- ・理科室に心臓の仕組みがよくわかる模型があるのを初めて知った。6年の理科で使えそうだった。
- ・備品整理の前に備品をもとの場所に返却してほしい。どこにあるのか探さなくてはならない。
- ・知らないものがある。家庭科室のガラス棚の中、準備室のよくわからないものなど
- ・図工準備室に使ったことがないようなものが多い。
- ・資料室にある古い教科書は必要なのですか。いらぬものを捨てて算数の備品をそこへ戻したいのですが。その方が使いやすいのですが…。
- ・職員作業(短時間でも)を入ると、片付くと思えました。
- ・ロッカーなどに片付けるときは、その棚や扉などに物品名を明記しておくことが大切。(誰が見ても分かるように)
- ・掲示の見直しがあるなあと思いました。

【購入してほしい…】

- ・跳び箱運搬車
- ・小さめの跳び箱
- ・水書板
- ・図工ネットボード ← 不足であれば消耗品で購入。
- ・画用紙を乾かす棚 ← 今年度1台購入しました。
- ・プロジェクターと実物投影機 ← 今年度1台購入して4台

ご意見ご感想ありがとうございました。  
備品はもちろん先生方が使いやすいものがよいですが、

どんな備品があるか、どんな整理の仕方をして参考になっているか参考になってよかったです。今後も夏休みに実施したいと思っています。

皆さん、使用後はすぐに返却をお願いします。

古いもの使えないものは整理したら考えています。3月の職員作業で、資料室・特別教室・準備室等

各教科に必要な表示ラベルを作ってもらい、貼りましたね。

教科主任さんは後期または来年度の購入計画の参考にしてくね。

私も一緒に回ってみて、他の教職員と同様に次のような発見があった。「どんな備品があるか知らない人が少なくない。保管場所が分かっていない。授業前に慌てて備品を探すこともある。保管場所の棚の表示がなく探す手間がかかる。ラベルが古く見にくい。不要なものがあり整理が必要である。」などである。このことから帳簿管理にとどまらず自分の目で確かめることも大切であると思った。

早速、棚の表示用ラベルをパソコンの堪能な教員に作成してもらい、教科主任に貼ってもらうよう依頼した。そして、意見に出ている特別教室と資料室の整理整頓は次年度の作業計画に入れることにした。

今年度も「備品探検ツアー」を行ったところ、次のような感想が出てきた。

- ・資料室や特別教室の整理ができてすっきりした。
- ・教材資料がたくさんあることが分かった。
- ・新しく購入した備品の場所と使用方法がよく分かった。
- ・各特別教室の掲示等環境整備の必要性を感じた。
- ・学年で使用する備品の置き場所を使いやすい場所に変えることにした。不明だった備品がツアーのときに出てきた。年1回のツアーはやはり大事だと思った。
- ・ラベルが棚に貼ってありどこに何があるかよく分かった。「この備品は〇〇に使うとよい」と学年や単元名、使い方等を具体的に説明してくれたのが良かった。

- ・クイズ形式で単元で必要なものを用意したりして、教科主任が必要なものを把握する機会にしてもよい。
- ・刃物等の危険な備品を入れた棚の鍵の置き場所を管理できるようにきちんと決めておく。

上記のような感想から、「教職員は自分の担当学年で使う備品を中心に見ているようなので、毎年ツアーを行う意味がある」また、「新しく購入した備品を知る機会でもある」そして「危険物の管理をするための新たな課題も見えてくる」といったこと等から、「備品探検ツアー」の意義が再確認できた。教科主任も昨年と比べて、説明方法を工夫している様子が窺えた。

早速学校として対処したのは、危険箇所と児童が扱う鍵との保管場所を分けたことである。ツアーの際に思いがけなく電気設備の危険箇所が見つかり、すぐに修理したということもあった。

また、教職員から「クイズ形式での説明をしてみよう」といったような次年度へのアイデアをもらったので、工夫していきたいと思っている。

### ③計画と実践と評価と改善

昨年度末には学校評価の中の一つの項目として「施設設備の点検を行い、教材備品を効果的に活用できたか」という項目で〈3.2〉という評価点があった。一昨年度には同様の項目で〈2.6〉だったものが、備品を印刷物で何度も周知したり、主任に現物を紹介してもらったり、「備品探検ツアー」という目新しい内容を取り入れることで結果として評価が上がったのではないかと考えている。

昨年度には「学校評価」よりもっと細やかな「備品に関する評価」を別に行った。評価結果から教職員の意識もよく分かり、困っていることや前向きな意見を知ることができ、事務職員としてもできるだけ希望に添えるように改善していこうという意識を持つことができた。

来年度も今年度の反省を活かし、「効率的な計画や効果的な活用」を目指し、更に工夫をこらし、「備品探検ツアー」を実践していきたいと思う。

### (3) 事務職員も経営者意識を持って

今年度、初めて校長に「事務部経営案」を提出した。次のページのような目標と内容である。

教育環境を整えることと共に「信頼される学校づくり」のために、事務職員として何をすべきかを考えたとき、学校内での信頼を得ること、次に保護者の信頼を得ること、そして地域の方や校外の様々な方の信頼を得ることだと考える。

## 事務部経営案

### 《子どもがわくわくする授業づくり》

学力向上の手段のひとつとして教育環境を整えるため、教材備品の効率的な購入計画や効果的な活用を促す。

- 計画的な購入のために
  - ・前年度の比較的余裕のある時期に計画を立てる  
第1回前年度計画（2月）前年度主任を中心に  
第2回当年度計画（4月）前年度末備品に関する評価を参考に2月の計画を検討
- 効果的な活用のために
  - ・購入備品の紹介 事務職員からの購入備品の紹介と教科主任から現物の紹介を必ず行う。
  - ・何品かの備品の利用状況を調べ、周知する。
  - ・備品整理を年3回行い、管理状況（修理廃棄）を調査し使用できる状態にする。次年度の購入計画の参考にする。
  - ・資料室、特別教室の整備と備品の把握  
備品整理の時間をとり職員全員でどのような備品があるか確認する。（備品探検ツアー） 廃棄物品・不要物品を処分する。
- 職員への啓発
  - ・終礼等を利用し、購入備品の紹介や備品整理の結果等その時々周知する。

### 《信頼される学校づくり》

- 服・給与・旅費・財務等の教職員への情報提供を迅速に行う。「じむだより」を時期に応じて発行する。分かりやすい紙面、分かりやすい説明を心がける。（結論が先、説明は後）
- コスト意識を持ち、限られた予算の中で環境整備を行う。まず、自分の目で確かめて状況を把握する。
- 電話・来客の応対
  - ・2回のコール音で受話器をとるよう心がける。
  - ・できるだけ懇切丁寧な応対を心がける。
  - ・学校内の行事や児童の動き・職員の動静等、問い合わせに關してはすぐに答えられるよう把握しておく。
- 諸費自動振替について
  - ・自動振替がスムーズに行えるよう保護者へ理解を求める。口座確認のお願いを文書で配布する。未納の集金口座確認の事務を間違いないよう行い保護者の信頼を失わない。
- 常にP-D-C-Aサイクルを念頭に置いてよりよい方法を考える。
- 管理職に児童・教職員その他事務全般について気になること等あれば早急に報告・連絡・相談をする。

〈備品整理やその評価等の結果や事務情報等は職員にその都度周知する。校内の情報を共有することで全員に参画意識をもってもらい開かれた情報管理ができるようにする〉

本校のような児童数300名くらいの中規模校の強みは、職員室で仕事をする事が多い事務職員にとって校内の情報がほとんど把握できることにある。職員間のコミュニケーションもとやすく、周知徹底が図りやすい。管理職はじめ他の教職員との協力体制が作りやすいことも強みである。

そこで、一番私が基本とするのは、「良いと思ったことは気がつけば、今できることを今すぐ実行する」ということである。学校運営がうまくいく秘訣は、知り得た情報を的確に誰に伝え、どう処理するかで決まると考える。どうすればうまく伝わるか、伝わらなければ次にどうすればよいかを常に考えながら仕事を進めていくことを意識している。

一つの例として、校内の現職教育で「接遇マナー研修」を受けたのだが、大変勉強になった。このことを残しておけないものかと考えたとき、目に見える形で掲示することを実践してみたのが次の写真である。

（お茶出し後退室する時）

（研修内容をまとめて）



（食器戸棚に掲示してある様子）



公務全般で、自分の分掌ではない分野でもこうした方がよいのではと思うことは、積極的に提案している。管理職はじめ他の教職員ひとりひとりが経営者であるという意識を持って仕事に臨むことが学校運営スタッフの一員としての仕事である。何かを動かすために多くの歯車が回るとき、歯車と歯車の間に潤滑油が必要のように、その潤滑油の役目を今後担って行きたい。

## 4 課題及び今後の取り組み

これからは「信頼される学校づくり」のために校外にも目を向けなくてはならないが、事務職員の立場から情報を発信していないのが現状である。保護者や地域の方からの電話や来校されたときに心地よく思っただけのように対応したいと思っている。そして行政職員としての見方や考え方で学校を理解していただけるような情報を校外の方にも「学校だより」等で提供できるようになればと考えている。

また、「学校事務」はその事務量が年々多くなり教員の負担が問題となっているが、事務職員一人ではすべての事務をこなすには無理がある。教員の負担を減らす為にもっと効率化していく必要がある。一人の力では限界があるが、共同実施グループとして教育支援ができるのではと考え、現在グループで教務事務や会計事務等の支援を研修として取り組み出したところである。児童と教職員が楽しい学校と感ずるように、自分自身が楽しく仕事ができるように心がけていきたい。





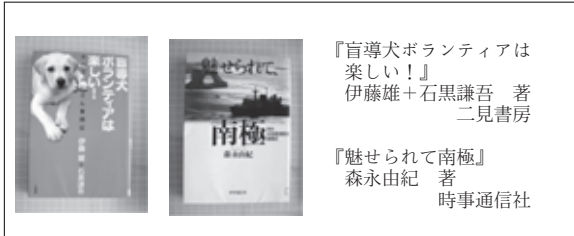


(8) 「だいすけ持久走奮闘記」をつくろう！

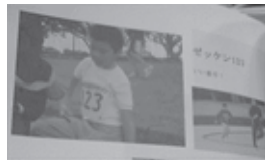
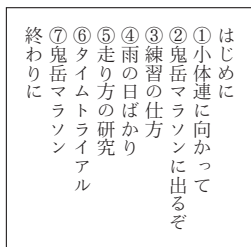
3学期に入り、書きためた作文や、記録を整理することにした。同じ題材でたくさん作文があることに驚き、「本になりそうだ。」とつぶやいた。

①構成を考える

数冊の「奮闘記」を紹介する。



目次を見て、どんな構成になっているか読み、「だいすけ持久走奮闘記」の構成を考えた。



②使う写真を決め、一言添える

③「はじめに」「おわりに」を書く

④製本する



体を動かすことは好きだけれど、細かい作業が苦手。しかし、この時ばかりは1mmもずれないようにと真剣に作業していた。

おわりに  
小体連が終わった。三分九秒。今までの最高記録より十九秒縮まった。まだいけると思った。  
四月には出る気がなかった鬼岳マラソン。記録は八分五十秒。取り組む前は十分ぐらいたったから、約一分ちぢめた。取り組んで本当によかった。  
毎日、持久走の練習をした。今までの自分とちがうところ。藤原先生に聞いたこと。練習方法が分かった。記録を取ったこと。分かったことを書き、悪いところを直した。写真にもとってみた。フォームを直した。雨が降り続き、練習が思うようにできないこともあった。  
もし、記録を取らなかつたら、頭の中だけではこんなふうには考えられなかったと思う。書くというこでいかにがんばったことが少し変わった。書くことで、よく考えることができる自分になった。



⑤帯のプレゼント



担任から半年間の努力をたたえて、本の帯をプレゼントした。本の帯作りの見本として、次の学習にもつながる。

成果

かくことの向上

①目的・目標を持って、その達成のために「かくこと」を位置づけることができた。「かくこと」を目的としない。手段とすることができた。

②そのために6月から12月まで半年間にもなる「かくこと」ができた。

③半年間も継続することができたが故の効果が「書くこと」に得られた。

- 目的や相手意識を持つようになった。
- 文の無駄が減った。
- 主語の違う文がたくさん書けるようになった。
- 文字等伝わりやすさを考えるようになった。

④「かくこと」は自分を見つめることである。毎日の記録の中から積み重ねていった。

生き方の向上

⑤自分で考え、行動しようとする姿勢が出てきた。

- タイムを縮めるために積極的に聞いたり、調べたりすることができた。
- 目的をもって練習する姿勢が出てきた。

⑥タイムは向上し、自信やさらに次への意欲へとつながった。

題材とした「体育」の向上

⑦体力と練習の工夫と持久力の向上（基本学習）

⑧タイムの向上（発展学習）

800m：3分45秒→3分9秒

2km：9分22秒→8分18秒

教師の指導力の向上

⑨「かくこと」と「体育」とのリンク化。

「かくこと」だけでここまで「かく力」はつかなかった。本気になってかく価値のある「持久走」という題材があつてこそである。

⑩いろいろな「かくこと」の工夫

- 報告文
- 記録表
- 連続コマ写真 等

⑪アドバイスの仕方

- 「かくこと」：短冊・場面メモ等の活用
- 題材：かく価値があり、目標が達成されるもの

⑫教材開発・教材の提示の方法

- 児童の成長に合わせて、「かくこと」の向上につながる教材を提示する。

⑬取材法・構成表指導の工夫

- 説明文、児童の作品（作文）、参考図書等の利用

---

---

## 第14回 日教弘教育賞

教育研究集録 第20集

---

平成21年 3月26日発行

編集・発行 財団法人 日本教育公務員弘済会

URL : <http://www.nikkyoko.or.jp>

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6  
教弘会館内

TEL 03-3354-4001

FAX 03-3354-4068

印 刷 株式会社 篠原印刷所

〒422-8033 静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL 054-286-5141

---

---